FORTUNE　FAVORS　THE　BRAVE（仮題）

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＯＲＴＵＮＥ　ＦＡＶＯＲＳ　ＴＨＥ　ＢＲＡＶＥ（仮題）

【Ｎコード】
Ｎ１４７６Ｐ

【作者名】
朋次郎

【あらすじ】
題名は変わる可能性が大です。

プロローグその1

プロローグ

このお部屋のあるじは「運命の女神さま」でいらっしゃいます。ある日久々にお部屋に在室されていたので、3時のおやつの時間を待ちかねるようにして私はお茶とお菓子をリザーブしにいきました。女神さまはいつもお忙しく過ごされていてめったに帰室されません。お茶を運ぶのは久しぶりでした。

私がお部屋に入ると女神さまは窓から下界の様子を見ておいでした。在室の折りはいつものことなんですが、いつもよりも熱心にみておいでのようです。楽しそうな表情をしておいでした。それで私はお茶とお菓子をテーブルにおいて女神さまのおそばに立っていました。お話をしていただけるのを待っていたのです。

やがて女神さまはこちらを向いて話しかけてくださいました。

「やあこんにちは、この部屋に戻ったのも何ヶ月ぶりかね、やれやれ、どうしていつもこう、いそがしいのでしょう」

「おつとめ、おつかれさまです」

「秘書の役目も大変でしょう。あとで留守中にたまった仕事とかまとめて報告してちょうだい」

「はい、わかりました」

女神さまはテーブルに近寄られ、立ったままお茶をすすられました。何ごとかを考えておられるようです。私はひそかに、また新しいことをはじめられるかもしれない、と思いました。

女神さまはそばにあるクッキーもおいしそうにかじりなさると、ひとり言のようにつぶやかれました。

「人間のいる世界はあいかわらず混沌としている。そう、あいからわず。多分、永遠に、」

女神さまのお背が高いので、私はお顔を見上げながら次の言葉を

待っていました。
「いろいろな考えをもつ人間達がいろいろな世界を作っています。好きなようにさせています。でも、どこの世界でも変わらないもの、同じものもいくつかありますよ。その1つは小さな子供達」
「はい」
「つまりね、自分の見たもの、聞いたもの、心に感じたものを素直に表現できるのです」
「はい」
それは私も大いに同感でした。それで私も言いました。
「子供は無邪気でかわいらしいものです。それがどうして争うことをするようになるのでしょうか。自分や他人の心や身体を傷つけられるようになるのでしょうか。私は特に戦争という言葉が存在するのが嘆かわしくてなりません」
女神さまは大きな肩と胸をひと揺すりされると、口を真一文字に結ばれて厳しい表情をなさいました。もしかしたら私の言う言葉がお気にめさなかったのかも。差し出たことを申し上げてしまいました。
でもすぐに表情が明るく輝きました。これは女神さまが新しいことを思いつかれた証拠でした。私はわくわくして、何をされるのかを待っていました。
女神さまは言葉を続けられました。

プロローグその2

「私は今、人間の国から5つを選びそこの王女たちを選びました。年は全員7歳になったばかり。王女たちを同じ時、同じ場所に1か所に集め、一緒にいろいろな国をみせてあげようと思います。

見せる国は次の5つです。

水の国、
緑の国、
空の国、
美の国」

私はそれを聞くと思わず驚きの声が出てしまいました。

「女神さま、それらはいずれも生身の人間では行くことのできない国ではありませんか」

「私の選んだ5人はいずれも年の割には強い自我と自尊心を持っている。でもまだほんの子供で7歳だ。

私は彼女達がそれら5つの国を見て何を感じて何を得るかを見てみたくなった」

「はあ、」

「おもしろそうだろう。過去いろんな思いつきで人間や国をいろいろと導いたが今度は趣向を変えてみよう」

「確かにおっしゃられるとおりかもしれませんね。私自身もあの5つの国は行ったことはありません。名前だけはよく聞きますが。連れて行ってやればきっと王女たちも喜ぶでしょう」

「喜ぶとはかぎらないよ」

私は黙りました。

そうです。この旅行を思いついたのはこの「運命の女神」さまなのです。一筋縄ではいかない思慮深い女神さまなのです。

女神さまはおかしそうに私をご覧になりました。いたずらっぽい

目つきです。
「そうだったな、お前も行ったことはなかったね。じゃ、お前も見てみるかい？王女たちの旅行がどうなるか。楽しいか、それとも苦しいか。どう？見定めてみたくないか？」

私は思いがけない仰せに喜びました。
「ええ、ぜひとも！５人の王女たちと一緒に行かせてもらえたらうれしいです！」
張り切ってそう返事すると、女神さまは手を振って笑われました。
「一緒に行動なんてさせやしないよ。お前はただ、ここで見ているだけ。ほら、私の鏡をかしてあげよう。これで見ると選ばれし５人の王女たちが何を見て何を考えどう動くかがわかるから。そう、お前が望むならばそれを何かに書きとめたらいいよ。後で見るときっと何かがわかってくるだろう」
私はそれでも満足でした。

それで女神さまから小さな鏡を貸していただきました。お色は銀色です。それは私の掌にすっぽりと収まるくらいの小さなそして何の飾りもない丸いだけの鏡でした。それなのにそれはずっしりと重くまた吸い込まれそうな位、磨きこまれてきらきらと輝いていました。
私は自分の顔を見ようと覗き込みましたが鏡のはずなのにそれは何もうつしませんでした。

「じゃあ、５人に会ってくるよ」
女神さまはくるりと背を向けて窓へ向かって歩かれました。
窓の景色は虹色のもやがかかっているだけで今どこにいるのか見当もつきません。ああ、これは人間の世界へ直行されるおつもりでしょう。

一体にこの女神さまは神殿の出入り口を利用されたためしはございません。いつも時間を惜しまれて窓から出入りなさるのです。きっと窓から自分の生きたい世界を自ら引き寄せて行き来なさるのでしょう。

飾り気のない衣服、そっけない態度、味気のない調度品。

でも私の女神さまはとてもとても良い女神さまなのです。人間達のためにいつもよかれと思うことばかりなさいます。

私は尊敬のまなざしで女神さまの後ろ姿を見送りました。

4，5歩も歩かれるともうお姿は見えなくなりました。

後に残された私は鏡をそっとテーブルの上に置きました。そして大慌てで自分の居室に戻りそこらにちらばっている紙きれを集めました。腕に抱えられるだけの紙を持ってあるじのいなくなった元の部屋に戻ります。

私はお茶とお菓子をどけてテーブルに紙を置き、椅子に座りました。ペンとインクもちゃんと用意しました。

と、いきなり鏡からまばゆい光が出ました。その光は窓越しに虹色のもやを照らします。

私はこれを見ていれば5人の王女たちの行動や女神さまのご様子がわかるのだと悟りました。それで見やすい位置に椅子の向きをかえたりして準備しました。

それからはもう夢中で鏡が映し出したものをそのまま書き留めはじめたのです・・・・。

女神が選んだ5人の王女・砂漠の国の王女マルキン

マルキンの国は砂漠の真ん中にありました。いつも乾いた風が吹き、乾いた空気で満たされ乾いた土だけがありました。が人々は身の周りを美しく整えて楽しく暮らすすべを知っていました。

壁掛けやじゅうたんに凝る人が多いので織物が盛んでしたし、砂嵐に耐えられる石造りの住居はそれぞれに姿かたちに趣向を凝らす人が多いので建築の盛んでした。

マルキンはこの国の第一王女でした。それなのにわずか数人の召使とお城の片隅で暮らす毎日を過ごしていました。　彼女の風貌は、褐色の肌、大きな黒い瞳、高くすっきりとした華、小さなかわいい紅い唇、腰まであるウェーブのある真っ黒な髪。

そして顔全体を覆ういやらしい緑色のあざがありました。

誰でもマルキンの顔を見るとぎょっとして後ずさりするのでした。

そうです。

このあざのせいで王女でありながら小さいころから幽閉の身の上になっていました。あざはうまれつきのもので誰が悪いわけではありません。もちろん最初こそマルキンのお父様やお母様である王様、王妃様は大層心を痛めました。　そう、あらゆる腕の良いお医者様に診てもらいましたとも。

でもあざは一向に薄くもなりません。それどころか年がたつごとに、より強い緑色になってきます。おまけに夜になるとぴかぴかと光るようになってきました。

お医者様はみんな首をかしげるばかり、誰もあざを治すことができませんでした。

お母様である王妃様はまだ幼かったマルキンを抱いてせっかくこんなにかわいい赤ちゃんを授かったのに、と毎日泣いておられました。

マルキンが3歳になったころ、国一番の占い師が王様に進言しました。
「おそれながら王女様のこのあざは一生取れないでしょう。なお悪いことに国を滅ぼす元凶になるという卦（占いの結果）が出ました」

王様はこの占い師の言葉を信じてしまいました。国のためにマルキンに死んでもらおうと決めました。
王妃様はこのむごい処置に泣いて反対されました。王様だってできることなら自分の子供を殺したくありません。
2人で相談した結果、マルキンは死んだことにして王室の離れの1日中、日が差さない暗い部屋でひっそりと生きてもらうことにしました。
月日がたつごとにいつしかマルキン王女の存在は忘れられていきました。
王様と王妃様はやがて次々に生まれてきた子供たちに囲まれて幸せに暮らしていました。王様はあの子を死んだことにしてよかった、災いが除かれて良かったと思い、もう何も心配しませんでした。
王妃様も次々に生まれてくるかわいい赤ちゃんをかわいがるばかり。気の毒な一番年上のマルキンを忘れてしまったかのようです。

マルキンは日の差さない暗い部屋で一日を過ごします。　顔のあざから出る緑の光の中で字を覚えました。このあざから出る光の中で召使と一緒にご飯を作って食べました。時々部屋の壁に耳をつけて町の中の様子を音で聞いて楽しむのでした。鳥の鳴き声も町のお店の売り子の声もみんな知っていました。
でも一番好きなことは本を読むことでした。ほとんど一日中、読書をして過ごしました。
マルキンは賢かったので王女である自分がここにいるのはあざのせいだとわかっていました。そうです。このあざがあるゆえに王様や王妃様に嫌われ忘れられている状態にあるのだとよくわきまえて

いました。
　自分が見にくいのは承知でしたがいろいろな本を読むうちに人間の価値は容姿や地位ではないとわかってきました。また1回しかない人生をどう生きていくのかが神様から与えられた宿命だと思うようになってきました。こうしてマルキンは物事を良い方へ良い方へと、考える明るい性格になりました。
　召使の一人がそのあざさえなければ国の第一王女様でいらしたのにと残念がるとマルキンは笑いました。
「あら、このあざにだってとりえはあるのよ」
　召使に親しげに語りかけます。
「このぴかぴか光るあざのおかげで真っ暗やみの中でもすいすいと部屋を歩けますもの、まるで猫のように、ね、悪くはないでしょう？大好きな本も読めるし。どれだけ助かっているか。ね、本当に悪くないでしょう？」

　やがてマルキンは7歳になりました。そしてこう思いました。
　私はもう読み書きはできるし、本のおかげでずいぶんと賢くなってきた。そろそろ外へ出て行ってもいいころではないかしら。
　でもこの国にいる限り私の居場所はないでしょう。いっそ遠いよその国へ行きましょう。ここよりももっと広くて明るくて住みよい国があると思うから。
　そこではきっと自分にあった友達もたくさんできるでしょう。
　行きましょう・・・、
　行きましょう！

　マルキンはそっと外へ出ました。
　外は夜でした。
　星も出ない夜でした。
　まわりは真っ暗です。
　でもマルキンは平気でした。あざがぴかぴか光りますのでその輝

きを頼りに夜道を歩いていけるのです。そこへ緑色の光を怪しんだ衛兵たちが追いかけてきました。マルキンは逃げることもせず立ち止って顔を振り向けました。異様なあざにぎょっとした衛兵たちは剣を構えました。

マルキンは剣を恐れずしっかりとした姿勢で自分がこの国の第一王女であると告げました。

私は今からこの国を出てもっと住みよい国を探しに行きます。

私が昼間に出歩くときっと皆が騒ぐので夜のうちに出ていきます。

落ち着ける場所が決まったら便りを出しましょう。

王様と王妃様に元気でいてください、と伝えるように命じました。

この堂々とした態度に衛兵たちは何もできず黙ってしまいました。

マルキンは城門に向かって歩きました。夜中なので人通りはなく静かです。あざの光を頼りに歩いているとすぐ縄文が見えてきました。足を早めようとするといつのまにか自分が森の中を歩いているのに気付きました。

私の国、砂漠の国にこんなにたくさんの木が生えているところなんてあったかしら・・？

驚いて森の中を見回します。今まで歩いていた砂道は消えてなくなっていました。先を見通そうとして城門の方をもう一度見ます。でも城門は跡形もなく黒々とした大木が目の前に立ちはだかっています。

マルキンはこの不思議な現象にびっくりしました。どうしてよいかわからなかったのです。私は一体どうしたのでしょう。どうなってしまうのでしょう。

私の運命は一体どうなっているのでしょうか！

マルキンは初めて泣きだしました。泣きながら道なき森の道を歩いています。

ふいに道が広くなり、大きな石でできた家が見えました。

家には窓がなく、開け放したドア越しに明かりが見えます。

まるでマルキンを迎え入れようと待っているかのようです。明かりも心を落ち着かせるようなやわらかなものです。

マルキンはもう泣くのをやめ、また迷いもせず、石の家に入って行きました。

女神が選んだ5人の王女・ドラゴンの国の王女ルドラド

ルドラドはドラゴンの国、ル・ドラド王国の中でたった一人の人間の女の子でした。

ドラゴンの国の中の王、ドラドラゴン王がまだ若かりし頃、ある冒険をしました。それは人間のいるところまで旅行したことです。その時に王は池のほとりでぎゃあぎゃあ泣いていた赤ん坊を見つけました。

親らしき人間はいず、どうやら捨て子のようです。ドラドラゴン王はその赤ん坊を連れて帰りました。そして王女として大切に育ててくれたのです。

王は赤ん坊にドラゴンの言葉の中で一番神聖なる名前を与えました。それがルドラドだったのです。

ルドラドはドラドラゴン王唯一の姫君として育ちました。そして国中のドラゴンにかわいがられました。

実際ルドラドはドラゴン特有の太い尻尾や背中のトゲこそありませんでしたが、黒いなめらかな皮膚を持ち、大きなくりくりとした目、厚い唇、笑うと見え隠れする真っ白な歯をもっていました。

それがものすごくかわいくてルドラドがそこにいるだけでドラゴン達をなごませるのでした。

このドラゴン王国は平和な国でした。国民は全部で２０匹しかいません。他のドラゴンの国とも戦争はせず仲良しさんでした。また太陽や自然の恵みでひもじい思いをすることもありません。ルドラドは争いや苦労を知ることもなくすくすくと育ちました。

ただ１つ気になるのは自分がいったいどこから来たのかという問題でした。自分はドラゴンではなく人間だと思っていたので、人間の国へ一度は行ってみたいといや行くべきだと思っていました。

にぎやかに歌を歌ったり踊ったりすることが好きな子でしたが一人になるとさみしくなりました。私と同じ年くらいの人間の友達が

いたらどんなにか楽しいだろうかと思うのです。
もちろんやさしいドラドドラゴン王には感謝こそすれ何の不満もありません。だから人間の国へ行きたいとはなかなか言えません。
ドラゴンには人間に姿を見られたらその場で死ななければならないという厳しいおきてがあるのです。ドラゴンは人間を恐れていたのです。
若かった時のドラドドラゴン王の勇気ある旅行でさえ、人間の村が見える高い丘の草の茂みから顔を出して眺めるだけのものでした。
ドラゴンたちの噂話では人間は争いを好み、自然の恵みに逆らわないと生きていけない恥ずべき存在として大層評判が悪いのでした。
ルドラドにはその意味がよくわかりません。詳しい話は知らないままに、人間の話は禁句となっているのを感じているのでした。

が、とうとう我慢ができなくなってしまいました。それで7歳になったある日、勇気をだしてドラドドラゴン王に訴えました。
「人間の国へ行きたいの。他の人間と会ってみたいの」と申し出たのです。王をはじめ他のドラゴンたちはいけない、と言いました。
「人間は私達の存在を知ったが最後私達を殺してしまうだろう」
ルドラドはそんなことないわ、と言い返しました。
「ねえ、だいじょうぶよ。ここ何百年も人間に会ってとらえられたドラゴンはいないのに。それに私がどこからきたのか知られるようなへまはしないわよ。だいじょうぶ。人間ってそんなに恐れる必要はないと思うわ」
ドラゴンたちはルドラドのこの言葉を聞いてがっかりしました。そして嘆きました。
「私達の住む最高の環境に満足しないなんて。やはりルドラドは人間なのだ。人間だったのだ」
ただ一人ドラドドラゴン王はルドラドの思いつめた顔を見て、止めても無駄だとわかりました。それで

「ああ、行っておいで」
と言いました。
ドラゴンたちは王の言葉に驚きました。王はつらい思いを抑えてルドラドを抱きしめました。
いつまでも、いつまでもお前を愛しているよ。このシュロの葉で縫い取った服を着ておいき。この弓と矢も持っておいき。このキラキラ光る石もみんなあげる。全部あげる。特にこの石は宝石といって人間が大切にするものだ。困った時はきっと何かに役立つだろう。ただ約束しておくれ。私達が住んでいるこの場所は決して明かさないように。これだけは約束しておくれ・・」
ルドラドは約束を守ることを誓いました。
約束を守り、必ずここに戻ってくることを。

こうしてルドラドはみなに見送られてドラゴン王国を出て行きました。
反対を押し切って行くのだから、自分なりに出て行ってよかったと思うものをみつけようと決心しました。
人間がいる国は遠く、3日間歩き続けてもまだ着きません。
3日目にルドラドは大きな池を見ました。そこに座って休憩すると始めてきた場所のはずなのに景色に見覚えがあります。
前に来たことのあるような、懐かしいような感覚を持ちました。
もしかしたらドラドラゴン王が赤ん坊の私を見つけたのはここだったのかも・・。

ルドラドはここで一晩過ごすことに決めました。池のほとりといっても、取り立てて特徴もない実のならない大きな木と背丈を越える草がところどころ生えているだけです。
でもなぜかここにいるだけで落ち着きます。
ルドラドは夜になるまで膝小僧を抱いて池のふちに座って自分の

知っている限りの歌を全部歌いました。
夜になってさあ寝ようかと思ったときにふと後ろを見ました。そこには木の枝で編んだかごのような家が建っていました。いつのまにか家が建っていたのです。
かごの家にはドアが1つありました。それはルドラドを招くかのように大きく開いています。ドアの中には火がちらちらと燃えているのが見えます。
ルドラドは驚いていましたが迷わずいつものように元気な足取りでかごの中の家に入って行きました。

女神が選んだ5人の王女・鶴前姫

あるところに領地を四方海で囲まれた国がありました。他の国へ行くときは小さくて細くて長い長い橋を渡らねばなりません。領民はめったに外の国へ行くことはないのでその橋はめずらしいものを国から国へと売り歩く行商人くらいしか利用しませんでした。

その国の名は春乃国乃春日野国といいました。

そこの領主にはただ一人の娘しかいませんでした。その娘の名は鶴前姫。そう、ツルマエといいます。

領主とその奥方にとっては年をとってからやっと授かった子供です。だからツルマエをそれはそれは大切にしてかわいがっておりました。

何不自由のないように大事に育てました。

おかげで彼女は生まれてから一度たりとも不愉快な思いをしたり暑いとか寒いとか思ったこともないし、お腹がすいたこともないし、怒ったり泣いたりする感情すらない少女に育ってしまいました。

彼女の不幸は世の中なんでも自分の思い通りになって当然と思っていたその心にありました。

もともと穏やかな性格なので決して周りのお付きたちに無理をいって困らせることはありませんでした。が、自分で何かをすることもなく、なんでもまかせてしまっています。だからまるでお人形のようなお姫様でした。

あれは7歳の誕生日の朝でありました。

彼女がいつものようにお城の池のコイに餌をやっていました。ところがコイが事もあろうに餌を間違えてツルマエのかわいらしい指に噛みついて食べてしまったのです。右手の人差し指が1本、ちぎれてなくなってしまいました。

ツルマエは生まれて初めて、驚くということ、痛いということ、

痛みで涙が流れるということ、自分の身から赤い血が流れるということ、こんな目にあわせたコイに対して怒るということを一度で知ってしまいました。

特に最後の怒りの感情は食べられてしまった指が二度と生えてこないと知ってから、もっと大きくなりました。

怒りが大きく膨らんでそのコイを生きたまま粉々に切り刻んでも、またそれらをすべてお腹の中に入れてしまってもまだ足らないくらいでした。

人差し指をなくしてしまったツルマエはそれ以後人が変わったようになりました。

しょっちゅう、怒ってばかりいる嫌な女の子になってしまったのです。周りのお付きたちに人差し指があって自分にはないのがねたましくてなりません。

またそんな自分を囲んで父母たる領主や奥方をはじめ、仕える人々が扱いかね、また恐れているのがわかるのです。それでなおさら周りを疎ましく思うのでした。

ツルマエは自分のことを、本当はひとりぼっちで世界で一番かわいそうな女の子だと思いました。

そして今はないみぎの人差し指を見つめて、こんな感情すらもたないですんだ、お人形みたいだった自分に戻りたいと思います。

そこでもう一度やりなおすつもりで父も母もいない旅に出ようと思いつきました。

そう、お城の高いところにある自分の部屋から見える細くて長い長い橋を渡って、自分を誰も知らないところに行こうと思いついたのです。この考えを知った人々は一人では何もできないお姫様がどうしてまた、と驚きました。もちろん皆総出でやめさせようとしました。

けれども、ただ一人、父である領主は娘に、行きなさい、好きなところへ言ってごらんなさい、と言いました。

「ひとりでどこまでやれるか試してみたいのだろう。世話をする人もいないところへいってごらん。きっと何か見つかるし、見つけられるだろうから」
領主は娘を甘やかしすぎたことを反省しておられたのです。ツルマエの頭を愛しそうに何度も撫ぜながら、悪いものを払うお札と、なんでも切れる短刀と、欲しいものは何でも買えるだけの小判を与えました。
ツルマエは新しい世界を覗きに行ける喜びでいっぱいでいきいきとした表情になりました。人差し指がないことも一時は忘れてしまうほどでした。
そしてみんなに見送られてお城を出て、橋を渡って行きました。

さて、橋から周りの景色を見ますと、右も左も海しか見えません。橋の前に歩いている人は一人もいません。後ろを歩いてくる人も一人もいません。
橋の半ばまでいかないうちに、ツルマエはもうさみしくなって帰りたくなってしまいました。なんとか渡り切って大きな木の下で一休みしました。そしてこれからどうしようかと思案しました。
考えた挙句にこれから夜になってしまうし、やっぱり怒られても笑われてもいいからお城に帰ろうと決めました。
そして立ち上がった時です。
自分の領地に戻れるはずの橋がきれいさっぱりなくなってしまっていました。目の前にあるのは広い海だけです。
「まあ！
私はどうしたらいいのかしら！
私はどうやってお城に帰れるのかしら！
私は何をしたらいいのかしら！」
彼女は長い間、橋があったはずの位置をうろうろしていました。

そのうちに夜になってしまいました。
泣き続けているツルマエの目に1本の大きな木が飛び込んできました。木全体が一軒の家屋になっていてその扉が開かれているのに気付きました。
今の今までそんなものはなかったはずです。
ツルマエはあっけにとられてしばらく眺めているだけでした。
扉にそっと近づきそっとのぞくと、気持ちの良い何か安心できる炎がパチパチと燃えているのが見えます。
でも、家の中には誰もいませんでした。
もうあたりは夜になって真っ暗です。
「これは誰かが私のために用意してくれたに違いないでしょう、今宵はあそこで寝ましょう」
彼女はその戸の中へゆっくりとした足取りで入っていきました。

女神が選んだ5人の王女（王子）・ミイク

ミイクは3人のお兄様と3人のお姉様をもつ男の子です。つまり末っ子だったのです。

お父様のお仕事は王様です。

広大な緑豊かな土地を持ち牧畜と農業が盛んで富んだ国でした。

王様は教育熱心な方で自分の子供たちだけではなく、国中の子供たちのために勉強と礼儀をきちんとさせようと日夜心を砕いておられました。

特に男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくふるまうように育てること、をモットーにされていました。

男の子は勉強と礼儀のほかに剣をもって戦い、また狩りを覚え身体を動かすことに喜びを感じるように。

女の子は勉強と礼儀のほかに針と糸をもって衣服を作り、おいしいお料理が作れて、いつでも家の中を綺麗に整えておくことに喜びを感じるように。

ミイクはこういうお父様に、そしてお父様を心から尊敬しているお母様に育てられたのです。だからミイクも男の子なので外に出て走ったり剣をとって他の男の子と技を競ったりすることを奨励されました。

でもミイクはそういう教育を受けたにもかかわらず。お城の中にこもって、人形遊びをしたり、布切れを使って小物入れを作ったり、ケーキやパンを焼くのが好きでした。

ミイクは女の子が教えられることをすべて一人で覚えました。また3人のお姉様方がやっていることを見よう見まねでやってみせました。しかもお姉様方のかわいいレースのついたスカートをはきたがりました。

実際彼は、お兄様方やお姉様方の中で一番かわいらしく、男の子であっても花柄のドレスがよく似合う少年だったのです。

王様はミイクを男の子らしくないと恥ずかしく思われました。
男の子らしく、王子らしくしなさい、と怒られるたびにミイクは悲しくなりました。そして男の子に生まれてきたのを残念に思うのです。
男の子と遊びとかけっこが遅い、動作がにぶい、剣がへたであることがよくわかるのでそれも嫌でした。お兄様にも笑われるし、散々な目にあいます。荒っぽい遊びは苦手でした。
かといって女の子と遊ぼうとすると、男の子のくせに、王子のくせに変わっているとか気持ちが悪いとかいわれます。
ミイクはいつも一人ぼっちでした。
ミイクは7歳になる前の晩に、父である王様のところに行ってお願いしました。
「ぼくは女の子になりたいのです。裾の長いドレスを着て、髪を伸ばして、まげを綺麗に結って、お花を持って踊ったりしたいのです。もう男の子は嫌なのです。愛するお父様、ぼくはどうしたらいいのでしょうか」
王様は大きなため息をつきました。
王様はこういう軟弱な男の子は嫌いでした。それで自分の息子をののしりました。
「お前は実際女の子の心を持った男の子だ。神の創りたもうたどうしようもない失敗作だ」
ミイクはぽろぽろと涙をこぼしながら問いました。
「ぼくは男の子と女の子の区別のない国へ行きたいです。愛するお父様、ご存じありませんか」
王様はそんな国は存在しないし、もし仮にあったとしてもつきあうつもりなんかない、と返事しました。
男の子のくせに女の子のように静かに涙を流すミイクが歯がゆくて、またかわいそうで仕方がありませんでした。
「お前は確かに我が子だ。私の王子だ。が、神がお間違えになって女の子の心を持った男の子にしてしまわれたのだろう。これはもう、

神の御許にお返しするしか他はあるまい。こんな子供は私の息子とはとうてい認められないし、かわいそうだがお前には死んでもらう」
ミイクは泣きました。そして泣きながらおとなしくわかりました、と答えました。
王様の決定は絶対的なことなのです。逆らうなんて考えられません。
この決定を聞いてミイクの母たる王妃は仰天しました。
なぜならば末っ子のミイクは子供たちの中で一番かわいらしく思いやりのあるやさいい心の持ち主であると思っておられたからです。
ミイクを殺すなんてとんでもないことでした。それでも王様を心から愛しておられたのでその決定まで逆らおうとまではなさいません。
王妃はミイクの死刑が決まった晩、そっとミイクのところに行きました。そして王様に今からでも詫びを入れて男の子らしく生きていくことを誓いなさいと説得しました。
だけどミイクは力なく首をふるばかりです。男の子として生きていたくなかったのです。王妃はミイクを抱いて泣きました。
ミイクは王妃にキスをして、死ぬ前に白い裾の広がった総レースのドレスを着て、頭に花飾りをつけたかったなあ、と言いました。
王妃はお前の最後の頼みなのだから、とその希望をかなえてやりました。
白いドレスを着たミイクは神々しいばかりに美しく王妃は見とれてしまいました。
「ああ、こんなにも美しい子がどうして男の子に生まれてしまったのでしょう、死ぬにはあまりにももったいないこの美しさ！・・・ミイク、お逃げなさい！さあ！」

王妃は裏門の扉を開けました。
ミイクは白いドレスを着たまま、闇の中裾を翻しながらお城を出

て行きました。
城下町を抜けると後は見渡す限りの草原です。
月明かりの下、ミイクは走りながらも牧草の間に見え隠れする美しい小さな花をつんでいきました。
「もうこの国には二度と戻れないから、持てる限りの美しいものを持ってゆこう」
両手いっぱいに花を摘み、頭にも飾れるだけの花を飾るともう国境の黒い森の中に着いてしまいました。
さすがに疲れて一休みしたいと思っていますと、一軒のあばら家が見えました。
「そうだ、ここでお水をいっぱいもらおう、こんな国外れにすんでいるなら王子のぼくの顔なんか知るまい」
そう考えてドアをノックしました。
出てきた人はおじいさんでした。おじいさんはミイクを見るとびっくりして家に招き入れてくれました。
「おや、どこの花嫁さんだろうか。こんなに美しい女の子は見たことがない。結婚式が嫌で逃げてきたのかね」
ミイクはお茶をごちそうになりながら小さな家を見回しました。どうやら一人暮らしのようです。おじいさんは明日の朝、大事な仕事があるのさ、と斧を研いでいました。
「あなたは木こりなのですか」
おじいさんはかぶりをふって、笑いました。
「いんや、わしは死刑執行人なんでさ。お嬢ちゃん、朝日が昇ったらわしはお城に行って、王様のご命令で末っ子の王子様の首を斬らないといけないんでさ」
ミイクはこの斧が自分の首をはねるためのものだと知ってびっくりしました。そしてあいさつもそこそこにあばら家を出たのです。

国境の森を一目散に走りぬけると、ちょうど朝日が昇るころになりました。光をあびながらミイクは疲れ果ててとうとう座り込んでしまいました。

「今頃はぼくがいないとわかって、お城の兵隊たちが探しだそうとしているに違いない。できるだけ遠く早く逃げた方がいい。でもやっぱり、休みたい、そして眠りたい」

ミイクが考え込んでいますと急に小鳥のさえずりが大きく聞こえてきました。

ちゅん、ちゅん、ちゅん！

いつのまにかミイクはツタがからんだ家の軒下にいました。

「あれえ、こんなところに家があったっけ。でもなんてきれいな家なんだろう。ところどころに花が咲き、小鳥が巣をかけ、おまけにこのいいにおいったら・・、ケーキを焼くあの甘い、いいにおい・・・、」

ドアは開いていました。中をのぞいてみます。かまどが見え、火がちろちろと燃えています。

ミイクはほんのすこしだけ、ちょっとだけおじゃましようと思いました。

遠慮がちに足音をなるべくたてないようにして、そうっと中に入って行きました。

女神が選んだ5人の王女・戦士の国の王女メイミン

メイミンは戦士の国のただ一人だけの王女でした。
戦士の国の王である父王は国中で一番体格が大きくまた力持ちでした。弓矢が得意でどんなに遠く離れた小さな的でも射抜いてしまうほどの腕前でした。
母王はメイミンを産むとすぐに亡くなってしまわれたのでメイミンは父王や家来の重臣たちに育てられました。
強い父王はメイミンがよちよち歩きを始めたころから、自分のも散るだけの武力や腕力を我が娘に与えたいと思って特訓しました。体力をつけるために走ったり転んだりとび跳ねたりする特訓は小さかったメイミンにはつらいこともありました。
でもそのかいあって7歳になるころには国一番の女戦士になれました。同年代の女の子やまたそれ以上の年上の女のことでも誰と戦っても勝てたのです。
父王はこれならば私の娘として堂々と戦士の国の後継ぎになれるだろうと満足していました。
メイミンは快活でよく食べよくしゃべる女の子でした。
体重がありすぎて体つきは丸く太っていて、髪は腰まで長くそれを小さく結って羽根飾りをつけています。黒くて小さな目は笑うと細く隠れ、ほっぺはいつでも真っ赤でたいそうかわいい女戦士でした。
父王が遠い国の戦場へ行って留守にしておられた時はメイミンは早朝にご先祖様のお墓へ行って父王や家来たちの安全を祈ります。それから日課になっている身体を鍛える訓練をしました。
ある朝、いつものようにお墓へ行くと重臣の一人が報告に来ました。
「姫君、王様の宝物の刀がいつのまにか2つに割れていました」
なぜ割れたのか知る人は誰もいません。城の中に不吉な空気が充

満しました。
その予感は的中してしまいました。
その日の昼に戦場から使いがやってきました。悲しい知らせです。それは父王が落馬したところを敵が取り囲み、身を２つに裂かれて殺されてしまったという知らせでした。
メイミンはじめ留守を預かっていた家来たちはみんな泣きました。メイミンも涙を流しながらも家来たちに命じました。
「このカタキはとらねばなるまい、さあ戦いの支度をせよ！」
すると一番年取った重臣が駆け寄りメイミンに巻物をかざしました。
「姫君、まずはこの巻物をお読みくだされ」
その巻物は父王が生前もし自分が死ぬようなことがあったらメイミンに読ませろと言い置いていたものでした。
メイミンが巻物をあけると家来たちを前にしてゆっくりと読み上げました。
巻物にはこう書いてありました。

愛するメイミンと私の家来たちよ。
私は死んでしまったが悲しむな。
戦場で死ぬのが私の本望であるから。
戦士の国らしく代々の王は戦場で死ぬべきであるから。
どうか私が死ぬまでにやり遂げた功績、いかに多くの国を勝利に導き、平和をもたらせたかを考えてほしい。
また勝利の陰に敗戦して滅びてしまった国の存在も考えてほしい。
戦士たるものは勝敗のみを考えて仕事をするべきではない。
私が死んだからといって私を殺した相手を憎むな。
ましてやカタキうちなどはもってのほかである。
私の死後、この国の王は私の娘、メイミンとする。
ただしメイミンはまだ小さいので彼女が１７歳になるまでは家来たちが中心となってこの国を治めること。

この戦士の国の繁栄を私は神とともに天から見守っているであろう。

メイミンは最後の文までしっかりとした声で読み終わりました。それからしばらく呆然としていました。

父王の死体は戻ってこなかったので死体のないまま葬儀をしました。

メイミンや家来たちは父王の遺言どおりにカタキ討ちを考えませんでした。毎日身体を鍛えたり、戦場へ行って戦う仕事をしました。

メイミンも戦場へ行って多くの人々の血や死体を見ました。また自ら剣を取って人を殺したりしました。メイミンの戦いぶりは堂々としていて彼女こそは戦士の国の王女にふさわしいと皆に認められていました。メイミンはその讃えは嬉しく思いましたが何となく物足りなくてさみしい思いもありました。その思いはどこからきたのか、またなぜそれが気にかかるのかはわかりません。それであまり深くは考え込まないようにしていました。

ある時、戦場に行っての帰り道、林の中でメイミンは家来たちとはぐれてしまいました。はぐれたことに気付いたメイミンはあわてず馬をあやつって林の地図を見ました。

こういうことはたまにあるので、合流地点をあらかじめ家来たちと打ち合わせしてあったのです。

太陽の位置と地形で合流地点はすぐそばにあるのがわかりました。家来の方が道を間違えたのでした。

メイミンは時間をつぶすために馬から下りてぶらぶらと歩きはじめました。しばらく歩いて行くと木に大きな蜘蛛の巣がはってあるのを見つけました。巣には大きなちょうがかかっています。巣から離れようともがいていました、実際羽根の片方はうまい具合に巣にはかかっていませんでしたから逃げられそうでした。巣の端の方に

は蜘蛛がちょうの様子を窺うようにちょろちょろと動いていました。
メイミンはこの巣を前に腰をおろします。ちょうが逃げられるか、それとも蜘蛛がちょうを食べて満腹できるか。この生存のための闘いがおもしろく感じられたのです。
持っていたお菓子を食べながら見ていました。ちょうがもがいて巣から離れることができました。蜘蛛はちょうを食べることができなかったのです。でもちょうは羽根が取れてしまい、地面におちてしまいました。飛べないちょうは今度は蟻にやられるでしょう。
「まあ、蜘蛛とちょうは引き分けだね」
メイミンはお菓子のくずをはらって立ち上がりました。
いきなりどーっという水の音がしました。
驚いて思わず剣をとって構えました。何ということ、林の中にいつのまにか滝がながれています。滝なんか今の今までなかったはずです。メイミンはこの不思議な現象にびっくりしました。滝は上から下へと水が勢いよく流れるはずなのに、よく見ると下から上へと水が流れているのです。
水は天に向かって噴き上げ、下に落ちることはありませんでした。
メイミンはもう蜘蛛やちょうの事は忘れて口をあんぐりあけたまま、空中を見ていました。
すると滝の中を通して水の中に家があるのに気付きました。
その家全体がゆらゆら揺らいで魚のように家が泳いでみえました。
よくよく目をこらしてみますと、ドアが開いていて、中で火が燃えています。
「まったくこれはおもしろいではないか。あそこにはいったいどんな人間が住んでいるのだろう。ちょっとおじゃまして顔をみてやろう」
メイミンは剣をおさめました。
1歩、2歩、3歩。後ろへ下がってそれから前に走って弾みをつけます。
それからドアめがけて吹きあがる滝の水の中へとジャンプしまし

た。

プロローグその3

◎マルキンは家の中に入りました。
　自分が入ってきたドアの他にも４つのドアがあって、同じようにして入ってきた人が４人もいました。

◎ルドラドは家の中に入りました。
　同じようにしてはいってきた４人と無言で顔を見合わせ、お互いの容姿や衣装を珍しそうに見ました。
　お互いに見たことのない容貌でした。でもみんな女の子であって年も同じくらいであるのを見てとり何となくほっとしました。

◎ツルマエは家の中に入りました。同じようにして入ってきた他の４人とほほ笑みあい、握手して自己紹介しました。この５人のほかには家の中に誰もいませんでした。
　家の中は丸く天井がなく空と雲と太陽の光が見えました。家の中心にはそれぞれが見た火が燃えていました。その日は丸い石で仕切られた灰の中で勢いよく燃えておりました。５人はその火を囲んで座りました。

◎ミイクは家の中に入りました。同じようにして入ってきた４人とどのようにしてこの家を見つけたかを話していました。そのうち天井からおいしい飲み物やごちそうが美しい容器に盛られて生き物のように飛んできました。それらは５人の輪の中に入ってきました。
　５人はこの不思議な家は神様の家で神様が私たちに仲良くするようにと、招いてくださっているということにしました。それから大喜びでごちそうを食べました。

◎メイミンは家の中に入りました。同じようにして入ってきた他の

４人とごちそうをお腹いっぱい食べました。食べ終わるとお皿どこかへ飛んでいってしまいました。みんなはそして広くもない家の中を歩き回りましたがこの家には窓もなく家具も部屋飾りもありませんでした。おまけに５つのドアがいつのまにか閉じられていて開きません。一体どういうことなのか心配になってきました。ドアはメイミンご自慢の剣をふるってもびくともしませんでした。

メイミンは心配そうに顔を見合わせている他の４人に言いました。
「大丈夫よ、みんな。天井が空いているから、私が昇ってここがどこなのか、そしてこの家の本当の形を見てきてあげる」
そう言い終わるとどこからか声がしました。
「それはしてはいけません」
５人はびっくりして声のした方向を向きました。

そこにはどこからやってきたのか大人の女の人がいました。背が高くがっしりとした大変強そうな女の人です。目が大きくてキラキラと光っていました。
「私は運命の女神です。私の家にようこそ。この家はどこにでもあり、私が人を招いたときだけドアが開くようになっています。この家は私の意思の家なのです。お嬢さん方、あなたがたはこの私に招かれ、この家に導かれてやってきたのです」
５人の王女はその言葉を聞いてシーンとしてしまいました。女神はにこやかにその様子を見ておられます。

やがてマルキンが口を開きました。
「ああ、運命の女神さま、あなた様の存在は牧師様から伺ったお話やご本の中で存じ上げていました。まさか、本当に出会えるとは！」
そう言って前に進み出てひざまづきました。
他の４人も女神に敬意を示してひざまづきました。
女神は皆に立ちなさいと申しつけました。ルドラドが好奇心いっ

ぱいにして女神に近づきました。
「ああ、私達、これからどうなるのかしら。私、何となくすっごくすっごくうれしいの。きっとこれからはいいことばかりあるのでしょう」
女神はルドラドの頭に手を置いて軽くなでました。ツルマエやミイクも女神に近づいてお顔を見上げました。メイミンも言いました。
「私達の運命を教えてくださるのでしょう？私にものすごくいい運、強い運をくださるとうれしいのですが」
女神はあっさりと返事なさいました。
「運命を決めるのは私ではなく、あなた自身ですよ」

女神はそれから火に近寄られました。そして火の中から金色の袋を取りだされました。火を背にしてあぐらをかいて座られみなにも「好きなところに座りなさい、」と命じられました。
みんなはその通りにしました。

「私の話はすぐに終わります。よくお聞き。あなた達はみんな同じ年、同じ月、同じ日に生まれました。５人とも今日と言う日に集いました。そして５人で旅をしてもらいます。
水の国と、
緑の国と、
空の国と、
花の国と、そして美の国。
そう５つの国を旅するのです。その旅で楽しむのもよし、苦しむのもよし、あなたがたの好きなようにありのままの姿で行動しなさい。そして自分の運命を自分で見てみなさい。旅が無事に終わったらまたこの家を通って自分の国へ帰ってもらいます。いい旅になるように！」

５人はこのたびの話を聞くと興奮してわいわいと騒ぎました。女

神は静かにするように言いました。
「旅には1つだけ条件があります。自分の国から持ってきたものはすべてここに置いておくこと。かわりに私からあなたがたに1個ずつ贈り物をします。受け取って持って行きなさい」
5人はうきうきとして女神の言う通りにしました。国から持ってきた金貨や宝物を預けたのです。ただミイクはお気に入りの髪飾りを、メイミンは自慢の剣をもって旅に出たいといいましたが女神は断りました。
ミイクはあっさりとあきらめ、メイミンもしぶしぶと剣を手放しました。
女神は身軽になった5人を眺め金色の袋を開けました。
まずマルキンを呼びました。金色の袋から手渡されたものは透明のマスクでした。マルキンは思わず女神の顔を見ました。女神はマルキンにこう言い渡しました。
「さあ、これを受け取るのです」
マルキンはマスクを受け取り、どう扱っていいのかわからぬままにそれをいじっていました。女神はマルキンにそのマスクをつけるように命じました。
マルキンはとまどいつつもマスクを顔に当てました。すると不思議なことがおこりました。マスクがマルキンの顔にぴったり吸いつくとマルキンの醜い緑色のあざが同時に見えなくなりました。本来持っていた褐色の肌の顔があらわれてきたのです。
「まあ、マルキン、あなたってなんて美しいのでしょう」
みんながマルキンの美しい顔立ちに声をそろえて驚嘆しました。が、マルキンの返事はなく、突然マスクを乱暴にはずしました。見るとはあはあと息を切らせています。マスクを外すと同時に顔に元通りの緑色のあざがあらわれました。
「まあ、マルキン、どうしてマスクをはずすの？つけたままにしておけばいいのに」
ツルマエ達が聞くとマルキンは息をついでやっとはじめて物を言

いました。
「このマスク・・。息ができなくなるし、声もだせない。あざが見えなくなるらしいけれど、これでは困ったわ」
マルキンは黙って見ておられた女神に言いました。
「とてもめずらしいマスクです。でも、とても・・、あのう・・」
マスクの欠陥を言いづらそうなマルキンに女神は軽くうなづきました。
「マルキン、私からの贈り物はそのマスクです。心して受け取りこれを持って旅をしなさい」
マルキンはマスクを手に持ち、もう一切何もいわずうやうやしくお辞儀をして女神に御礼を言いました。

「ルドラド、こちらへ来なさい」
女神に呼ばれるとルドラドはぱっと立ちあがりにこにこ顔で走り寄りました。女神はルドラドの着ていたしゅろの葉で作ったドレスを脱がせました。それから金色の袋から緑色のドレスを取りだして着替えさせました。そのドレスはよく見ると緑色をした葉っぱがびっしりと詰まっているようでした。
「あら、綺麗なドレス。でもさっき着ていたのとそう変わらないわ」
ルドラドはがっかりして言いました。女神は無言でした。
「ああ、いや。このドレスは小さくてとても窮屈。脱いでしまいたい」
実際ドレスは何の飾りもなくただ緑色の葉が詰まっているだけのようです。ルドラドには小さすぎてぴっちりしていました。
「このドレスが私からの贈り物です。自分から脱いではいけません。脱ぐのはドレスがあなたから離れようとする意思を持った時だけです」
女神はそう言い置と半泣きのルドラドをしり目にツルマエを呼びました。
「ツルマエ、こちらにきなさい」

ツルマエはおずおずと歩きました。女神が一体何をくれるのか見当がつかなかったからです。自分がもらってうれしいものを女神がくれるとは限らないことを先の2人で察していました。

女神はツルマエの肩をぐっとつかむと服を脱がせました。その服は母上様が旅立ちに当たって心を配って選んでくれたものです。歩きやすく寒くないように温かい生地で作られた上等なものです。また生地の上には故郷の山に咲く花々が描かれていました。ツルマエは脱がされたくありませんでした。が、女神は構わず裸にして、袋から薄いベールのような衣類を取りだして頭からすっぽりかぶせました。おまけにその上に金色の冠をのせました。

「さあ、これが私からの贈り物だよ」

この服はツルマエの印象を変えました。重たげな厚ぼったい着物の代わりにベールをつけただけの身軽な服は着心地がよさそうです。でもツルマエはこの服は嫌いです。みんなに自分を見透かされそうだし、自分の人差し指がないのを袖で隠すこともできないからです。おまけに頭にかぶせられた冠は重たくて取ろうにも取れません。頭にがっちり食い込んでびくともしないのです。ツルマエは悲しくなってしくしくと泣き出しました。

女神は今度はミイクを呼びます。

「お前への贈り物も衣服にしよう。自分で脱げますね？」

ミイクは逆らいもせず、黙ってドレスを脱ぎました。他の王女たちはここで初めてミイクが男の子であることを知りました。女のことばかり思っていたからです。声を出して泣いていたツルマエですら泣きやんでミイクの裸を見ていました。

女神は金色の袋から花束を、いいえお花で作った美しい服を出しました。ミイクはそれを見て驚きました。それは見たことのない色とりどりの花びらで作られた服でした。ただし、お花がついているのは上半身のブラウスだけです。下半身はミイクの脚をきつく締め付ける何の飾りもない白いタイツでした。それは男の子のシンボルであるおちんちんのふくらみをはっきりと出してしまいます。花び

らでできたボリュームのあるブラウスとバランスがあわず奇妙な格好に見えます。繊細な心を持つミイクにとっては耐えがたく不快でした。他の王女たちはミイクのおちんちんのふくらみを見て、ひじをつつきあって笑いました。

次に女神はメイミンを呼びました。メイミンは用心して言いました。

「私は何もいりません」

女神は容赦しませんでした。メイミンの武装した衣服を大きなナイフでひきさき、かわりに皮でできたぴっちりした衣装を与えました。

メイミンは抵抗しましたが女神の力はメイミン以上に強く逞しいものでした。得体のしれない皮の衣装を着るしかありませんでした。それはメイミンの持つ怪力や武力の技を押さえつけるものでした。おまけに暑苦しくメイミンは脂汗を流しました。怒ったメイミンは女神にバカ野郎と言いました。女神は無言でした。

こうして5人の王女たちはそれぞれに不満の残る贈り物を女神からもらったのです。5人はもう5つの国をまわならくとも、家に帰りたいとさえ願ったぐらいでした。しかし女神はこういうのです。

「一度決めたことは覆せない。元気で行っておいで」

それからぱっと姿を消されました。

女神が消えると同時に火や金色の袋、5人から取り上げたものさえもすべて消えてなくなりました。あとは何もないがらんとした部屋だけが残りました。

「ああ・・、私達はどうなるのかしら」

みんな不安でした。ツルマエはぐずぐずと泣き続け、泣かないものはうなだれています。ただマルキンだけは声を張り上げて励まし

ました。
「さあ、みんな。ここにじっとしていても仕方がないわ。この贈り物は女神に深いお考えがあってこその、いただきものでしょうよ。それにこれからの行き先、なにかとても良いことがおこりそうではなくて？だって私たちが行くところは、
水の国と、
緑の国と、
空の国と、
花の国と、
美の国よ！
これからの国はもう行き先が決まっているじゃないの。きっとすてきなところに違いないわ。ねえ、行きましょうよ！」
マルキンの明るくさわやかな声はみんなを少しばかり勇気づけました。
ルドラドはいきなり踊って歌いだしました。
「ここで悩んでも仕方ないよ！行こうよ！どこかへ！」
ミイクも言いました。
「確かにその通りだね。でもドアが開かないよ。天井から出ていかないと」
そういったとたん、開かないはずのドアが5つともばたんと開きました。それぞれに自分が入ってきたドアから懐かしい故郷の風景が見えます。
「まあ、私帰れるわ。領地に帰れるわ」
こういったのはツルマエです。彼女は早く自分の領地に帰りたいのです。
するとメイミンがツルマエを抑えました。
「ねえ、待ってよ。これから帰ってもいいけれどこのまま別れるのももったいない話だわ。せっかく5人が集まったのだし、5つの国のうちどれか1つでも見て回りましょうよ。それにお互いのこの格好、これで大手を振って自分の国へ帰れると思う？あの女神様にど

うあっても自分のものは返してもらわないと納得できないわよ」
もう自分の国へ戻ることもできないミイクや当分戻る気のないマルキン、新しいものを沢山見てみたいルドラドはメイミンの意見に賛成でした。それでツルマエもいつでも自分の領地に帰れるならば、少しぐらいは見て回ってもいいと賛成しました。

そこで5人の王女たちはどこの国から見て回るか相談しました。どこの国へ行けばつまりどこのドアから行けば女神様のおっしゃる国へ行けるでしょうか。ツルマエ以外の全員が自分の入ってきたドア以外から出て行こうと主張しました。それでツルマエが入ってきたドアから出ることに決まりかけました。
するとツルマエの生来のわがままが出て、この変な格好をした5人組が領民の目に触れては自分の威厳にかかわるし、別のドアから行こうと言い出すのです。
なかなか話がまとまらず5人は困ってしまいました。
そうこうしているうちに音をたてて5つのドアがばたんと閉まってしまいました。
5人はあわててドアに駆け寄りあけようとしましたがびくともしません。それから家全体がぐらぐらと動いて揺れました。大地震がきたようです。
「どうしよう。私たちが早く出ていかないものだから、家の方が私たちを追い出そうとしているわ！」
ルドラドが天井を見て！と叫びます。
天井から見える空の様子がどんどん変わってきます。
真っ青な空、
夕焼け空、
曇り空、
夜空、
いろいろな形の雲が見えます。
いろいろなにおいがする、風、雨、雪が入ってきます。

どうやら家全体が空を飛んでいるようでした。
5人はひとかたまりになって、天井から見える空の様子を不安げに見守りました。

どのくらいたったのか、揺れが突然止まりました。家が横倒しになり、天井から外へ行けるようになりました。みんなはほっとして、手をつなぎあって天井から家を出ました。

外は砂漠でした。空と砂の他なにもありません。後を振り向くと家は消えていました。見渡す限り砂漠でした。5人はあてどもなく、砂漠の地をさまよい歩きました。すぐに夜になり、星が出てきます。5人は疲れて座り込みました。
「ああ、のどがかわいた。お腹がすいた。一体私達はどうなってしまうのかなあ」
メイミンがぼやきましたが誰も答えることはできません。すると運命の女神が出現しました。5人はほっとして女神の前でひざまづきました。
「お前達はよりによって予定外の砂の国へ行ってしまったんだね。なかなか家を出ないから家の方が怒ってお前達を放り出したのだね、わっはっはっはっは！」
女神はそう言って笑いました。そして言葉を続けられました。
「砂の国に一番近いのは水の国だ。ここから行きなさい」
女神は自分の足元を指さすとまた姿を消してしまわれました。そこには小さな水たまりがあるだけです。
5人は水たまりを見てここからどうやって水の国へ行けばいいのか首をひねりました。ためしに水たまりに手を突っ込んでみますと、見かけと違って底がなくとても深いことがわかりました。だけどどうやって行くのか途方にくれて顔を見合わせるだけです。

すると、砂漠の果てからどこからともなく男が5人現れました。

彼らは黒い頭巾をかぶり顔が見えません。5人が息をつめて見ていますと男達は水たまりのまわりを取り囲み、両手を組みました。
オーーーーーーという叫び声をあげました。
すると水たまりの水面が激しく波立ち、水面が砂の地面より上にせりあがってきました。
水面は男達の背丈よりも高く高くあがっていきます。それから今度は横に大きく広がりました。と、急に水面が崩れて男達を滝のように覆ったかと思うと瞬間水に取り囲まれたまま消えてしまいました。水面は元の小さなみずたまりになって、しん、と静まりました。
5人は一部始終を黙ってみていました。そして水の国へ行くにはあのようにして入っていくのではないかと思いました。
5人はさきほどの男達のように水たまりを囲んで手をつなぎ、同じようにオーーーーと声をあわせて出してみました。
見る間に水面がせりあがり、5人を取り囲みます。

そうして5人は水の国へと入っていきました。

水の国

水の国は文字通り水だけがある国でした。上も下も右も左も水の他には何もありませんでした。水中にいても苦しくもなく暑くも寒くもないところでした。5人は所在なさげに水中をうろうろとしていました。しばらく先を泳いでいるとさきほどの黒ずきんをかぶった男達を遠くかすかに見えました。その人たちを追いかけていくことに決めました。どのくらい泳いでいったのか身体が疲れてきた頃、やっと視界が開けました。人間の町らしき様子が見えます。また誰か歩いている様子も見えてきます。そう、水の国の底に到着したようです。

水の国の底は大きな街でした。家は藻で編まれていてゆらゆらと揺らいでいます。街には大勢の人間がいます。さきほどの男たちが黒い頭巾を取りました。彼らは頭部だけが魚でした。首から下は人間です。見ていた5人は驚きました。

街の人間は彼らを恐れているようでした。5人も怖くなり、後をついていくのはやめて立ち止りました。男達はどこかへ行ってしまいました。

「さて、水の国ってどうやらここの街らしい、どうしましょうか、どこへ行きましょうか。何か楽しいことでもあればいいのだけど、」

5人が相談していますと周りの雰囲気がよくありません。大勢の人間が集まってきたのです。歓迎する様子も見られず物珍しげでした。また明らかにバカにしている様子です。

「まだ子供のくせにこんなところにまで来て！」

そういう声が聞こえました。そういえば周りはみんな大人で子供の姿は見えません。

「ここは大人しかいない国かしら？」

ルドラドが詳しく聞こうとすると彼らはさっと身を引きます。5

人を指さしてくすくすと笑ったりして失礼な扱いをされました。5人は生い立ちはそれぞれ違っても身分があり人から敬まれる立場にあります。憤慨しました。

「何と礼儀知らずで嫌な人たちなのだろう」

怒りながらも自分達の奇妙な格好を思うと気分が萎えてきます。しょんぼりしてきます。

役に立たないマスク、

窮屈なドレス、

重たい冠、

白いタイツ、

力を奪う服。

女神さまからいただいた送りもには自分達の本来の姿と違うものです。5人の王女たちはいつもの自分らしくもなく大勢の視線に物おじして目を伏せてしまうのでした。

ただ一人マルキンだけは平気でした。緑色の奇妙なあざを持って生まれてきたせいで皆に疎まれたりからかうような視線に慣れていたからです。その慣れはかわいそうでしたがおかげでしなやかで強い性格になっていました。マルキンは明るく言いました。

「さあ、みんな。胸をはて歩きましょうよ。あの人たちは私達が珍しいのよ。平気よ、平気。見られるだけでは痛くも何ともないわ。見たいだけ見せてあげましょうよ。心のよくない礼儀知らずな人は気の毒な方々なのよ。かわいそうに、さあ、みんな行きましょう」

マルキンは5人の先頭をきって歩きました。女神からいただいた仮面は衣服の奥深くにおしこめあざをまるだしにして歩きます。そうすると薄暗い澱んだ藻の街の中、彼女の周りだけ美しい緑の光が輝きます。それは醜いあざの出す光でした。

残った4人はマルキンの気の強さに驚きながら黙ってついて歩きました。歩いて行くうちにだんだんといつもの元気が出てきます。

歩いて行くうちに広場に出ました。どうやらここが「水の国」の中心のようでした。
「水の国」の水の広場には1本の高いポールがたっていました。そのてっぺんには旗があげられています。大きくて薄いピンク色をした良く光る旗です。その根元にはさきほどの黒ずきんの男がいました。5人は美しい色をした旗を仰ぎ見ましたが周りの様子が変わってきたのに気付きました。
失礼な藻の街の人間達はもう5人の方を見もせず旗を必死な様子で見上げています。どうやらこの旗があげられること自体が珍しいことのようです。
5人はこのピンクの旗と黒ずきんの男とはどういうつながりがあるのだろうと考えました。この旗は真に「水の国」の象徴のようでした。よく見ると周りに小さな魚が旗を守るように取り囲んで泳いでいます。旗を取り囲む魚はだんだんと多くなってきました。これから魚は旗の上の方向から出てくるようです。
ポールを取り囲む群衆もだんだんと増えてきました。
「ああ、きっとこれから何かがおこるのだわ」
パッパーン、パッパーーン！

突然高らかなラッパの音がして5人はびっくりしました。ラッパを吹いているのはさきほどの黒ずきんの男です。頭が魚ですので魚がラッパを吹いているのです。ツルマエやミイクは何がおこるか怖くなり、ルドラドやメイミンは楽しくなってわくわくしてきました。
パッパーン、パッパーーーン、

巨大な白い魚が1匹ゆっくりと下へ、藻の街へと下りてきました。旗のところまでおりてくると周囲をぐるりと1周します。すると黒ずきんの男たちや群衆が膝まづきました。どうやらこの魚が「水の国」で一番偉い魚のようです。白い魚は5人のすぐ上の上空でぴたりと止まりました。そして話しかけます。

「ここまでよくこれましたね。人間の子供がこんなところまでこれるとは思いませんでした」
5人は歓迎されていないのかと思って思わず息をのみます。メイミンが文句をいいました。
「なんだい、魚のくせに。人間の言葉がしゃべるだけ偉いとおもうなよ」
ラッパを吹く手を止めた黒ずきんの男達は驚いたようにメイミンをにらみました。メイミンは平気でした。争い事には慣れていたからです。かまわず魚は話し続けました。
「水の国へくる人間はすべて反逆者です。この水の国は1日に1回人間の反逆者を受け入れます。そして1年に1回つまり今日、反逆者の何人かを釈放する日なのです。でも今日来たのは子供だけ、しかも5人もいますね。これは一体どういうことでしょう」
黒ずきんの男たちが白い魚に向かって申し出ました。
「今日私は引き立てていく犯罪者が珍しくいなかったので砂の国からこちらへ入国しました。しかしこの5人の子供たちが後をついてきたのです。でもこの子たちはどうみても反逆者ではありません」
白い魚は驚いたようです。
「反逆者ではなくただあなたがたについてきただけというのですか、普通の人間はここには入国できません。これはどうしたことでしょう」
このときマルキンが前に進み出て白い魚を見上げて申し出ました。
「あのう、私達も事情がよくわからないままにこちらへ来てしまいました。知らずに無礼を働いたなら謝ります。運命の女神さまに導かれて水の国、緑の国、空の国、花の国、美の国へ回るようにしてくださったのです。水の国の方々、どうぞ気を悪くしないでください。私達は帰ります。帰り道をご存じでしたらどうぞ教えてください。そして来てはならない国へ来てしまった私達をどうぞお許しくださいませ」
マルキンはそのあざを除いてはまったく申し分のない王女でした。

教養の深さを示す落ち着いた声は小さな子供に似つかわしくないようにも思えますがこの気まずい場面を和らげました。
白い魚と黒ずきんの男達は態度を改めました。
黒ずきんの男の一人がラッパを下に置いてマルキンに問いました。
「お名前は？あざのあるお姫さま？」
あざのことを言われても動じずマルキンは丁寧に自分の名前と同行の友人達の名前を答えました。
すると黒ずきんたちは満足そうにうなづきました。白い魚もマルキンを見下ろしていますが好意を持ってくれたようです。親しげに話しかけてきました。
「運命の女神に導かれたのなら、この私が案内いたします。ここは正確にいうと水の国ではありません。水の国はもっと上の方にあります。ここの住人は悪い人間ばかりです」
マルキンは集まっている群衆を見回します。
「人間が悪いのに、いろいろとあると思いますがどういう種類の悪さなのですか」
白い魚は答えました。
「悪い人とは水の国の住民から見ての話です。私達は魚です。私達が人間に食べられるから人間が悪いというわけではないのです。私達は1日中泳いで暮らしていますが食べられるときはもう覚悟しています。食べられるってどういうことかは私自身はまだ経験していないのでわかりません。でも食べられるからって恨む筋合いのないことはわかります。でもここにいる人間は・・」
白い魚は下に下りてきて群衆を見回しました。
「食べられるためにとらえた私達の仲間をそして釣った人間を、運んでおいしく食べられるように調理してくれた人間をもうらぎったものたちです」
5人は何を言われているかわけがわからず顔を見合わせました。
ミイクが質問します。
「つまり食べることをやめたってことですか」

魚は首を振りました。
「違います。この悪い人間は私達を釣った後食べもせず、それなら水中に戻してくれたらいいのにそのまま放って生殺しにしました。釣った魚が自分の欲しいものではないとわかると怒ってふんづけたり、地べたに放り投げたりした人です。魚にとってこんなにむごい殺され方ってあるでしょうか。
海からの恵みを台無しにする人間達があまりに多すぎます。あわれな死に方をした魚は神様に訴えました。すると神様はこの国を創ってくれたのです。そして自然の恵みを有り難がらない人間を毎日送りこまれたのです。これらの人間は過去に葬られた海の生物が楽しく生きていけるように世話をしたりサンゴや藻の手入れをしたりして海を綺麗にしなくてはいけません。これらの人間はここにきて千日間の間勤めて罰を受けているのですよ」
ツルマエはぞっとしました。
「それじゃあ、ここにいる人間はみんな、死人なのですか」
魚は初めて笑いました。
「いいえ、魂は生きたままだからこの人たちもやっぱり生きています。あなたたちにはわかりにくいかもしれませんが」
魚の微笑みというものを5人ははじめて見ました。目はきらきらと光り、唇のふちが水に溶けたように白く霞み、歯はあくまでも小さく白く行儀よく並んでいたのです。
「あのピンクの旗は酷い殺され方をした魚のうろこでできています。ここの象徴です。人間は黒ずきんに導かれてどうしてここに連れてこられたのか悟ってもらいます。そして私達の楽園、水の国で働いてその罪をつぐなってもらいます」
「まあ、では、ここはまだ本当の水の国ではないのですね！」
白い魚はゆっくりと水底に下りて背を見せて横たわりました。5人に上に乗るように言うのです。
「私達の楽園へどうぞ。1年に1回だけ私がここにおりてくる。この日、水の国に上がってもらうのはああなたがた5人だけです！さ

あ、どうぞ」
　5人を乗せた白い魚はポール沿いに上空へとゆらりゆらりと上がっていきました。水底には不満そうな人間達がいつまでも5人を見上げて見送っていました。黒ずきんたちはずっとラッパを吹いてくれていました。
　ずんずんと上へ昇りますといきなりサンゴのトンネルに入ります。
　それを抜けると・・・、
　それは見事な、色鮮やかな、海の世界でした！
　色とりどりの魚達、無限に広がる海砂には色とりどりの貝が埋め尽くしています。
　底を覆い隠すほどのサンゴや海藻、うず高い若布・・・、
　それは美しい眺めでした。
魚達がゆっくりのんびりと動くその下で人間が甲斐甲斐しく植物の世話をしたり、魚の寝床をしつらえたりしています。
　5人は夢心地で魚の背に乗ったまま、本当の「水の国」を一巡しました。
　ややあってマルキンが魚に聞きました。
「ここで千日間勤め上げた人間はその後どうなるのでしょうか」
「今度は神様に連れられて天国へ行きます。でも元々水の国に縁があった人間だし、何らかの形で海に関するものに生まれ変わります。それにね、ここにずっといて魚の世話をしていきたいという人も多いです。魚の方も心をいやした後、神様のところへ行って改めて新しい｛命｝をいただきます」
「そうなの、そうなの」
　5人はうなづきました。
「この水の国の名は、シンダサカナヲナグサメルトコロといいます。シンダサカナヲナグサメルトコロは近頃拡大される一方です。どうしてか、わかりますか」
　白い魚をはじめ、周りの魚達がみんな動きを止めて5人を穏やかな目でみつめます。

「人間は自然の恵みを一番楽をしてもらえる立場にあります。それを感謝もせずに自分の利益のために自然を壊します。そのため海の生物も無残な死に方をするのが多くなりました。ここにきて喜んで罪を償ってくれるものはまだよい。戦争のために海に爆弾や毒物を投げ入れ多くの生物を殺してここに連れられてきたものは多い。彼らは神様の意図も理解してくれません。水底の薄暗い藻の街に留まざるをえないものが大半です。実に嘆かわしいことです。ああいう大人にならないでください。運命の女神さまに導かれてきたあなたがたはきっと大人になって人の上に立つべく人間になるでしょう。あなたがたの同胞に働きかけ、神様からいただいたものをすべて等しく無駄にせず大切にしてもらうようにしてください。これだけが私達が人間に対する切なる願いなのです」

5人はその言葉を聞くと心が動きました。その願いを守るように努力することを誓いました。5人の誓いは魚達を大いに喜ばせました。

魚達が美しい舞を舞う中、白い魚はマルキンに話しかけました。

「あなたは特に美しい心をもっているようですね。ですがその醜いあざのおかげでつらい目にあっていませんか」

その問いは無遠慮なものでした。マルキンはあざをますます緑色に光らせ地肌の顔も赤くしました。それでひどくみっともなくなりました。でも心を落ち着かせて魚に微笑みます。

「いいのです、慣れていますから。これは神様がくださった私の運命です」

そういいながらも今までに受けた父王や母王、兵隊たちの冷たい仕打ちを思い返しました。

白い魚はマルキンをじっと見つめました。

「よろしければそのあざ、私が取ってさしあげましょうか」

マルキンは驚きました。そんなことができるはずがないと思いました。魚を傷つけないようにしてふところから女神さまからいただいた仮面を見せます。

「ご心配なく、これをかぶるとあざが見えなくなります。これがあるのでいいのです。つけると息ができなくなるところが不便ですが、私はこれをもらってうれしかったのでこれで十分です。ありがとう」
白い魚は続けました。
「ああ、仮面を持っていらしたのか。それなら話はもっと簡単です。早くおっしゃってくれればよかったのに」
白い魚はマルキンの顔に唇をよせ、大きくかつ威厳ある声で命じました。
「その仮面をかぶりなさい」
マルキンはとまどいながらも言われたとおりに仮面をかぶりました。みるまにあざが消えて本来の美しい顔立ちが現れました。今まで隠されていた褐色の肌、ほりの深い目鼻立ちに、他の４人や舞を舞っている魚達までは見惚れてしまいました。でも仮面の欠点はすぐに出てきます。
マルキンは息ができなくなってきました。
苦しそうな表情で仮面をはずそうと手にかけたときです。白い魚がマルキンに身を寄せて仮面をかぶった顔の上にキスをはじめました。
チュッ、チュッ、チュッ、チュウー、
チュッ、チュッ、チュッ、チュウー、
いいえ、それはよく見るとキスではありません。白い魚は透明の仮面の上から緑色のあざを吸い取っていたのです。透明の仮面の上から緑色のねばねばしたものが出ているのがわかりました。
同時に白い魚のうろこが美しい緑色になっていきます。１枚ずつゆっくりと。マルキンは気持ちがよいのか仮面をはずそうとすることなく、魚のなすがままじっとしています。
「ほうら小さな王女様。私はあなたの緑色のあざと透明の仮面を食べてしまいましたよ。ほうら、よく見てご覧。あなたのあざは私の身体を美しい輝きのある緑色になりました。
そしてほうら、あなたのそのお顔。それがあなた本来のお顔です

ね。ああ、美しくてかわいらしいこと！あなたのお優しい性格とそのお顔はぴったりとお似合いですよ。おめでとう」
　他の４人の王女たちや魚達に祝福されてマルキンはうれしくなりました。
「ありがとう！何とお礼をいっていいかわかりません。でもとてもうれしいわ」
「お礼なんかいう必要はありません。ただあざを持っていた過去を忘れないで。そのあざはあなたに心の強さと思いやりを培った大切なものです。そのあざがあなたの美しいけがれのない心を育てたのです。小さな王女様、それを忘れないでね」
　マルキンは美しい顔をもった王女になりました。みんなも彼女の美しい心に敬意をもっていたのでこの幸運を心から喜びました。
　白い魚、いいえ、緑色の魚は言いました。
「さあ、そろそろ水の国を出たほうがいいでしょう。時間が限られているし早く次の国へ行った方がいいでしょう。この上をさらに上に上がりなさい。ずっとずっと上がると水の上に出ます。水の上に出たら、太陽と月が空の端と端に見えるはず。太陽の方へ向って歩きなさい。すぐに浅瀬になります。そのまま、まっすぐに進むのですよ。そうしたらそこはもう緑の国です。
　緑の国へ行ってらっしゃい。緑の国の王妃と私は親友です。この緑色になった私のウロコを１枚お土産に持っていってくださいな。もう久しく会っていないので彼女もきっと私の便りを喜ばれるでしょう。
　さあ、小さな５人の王女様達、緑の国へいってらっしゃい！
　どうぞ元気で行ってらっしゃい！」
　そこで５人は大勢の魚達に見送られて緑の国へ進むべく水の国を去っていきました。

緑の国・前編

５人の王女たちは白い魚の言う通りに進みました。すると簡単に緑の国にたどり着きました。

緑の国はまさしく緑の国でした。

海から上がろうというのに、その地にはびっしりと木や草が生い茂ってどこから入っていいかわかりません。５人が近づきますと幸い木の方から道を開けてくれました。木々が創ってくれる道を頼りに奥へ奥へと歩きます。みんなは少し疲れてきました。だからおしゃべりせずに黙々と歩き続けました。

ただ一人、ルドラドは元気いっぱいです。彼女は緑の国を気にいったようです。

「私の国もこんなふうに緑の木がたくさん生えているのよ。それから鳥も獣も虫もたくさん。そしてやさしいドラゴンたち！。ああ、今にもパパ・ドラドラゴン王やドラゴン達があらわれて。お帰り、ルドラド！と声をかけてきそう！そうだったら、うれしいのだけど！」

ルドラドはふと黙りました。自分の身の回りを見回します。

「あたしってバカね」

身体にぴっちりとあった窮屈なドレスのすそをつまんで笑い出しました。

「なんでこんなに動きにくいドレスをくれたのかしら。ドラゴンたちが今の私の姿を見たらきっと笑うわ。こんなもの、脱いでしまいたい」

でも女神が着せた緑のドレスは決して脱げませんでした。ルドラドが脱ごうとすればするほどドレスの方がそうはさせまいと締め付けるのです。

ルドラドはあきらめました。他のみんながもらったものも、そうでした。似たり寄ったりで女神のくれた持ち物は決して本人から離

れないのです。
マルキン以外の王女達に、まだあきらめてないの？という視線を向けられ、ルドラドはため息をつきました。

でも今いる緑の国はどちらを向いても太陽の光に照らされた美しい緑の風景ばかり。ルドラドの心は自然に慰められました。
「この緑の木も、あの緑の木も、私の国にある木とよく似てる。似てるけれど少し違う、どうしてかな？緑の国は私の国に負けないほど、緑が美しい国だけどどこがどう違うのだろう」
ルドラドがそう思ったときです。上空を飛んでいた鳥がさえずり始めました。それを合図にどこからともなく多くの鳥たちが木々に止まります。それから多くの動物達がやってきました。
うさぎ、しか、クマ、キツネ、リス・・。
あらゆる森の動物が5人を取り囲んだのです。森の中ですが獣たちは枝や葉の隙間、木々の幹から5人をじっと見つめています。
その何千、何万といういろいろな形をした獣や鳥達の瞳は親しげでした。その中から金色をしたキツネが1匹しずしずと歩み寄ってきました。
「5人の王女様達、緑の国へよくいらっしゃいました」
キツネは人間の言葉を話しかけてきました。5人は疲れも吹っ飛び大いに喜びました。
「ありがとう、この国を訪問することができて、うれしいです」
動物達はこの言葉を聞くとどっとどよめきました。
「お客様は我々の国を気に入ってくださったぞ！」
という声が森の中のあちこちでこだましました。別の方向から今度は銀色のキツネが歩み寄ってきました。
「緑の国の女王が会われます、どうぞこちらにいらしてください」
5人が金色と銀色のキツネに案内された方角へ歩きはじめると動物達は声をそろえて歌い始めました。
女王様がお会いになるそうだ、なるそうださあ、喜ぼう！

女王様がお会いになるそうだ、なるそうださあ、喜ぼう！
さあ踊ろう、さあ食べよう
さあ食べよう、さあ食べよう！

5人はその歌詞を聞いて変わった歌だと思いました。歌詞に何か意味があるのか不思議に思いました。獣たちが歌う中、木々は太陽の出ている方角へ道を開けてくれました。金と銀のキツネが立ち止ると、忽然と緑の芝生で敷き詰められた広大な広場があらわれました。中心には大きな木でできた緑のお城がありました。はるか遠方に獣たちが歌う声が聞こえてきます。
「まあ、今までこんもりとした森の仲だったのに不思議ね。私達はそんなに歩いていないのに、広々とした芝生の中の緑のお城にたどり着いたのね！」
驚いていると金キツネが言いました。
「それは緑の国の女王様のご意思だからです。女王様はなんでもできる御方ですから」
5人はそのように立派な緑の国の女王様にお会いできるのが楽しみになってきました。さきほどの歌がかすかですがまだ聞こえます。
さあ、食べよう、さあ、食べよう、
女王様がお客様に会われます。
さあ、食べよう、さあ、食べよう、さあ食べよう・・・

「さあ食べよう」の歌詞が気になります。とうとうメイミンが金キツネに聞きました。
「あのヘンな歌はどういう意味なの」
金キツネと銀キツネはお互いに顔を見合わせた後、同時に返事しました。
「皆さま、どうぞ気になさらずに。あれはつまり・・、そういう歌なのです」
メイミンは変な顔をしました。ルドラドは直感的に何かを隠して

いる、隠されていると思いました。心の中で「私はドラゴン王国で育ったけれど、こんな風に何か隠し事して物を言う動物ははじめて見た」と思いました。他のみんなは緑の木でできたお城のドアが開門されるのを待っていました。

ルドラドは注意深くあたりを見回しました。芝生はあくまでみずみずしく、木でできた緑の城は巨大でものものしく、でも何かが決定的に不足しているものがあります。ルドラドはこの窮屈な服が脱げたらこのあたりを飛び回って調べるのに、と残念でした。この国は確かに緑の国ですが何かが変なのです。でもそんなふうに考えているのはルドラドだけのようです。

城のドアがゆっくりと開きました。キツネに案内されるままにドアを通って大広間に進みます。お城の中もやわらかい緑の光で満たされていました。

その光の中、広間中央の玉座に背の高い大きな女性が1人で立っています。金キツネが5人に「緑の国の女王様です」とささやきました。

5人はキツネに導かれ、内部も緑の葉で覆われた城の中を仰ぎ見ながらしずしずと女王様の前に進み出ました。女王様は客人を迎えるにしては、何の動きもなさいません。ぽつんと突っ立っているように見えます。5人は奇妙に思いながらも女王様にあいさつしました。

「緑の国の女王様、お招きありがとうございます。自己紹介を順番にいたします。まず私の名は、」

すると女王様は右手をあげてあいさつの言葉をさえぎります。

「名を名乗る必要はありませぬ」

女王様の声は低くて悲しげでした。女王様のまわりだけ緑の光がよわまっていてどんな表情をなさっておいでかわかりません。ただ黒人というのはわかりました。ルドラドのように肌は黒く唇は厚くそして髪は床に届くほど長くてほどよく縮れていました。頭の上に

は緑の羽根で飾った冠をかぶっていらっしゃいます。衣服も大きな緑の葉でゆったりとつづりあわされ豊かな胸の谷間が垣間見えます。こんなに背が高くて美しい堂々とした立派な女王様なのに暗くて悲しげです。5人はせめて微笑んでくださったらいいのに、と思いました。

やがて緑の柔らかな光が女王様のお顔を照らしだしました。

5人はあっと息をのみました。

女王様は2つの顔をお持ちでした。正面の顔、先ほど見た大きい瞳と鼻、唇・・、それともう1つ。

頬のところに小さなこぶがあってその真ん中に眼が2つ見えます。その目は険しく赤く濁り、5人を軽蔑するように細くなったり丸く大きくなったりしてじろじろ見ていました。女王様は5人の驚きのまなざしをうけてそっと眼を閉じられました。頬にあるもう1組の眼はしっかりと見開いていて5人をにらんだままです。

女王様は玉座に腰を下ろされました。5人は頬の中の眼を見たくなかったので見えない位置、つまり女王様の左側にかたまって横顔を見上げるようにしました。女王様も心得て横目で5人を順番にゆっくりと見つめられていました。一番端にいたルドラドをご覧になると親しげに歯を見せてにっこりされました。

「まあ、私と同じ黒色の肌を持つ子供がいるわ」

ルドラドもうれしくなってにっこりしました。そして自分の国の話をしました。ドラゴン王国はこの国に負けないくらい緑に囲まれていることや父ドラドラゴン王や国民のドラゴンの話をしました。

女王様は丁寧に話を聞いておられましたがやはり悲しげでさみしげです。話を続けながらもルドラドの不吉な予感はいやますばかりです。他の4人も気がめいってきました。だしぬけにメイミンが言いました。

「女王様、何か悲しんでいらっしゃいますね。私達が力になれるこ

とがあったら言ってみて」
　そばにいた金と銀のキツネはびっくりしてメイミンに「女王様に自分から話しかけてはいけません」とたしなめます。女王様はかまわぬ、というふうにゆっくりと首をふりました。マルキンはメイミンにささやきます。
「メイミン、これにはきっとご事情がおありなのでしょう。もうおいとまいたしましょう」
　ミイクも言いました。
「ここは緑の葉っぱと光以外は何もないところだ、行こう」
　ルドラドはミイクの着ているブラウスを見つめました。彼のブラウスには美しい花のつぼみが無数についています。これを見てはっと合点がいきました。
「この緑の国には、花がない。緑色ばかり！これだけの緑があるのに、花の１つもない。当然実もない。緑の国の木々を見てヘンだと思ったのは、花がなかったせいだ！」
　ルドラドは女王様の大きな手を取りました。
「ここには花がありませんね。私に何か手伝えますか、女王様」
　すると女王様は大きな瞳から大粒の涙をこぼされました。
「ええ、あなたがたには助けてもらいます」
　とたんに５人は活気づきました。
「どうしたらいいのかしら！」
　女王様の悲しみをいやせるなら、手伝いでもなんでもするわ！みんなは女王様の悲しげな様子を気にしていたのです。
「ええ、それには、まずあなたたちには死んでもらわねばなりませぬ」
　あまりなお言葉に５人はびっくりしました。女王様はさらに大きな声で泣きながらおっしゃいます。
「ああ、水の国からせっかくいらしたお客様なのに、どうして話がこうなるのかしら。何ということ、何ということかしら！」

5人をはさむようにして金と銀のキツネがすくっと立ちました。彼らも悲しそうな顔をしています。が、口にはキラキラと光るナイフをくわえています。これで5人の命をとろうというのでしょうか。5人は互いによりそいました。ツルマエは泣きだし気の強いメイミンは力がでないながらもナイフを奪おうと前に出て身構えました。マルキンは声を震わせながらも女王様に問います。

「緑の国に来る客人はこのようにして命を取られるのですか。でも、なぜですか。それが女王様の悲しみを和らげて緑の国を助けることになるのですか」

女王様は深いため息をつきながらこう申されます。

「あなたたちから命を取ればあなた達は花となり実となり、緑の国の住民の空腹を満たす救いになりのです。あなた達の命が緑の国の花と栄えになるのです。まあ少しの間だけなんですけどね」

「緑の国の助けになろうとも命を取られるのは嫌です。それに女王様が客の命を喜んで奪う人にとても見えません」

すると信じられないことがおこりました。女王様の右頬についていた男の眼が2つ大きくせりだしてきたのです。ついで鼻、口、最後に長くのびたキバがでてきました。同時に女王様の美しい顔は眼も鼻も口も左に小さくしぼんできました。やがて新しく出現した醜いキバの突き出た口から割れがねのような声が出ました。

「この往生際の悪いガキ共め。泣くのでもなくわめくのでもない。命乞いもしない。俺はこんな子は大嫌いだ。まったく気にくわん」

声はだんだんと大きくなり最後に「うおおおんん、」と吠えました。

とうとう身体は女王様のままで顔だけが見るからに邪悪な白人の男になってしまいました。ルドラドは悟って叫びました。

「わかった！女王様はどこかの悪いヤツにとってかれてしまわれたのだ。それで緑の国なのに、花も咲かず、実もならないのだ。元々緑の木自体人間の肉や血で大きくなるわけではない。すべてお前の

せいだな、女王様が泣かれ住民たちが実のならない木を見上げてお腹をすかせ客人を待つのもみんな、お前のせいだなっ！」
　他の４人はあわてて男をののしるルドラドの口を押さえました。がすでに遅く女王様に乗り移っていた男を怒らせました。
「おおう、よくぞ言ったな！ちびのくせに生意気な」
　それからキツネに向かってどなりました。
「さあ、こいつから八つ裂きにしろ！」
　金キツネはナイフを一度床に置いて男に言いました。
「いつも通り命の取る前に、その命をどの木に与えて花を咲かせ実をならせるかをお決めにならないと・・」
　銀キツネも同じようにナイフを床に置きました。
「久しぶりのお客人で住民たちも本当の事を知らないままに緑の木に花が咲き、実がなるのを心待ちにしております。せっかくのごちそうですし、どんな殺し方をするか考えてからお決めになられたほうがよいのではないでしょうか。味もおいしくなるかもしれませんし」
　男はキツネをちらと見てから笑いました。
「よし、お前の言う通りにしよう。じっくりと痛い目にあわせてから殺そう。特にそこの黒ン坊のちびは俺が直接手にかけて命を奪ってやろう」
　その声は陰湿で汚らしい声でした。女王様いいえ、男は立ちあがると言いました。
「女王の身体にのりうつったのも久しぶりだ。よく寝ていたもんだ。よし、こいつらの殺し方を考えながら散歩してくる。少しの間だけだ。こいつらを逃がすなよ、よく見張っておけよ」
　そして大股で広間から出て行きました。
　残された５人はホッとしました。キツネの方もホッとしているようです。ルドラドはキツネに話しかけました。
「助けてくれたのね、ありがとう。でもあいつのいう散歩ってどのくらいの時間かしら。逃げられるといいのだけど」

金キツネは首をふりました。
「逃げることは考えないでください。ぼく達が困ります。散歩と言うのはこの緑の国を1周することです。ほんの少しなら時間はあるよ。あいつは完全に乗り移れると散歩と称してこの国に変わりがないか見にいくんだ。海沿いに出ては魂やなにか良いものが流れ着いていないか見にいくんだ。住民たちが飢えているのをみて楽しみにいくんだ。本当に心のよくない男なんだよ。ああ、平和だった緑の国がどうしてこうなってしまったんだろう。でもあいつのいいなりにしないと女王様がどんな目にあわされるか、そして緑の国がどんなになってしまうのか・・。あああ、すべてはぼく達のせいなんだ、君達、本当にごめんよ、ごめんよ」
金と銀のキツネはお互いに身を寄せて泣きだしました。マルキンはもらい泣きしながら聞きました。
「どうして平和だった緑の国にあの男がやってきたのか、そして女王様に乗り移ってこの国を支配したのか教えてくださいな。あの男が帰ってくる前に私達に何ができるか考えましょうよ」
銀キツネがあきらめたようにため息をつきました。
「でも無理じゃないかな。今まで助けてあげられたお客人はいないし、ぼく達はあの男のいいなりになるしかないんだ。現に男が散歩から帰ってきたら言いつけどおりに君達を殺さざるをえないよ。残念だけど女王様のために、飢えた住民たちのために。緑の国のために」
ルドラドも重ねて言いました。
「いいから、話を早く聞かせてちょうだい」
金と銀のキツネはちょっと考えましたがすぐ頭をふりながら答えました。
「いいでしょう。水の国からきたお客人です。しかも、運命の女神さまのお導きだというし。何かの力になってくれるかもしれません」
金キツネは涙を流しながら語り始めました。

「実はぼくは女王様の1番目の息子です。この銀キツネは2番目の息子でぼくの弟です。ぼく達は早くに王様にみまかられたので母、女王様は1人で緑の国を守っていました。あの男が来てひどい目にあわされるまでぼく達に苦しむ、ということも知りませんでした。そして幸せという言葉も知らないくらい幸せでした。緑の国はいつでも緑の葉で青々としていて花も咲き乱れて順番に実を結びぼく達の腹を見たし、心を満たす。

青い空、いろんな形の葉、太い幹、細い枝、根、茎、つぼみ、花、実、みんな緑！すべてが緑！そんなすばらしい緑の国だったのですよ。ああ、」

ミイクが遠慮がちに聞きました。

「あの男はアクマですか？」

金と銀きつねはミイクの着ている花びらのついたブラウスをまぶしそうに見つめながら答えました。

「いいえ、あれはアクマではありません。元々はただのつまらない人間です」

そうしてキツネたちはあの男がどうやってこの緑の国を支配したかを語り始めました。

5人は静かに耳を傾け聞き入りました。

緑の国・中編

キツネの話

見かけは小さいけれど中に入れば広い緑の国は海で囲まれている。緑の国の海辺にはいろいろな物が漂ってくる。

母、女王様は美しいものが大好きでこれらの漂流物の中から気に入ったものがあると喜んで拾い上げられます。たとえば小熊の形をした雲。深海魚の持っていたベール。甘い甘いチョコレートの精霊の小箱。

そういったものが緑の国にいられるように魔法をかけて緑の木に替えたり、美しい花に再生してはおいしいチョコレートの実を結ぶようになさるのがお好きでした。

よそから来たものが緑の国にあうようにしかもその元々の素質を壊さぬようにアレンジなさるのです。それが女王様の趣味でした。

このときには女王様だけが持てる「魔法の緑の粉」を使います。ぼく達はそれを「緑の国の宝砂」と呼んでいました。

宝砂は魔法を使われるときに特有の良い香りが緑の国全体に広がります。住民たちはその香りがすると連れだって見学に行ったものです。それはお祭りのように楽しい気分になるものでしたから。ぼく達もそうでした。そしてだんだんとあの宝砂が、そう、なんでも緑の国にふさわしいものに変えることができる宝砂が欲しくなってきました。

「ぼく達にもこの魔法の緑の粉、宝砂と分けてください。ぼく達は女王様の子供なのだし、ね、いいでしょう。お母様」

とよくお願いしたものです。でも女王様はいつも笑って首を振るばかりでした。

「そうよ、あなた達は私の子供です。いとしい坊やたち！でもあれは本当はとても危険なものです。使い方が理解できるまでは持って

いるだけでも危険です。宝砂を持つのはもう少しお待ちなさい。もっと大きくなってからものの善悪の見極めがつくくらいになったら宝砂をあげましょう。それまでは私のすることを注意深く見ていなさい」

そういわれてもぼく達は母女王様だけが持てる宝砂が欲しくて仕方ありませんでした。それである日とうとう宝砂をひとつかみだけ盗みました。悪いことだと知っていたけれど、どうしても宝砂をもって魔法をかけたかったのです。よそからきた漂着物を、緑の木や花にアレンジして変えたかったのです。

ぼく達はそのほんの少しの宝砂を手に海辺に出ました。その日は特に風の強い日でした。喜び勇んで行ったのに、その日にかぎって何の漂着物もありません。人気のない海辺には貝殻しか見当たりませんでした。がっかりして帰ろうとした時、海の波にのって丸い人間の魂がやってきました。ぼく達は思わず顔を見合わせました。

なぜなら人間の魂はたまに漂着しても方向を間違えてやってきただけなので沖の方へすぐに送り返してやる決まりがあったからです。人間の魂は緑の国のものにしてはいけないのです。しかもその魂の色ときたら、禍々しい黒さでした。一見してわかる、よくない人間の魂です。

人間の魂はピンク色か薄い黄色です。ぼく達はこの変な黒い魂はどこへ流されていくつもりだったのだろうとささやきました。

ぼく達は沖の方へ送り返すのはやめて、こちらの海辺によせました。黒い魂はずっしりと重く丸く、中はどろどろしていて激しく波打っていました。さわるのも見るのも、気持ちの悪いしろものです。しかしこれは確かに人間の魂です。

これまで女王様は人間の魂は緑の国のものにはしようとなさいませんでした。だからぼく達はこの宝砂を使えばどんなものになるかと思いつきました。そして黒い魂を見よう見まねで宝砂を使って呪文を唱えました。すると宝砂は緑の若木のようなにおいをだすかわりに、ひどく嫌な苦い匂いを吐き出します。おまけにぶすぶすと黒

い煙が出てきます。
「大変だ、火事になっちゃうよ」
あわてて呪文をやめ煙をとめようとすると、魂がいきなり変化してしまいました。それは緑の国にふさわしい緑のものではなく、険しい目をもつ人間の首になってしまったのです。それは白蝋のようでした。唖然とするぼく達の前まで首は飛び跳ね、空中で静止しました。それからしゃべりだしました。
「ああそこの黒ん坊めが！感謝しようぞ、俺は生き返った！首だけだがそれでも生き返った！感謝しようぞ」
そう言ってぼく達の手にあるごくわずかに残った宝砂をぺろりと舐めてしまいました。その生首は人間でありながら、悪い魔法使いであり、同じ世界の人間にあらゆる悪を教え苦しみを与えた男だったのです。最後に神様の裁きをうけて、首と胴を離されて死んでしまったのです。
人間でありながら、悪魔の世界と取引していたので死後の人間が行く世界にも引き取られず、また悪魔の世界にも入れずいろいろな世界が点在する広い海を漂ってきた良くないものだったのです。
男は宝砂によって魔力を取り戻し、生き返らせてくれた礼をする、といってぼく達をキツネにしました。その上宝砂が出した嫌なにおいをかいで何ごとかと集まってきた住民たちをも動物にしてしまいました。それはあっという間の出来事でなすすべもありませんでした。男は聞いたこともない異文化の奇妙な呪文を唱えて上機嫌で笑いました。
「見渡す限りの緑の木ばかりだな。人間はそう多くないようだ。いい国じゃないか、気に入ったからしばらくここにいてやるぜ。お前らは俺の家来だ。もっとあの宝砂を持ってこい！俺には手足が必要だ」
大変なことになりました。このとき変な匂いと騒ぎを聞きつけた女王様が駆けつけてきました。女王様は一目で事態を理解されると、生首に向かって宝砂を投げつけて呪文を唱えられました。生首は素

早く跳ね跳んで女王様の呪文をかわします。
ああ、ぼく達の誇らしい母、嬢様は美しくて背がお高く、つやのある黒い皮膚と髪を持ち、やさしくて・・、そして強い。
女王様はたくましい腕で生首をとらえると、ぼく達から舐めとった宝砂を掻き出して、新たな宝砂を生首にかけて呪文を唱えられました。すると生首の男は応戦して、禍々しい旋律の呪文を声高に唱えます。緑の国はにわかに空が黒くなり、海が赤くなり、地がさけるかのような雷の音で満ちました。
と思うと、生首は・・、女王様の顔の中に入ってしまいました！

女王様のほっぺたの中に、すっぽりと生首の男が入ってしまったのです！男はそのままで大きく口をあけて笑いました。女王様は手で抑え込もうとしましたが男に噛みつかれて血を流します。苦痛に歪む女王様のお顔いっぱいに男の顔が広がりました。
「呪文は失敗した。お互いにな。俺は女王の身体にとって変わろうとしたが、入れたのはかろうじてほっぺたの中だ。まあ、よい。俺は一度死んだ人間だし、持っていた魔力もこの首の分しか生かされない。この国の女王になって存分に栄養を取らせてもらおう。それから改めて切り離された俺の胴体を探しに行こう」

それ以来緑の国は変わりました。2人の王子である私達はキツネにされたままです。その女王様の顔に居座る男の期限を損ねないように召使になりました。女王様のお顔からは微笑みが消え、緑の国は殺伐とした世界になりました。が、それでも緑の国は生きているので木々は葉こそ茂らせているものの、花や実はならず、住民たちはお腹をすかせるようになりました。
住民たちは荒れました。浜辺に人間の魂がやってくると男は自分の手足になる人間がいるか宝砂を使って試し、気に入らないと緑の木の実にして住民に食べさせました。
人間や人間の魂がやってくるとそれはぼく達のごちそうになりま

す。そのため、ぼく達はだんだんと客人がくるのを心待ちにするようになりました。ご飯が食べられるからです。客人はぼく達のごちそうになるのです。

ぼく達ができる話はここまでです。

「まあ、お気の毒に。でもこれでやっと、動物達が私達を見てごちそうだ、といった理由がわかったわ。お腹をすかせていたのね、本当にかわいそうに」

キツネはすまなさそうに言いました。

「君達にはあやまらないとね。かわいそうなのは君たちの方だもの。でもみんなはお腹をすかせているし、彼らに食べ物を分けてやらないと。こんなことになって本当にごめんよ。君達をよこしてくださった運命の女神さまにも、案内してくれた水の国の白い魚にもすまない。けれどどうしようもないものだ。許してくれ」

ルドラドが言いました。

「私はまだ死にたくないわ。死んで緑の木の実になって食べられるのももっと嫌よ。男は女王様の身体に入っているとはいえ、首だけなのだしなんとか方法を考えましょう。そして緑の国を元通りにしましょう」

このとき男が帰ってきました。宮殿のドアを乱暴に開け放ち手には大きなナイフをもって自ら5人を殺す用意をしています。宮殿のまわりにいる緑の国の住民たちは何も知らずごちそうが食べられると思ってうれしがっていました。

さあ、食べよう　さあ、食べよう

さあ、食べよう　さあ、食べよう

男は薄笑いを浮かべて女王様の手を自在にあやつり刀を握りました。あの美しい女王様は醜い化け物の顔に変化しています。5人は大きなナイフを前に震えました。ルドラドはすいと前に出ました。

「私を最初に殺しますね。その前に私のお願いを聞いてちょうだい

！」
はちきれそうな黒い肌に葉で綴った緑のドレスをまとった彼女は気高く凛としていました。
「何だ、命乞い以外なら、かなえてやってもいいぞ。まあ言ってみな」
「私は訳がわからないままに見知らぬ人に殺されて実になって食べられるのは嫌。せめてあなたがどうしてこういう魔法使いになったのかお話してください」
ルドラドの無邪気な質問に皆は青ざめ、すぐに殺されるとかたく目をつぶりました。キツネも達も男の様子を横目でうかがい、シーンとしました。
「このこわっぱめが。俺に話をしろというのか、俺には話すことなんかないぞ」
ルドラドは一番先に自分が殺されると思っていたので何も怖くありませんでした。
「どうぞ教えてくださいな。今のままではいけない。どうぞお話してください」
そして男の前に進み出て顔を見上げます。マルキンも続いて同じようにしました。メイミンもミイクもツルマエも同じようにしました。みんな怖くて震えながらも、よくわからないままに殺されるのは嫌だと勇気を出して男の顔を黙って見つめました。
キツネ達も見ていましたがやがて静かに男をさとしました。
「魔法使いよ、邪悪な男よ。ぼく達はあなたが恐ろしくてそして女王様のお身体が心配で言う通りのことをしてきました。この緑の国をあなたは自分の思うままに支配してきましたが果たして楽しかったですか。ぼく達はこれ以上あなたを恨みたくないのです。
ここはもともと普通の人間が来るところではありません。緑の国なのです。あなたの真の願いはここにいることではないでしょう。話だけでも聞かせてください」
男は青ざめ、ナイフを振り上げました。

緑の国・後編

ルドラドは一番先に自分が殺されると覚悟していたので何も怖くありません。

「どうぞ教えてくださいな。今のままではいけないわ。どうぞ話してくださいな」

そして男の前に進み出て顔を見上げます。マルキンも続いて同じようにしました。メイミンはミイク、ツルマエも同じようにしました。みんな怖くて震えながらも、よくわからないままに殺されるのは嫌だと勇気を出して男の顔を黙って見つめました。キツネ達も黙って見ていましたがやがて静かに男をさとしました。

「魔法使いよ、邪悪な男よ。ぼく達はあなたが恐ろしくてそして女王様のお身体が心配で言う通りのことをしてきました。この緑の国をあなたは自分の思うままに支配してきましたが、果たして楽しかったですか。ぼく達はこれ以上あなたを恨みたくないのです。ここはもともと普通の人間が来るところではありません。緑の国なのです。おなたの真の願いはここにいることではないでしょう。話だけでも聞かせてください」

男は青ざめ、ナイフを振り上げました。

ルドラドは男のふところに飛び込み鋭い声で叫びました。

「これ以上罪を重ねて楽しいですか」

彼女の叫び声は男の歪んだ真っ黒な心の中の中まで、きっと入り込んだに違いません。ほんの一時ですが男の殺気が緩みました。その場にいたものは全員言葉を出さず男を見つめたままです。また緑の国の人々はみんな、男の素性を知らないのです。

またなぜ女王様があんな風になったのか、どうして自分達が動物になったのかも知らないままなのです。

男はその沈黙を苦々しい顔つきで黙殺しました。口の端を歪めてニヤリと笑うと初めて自分の話をしました。

「俺には父も母もなく、楽しいことを知らぬ間に大人になり、魔術師の弟子になってありとあらゆる悪事を働いた。俺は人から憎まれることで人に相手にされる人間だ。俺は人を避けずみ、憎み、憐れんでいる。俺は人が嫌いさ。俺は復讐しているのさ、俺を嫌い、受け入れない人というものに。それが俺の人生さ」

男は少しの間目を閉じましたがすぐにかっと大きく見開いてナイフを振りかざしました。

「さあ、殺してやろうぞ！」

気の狂ったように咆哮しました。

ルドラドはもはやこれまで、と観念しました。自分の無力さが情けなく旅に出る前の楽しかったドラゴン王国での暮らしを思い出すばかりです。男を憎む気持ちはなく、ただ旅の途中で命を落とす無念さに、そして2度とドラゴン達に会えない悲しさに涙を流しました。他の4人もキツネ達も目をつぶりました。

と、ナイフが床に落ちてカランという音がしました。

「これはどうしたのだろう」

男の小さなつぶやき声が聞こえます。ルドラドは目を開けました。そして男の顔を見てぎょっとしました。男の顔が再び変化していたからです。女王様の眼が大きく張り出してきて横目で男の眼を睨みつけ、口はぎゅっときつくひきしめて男の口が動かないようにしていました。男は必死で呪文を唱えようとして口をパクパクしています。が、だんだんと女王様の顔、眉、眼、鼻、口が戻ってゆき、男の青白い顔は女王様の黒い肌に埋もれて丸く小さくなっていきました。キツネ達は大声で叫びました。

「ああお母様、そして偉大なる女王様！緑の国の女王様がよみがえられたのですね！」

事実その通りになりました。女王様は元の女王様に戻ったのです。目がいきいきと輝き、大きな口元から真っ白な歯がこぼれました。

女王様は手を広げて、天に向かって何かの呪文を声高に唱えました。いきなりまぶしい白い光が女王様のまわりを取り囲んだと思うと「どーん」という大音響がして地面が揺れました。女王様はやさしく、そして力強い声で歌うように宣言されました。

「ああ、私は生き返りました。緑の国は蘇りました！」

見よ。

周りを見渡すと宮殿の中のつぼみのままかたく閉じられていた緑の木々の花が狂ったように咲き乱れ実をつけだしました。緑の国の住民たちも元の姿に戻っているようです。男が女王様の身体に入り込んで閉じ込めていた緑の国の時間が今やっと解放されたのです。押し込められていた目に見えぬ闇と時間から逃げ出すべく緑の木々は動き始めました。まわりに花や芽、葉、実がかもしだすいろいろな緑のにおいが満ちて国全体が見違えるように活気づきました。

ルドラドはじめ5人はこの様子を見て唖然としています。すでにキツネの姿はなく元の姿に戻った王子たちが女王様にキスをしていました。王子たちは5人よりも少し年長のようでした。人間の姿に戻った緑の国の住民たちも歓声をあげて木々の果実を食べ花をとって身を飾っています。国中あげてのお祭り騒ぎになりました。その中、王子や家来たちが女王様の周りを取り囲みました。5人の王女たちも女王様を見つめます。女王様は両手を重ねて何かを手に持っています。そしてそのままのポーズでルドラドの方に腰をかがめてキスなさいました。

「ルドラド、私はあなたに感謝します。あなたがあの男の術を解いたのですから」

ルドラドはその言葉を聞いて戸惑いました。

「私は何をしたのかわかりません」

女王はルドラドの目の前で小腰をかがめたままでそっと両手を開きました。そっとのぞくとそれは小さな黒い綿のようなものが小さく丸まっています。

「これはもしかしてあの男の・・・、」
女王様はうなづかれます。
「この人は元々は普通の人間です。生粋の悪の心で生まれてきた人ではないのです。あなたはこの男に質問して、過去の人間としての自分をほんの一瞬だけ思い出させたのです。その一時だけ、感情のない邪悪な魔術師から人間らしい迷いの心が蘇って術が弱まったのです。私はその一瞬を見逃さず、男を私の身体から追い出して力を取り上げました」
女王様は背筋を伸ばしてしばらく無言で手の中の物を見つめておられました。そしてもう一度口を開かれました。
「もともと人間には善悪の魂が同時に潜んでいます。本当に良い人間もいなければ本当に悪い人間もいないものですよ」
女王様の手の指の隙間から、先ほどの男の眼がちらりと見えました。女王様の身体に巣食っていた険しい眼ではなく、力のないうつろなおびえた眼でした。みんなもかわるがわる女王様の手の中にある魂をのぞきこみ、こんな小さなものに緑の国が支配されていたのが信じられないと口々に言いました。王子たちが女王様に抱きつきました。
「女王様、さぞやおつらかったでしょう。もとはといえばぼく達のせいです。どんなにお詫びしてもたりません。でもどうかお許しください。そしてこの男の魂を無にしてしまい、元の暮らしに戻りましょう」
女王様は2人の王子にやさしくキスを返されました。
「自分の身体と緑の国が支配されてしまったときは確かに悲しくつらい思いをしました。その間男の心が私の中に流れてはいましたよ。私は男の荒れてすさんだ想念が哀れでかわいそうに思いました。ほんの一時にでもこの男の生身の頃の、人間としての思いだしをさせただけでもこの男にも良心があるということがわかりました。自分自身と緑の国を取り戻した今、私もよい勉強をさせてもらったと思いましたよ」

５人の王女たちは女王様の言葉を聞いてその心の立派さにうたれました。緑の国の住民たちも女王様を誇らしく思いました。もちろん2人の王子たちもです。女王様は明るくおっしゃいました。
「さあ、この手の中にあるもの、どうしましょうか」
女王様が手を緩めると、黒いもやもやの中に男の眼が苦しそうにもがいています。王子たちは汚らわしそうに即座に言いました。
「今からすぐに海に流すか、燃やしてしまいましょう」
女王様は微笑まれました。
「いえいえルドラドによって人の心を思い出したもには、もはや真の魔術師とはいえまい。さりとて人間には戻せないし海の中に話してまたよその国で迷惑をかkるかもしれない。やはり緑の国に止め置くしかあるまい」
くろいもやもやを放して女王様は宝砂をかけて呪文を唱えられました。すると男の眼と魂は小さな黒い木になりました。女王様が水をかけてやると黒い木はほんの少しだけ大きくなったようにみえました。けれどきゃしゃで枝も葉もなく踏まれると、それきり土の中へ折れてなくなってしまいそうでした。女王様は黒い木に話しかけました。
「お前は宝砂の力をもってしても、こんな小さなしかも真っ黒い木にしかなれないのだね、かわいそうに。さあ、これからは毎日みんなから水をかけてもらって少しずつでも大きくしてもらうのだよ。
枝から葉が出て、花が咲いて実を結ぶようになりなさい。そうして初めてお前は緑の国の人間になれるだろう。これからの人生はお前の心がけ次第だよ」
小さな黒い木になってしまった男の魂はもう何もいえず、ぶるんと木の先端をかすかに動かしただけでした。ルドラドはつぶやきました。
「これでいいのかしら」
みんなは言いました。
「これでいいどころか、ものすごく寛大すぎる処置だ」

女王様は木のお城から緑の国全体を見回しました。住民たちが元通りの姿になり思い思いに木陰で休んだり、緑の木の実をとってごはんにしたり、緑の木を削って何を作ったりしているのをご覧になり満足されました。

「これぞ、平和というものです！」

ルドラドはまだ小さな黒い木が気にかかっています。もう邪悪な魔術師でなくなった今、怖くありません。木に駆け寄って笑いかけました。

「早く緑の葉を出せるようになりなさいね。人間に戻れたらドラゴン王国へ連れて行ってあげましょう。人間の国が苦手だったらドラゴン王国へ行けばいいのよ。あれは私の国ですごくいいところなのよ。私はその国の王女だからあなたの罪を許してあげられる。だから早く生まれ変わりなさい」

黒い木はぶるぶると小さく震えました。女王様はルドラドを好ましそうに見つめておられます。ルドラドは窮屈だったはずのドレスが脱げそうになっているのに気付きました。運命の女神さまからいただいた緑の葉のドレスが緩んでいるのです。いつのまにか服が大きくなっているのでした。ルドラドはしめた、と思って服を脱ぎました。そして自分の黒い肌をそばにあった大きな緑の葉っぱでくるみ、木のつるできりりと腰をしめるとにっこりと笑いました。

「ああ、生き返った気がするわ。運命の女神さまに怒られるかもしれないけれど、服はね、動きやすいのが一番よ！」

脱ぎ捨てた緑の葉の服を所在なさげに持ち、黒い木にばさりとかけてやりました。

「この緑の葉の服はあなたにあげる。早くこんなにつやつやした葉っぱが出せるように！」

すると緑の葉の服がざざざと揺れました。

そのひと揺れで黒い木が一瞬のうちにたわわな緑の葉を持つ大木になってしまいました。緑の国の女王様が驚いて言いました。

「まあ、ルドラド。あなたはこの服は運命の女神からいただいたといいましたね。まあ、あなたの気前のいいことといったら。でもいいことしましたね」
ルドラドは顔を赤らめて首を振りました。
「この服は私には窮屈でした。黒い木があんまり小さくて励ますつもりで何気なくかけてやっただけです」
女王様も王子たちも住民たちも、もちろん他の４人もみんな大木を見上げて口々に言いました。
「でもよかったわ、本当に」
ルドラドは気分がよくなって踊りだします。
「ああ、身体が軽い、心も軽い、私はうれしい！」
みんなもルドラドの踊りに加わり大木を囲んで踊ります。踊りの輪がだんだんと広がりました。女王様は緑茂る大木に近づいてやさしく語りかけました。
「これであなたも緑の国の木になれましたね。でもあなたのために死んでいった人たちのためにも考えてほしいことはたくさんあります。当面はこの姿のままでこの地にとどまっていなさいね。そして花を咲かせ実をならして緑の国を潤しなさい。緑の生命をもつ緑種の精をうけた以上、あなたはただの木ではなくなりました。わかりましたね、」
葉を茂られた大木はもちろん何もいわなかったけれど、葉からよい新緑の匂いをさせました。それが昔邪悪な魔法使いであった男の返事でした。

５人の王女たちは名残を惜しまれながら緑の国を後にしました。次の国へ向かうのです。女王様と王子は５人に感謝しました。王子たちはルドラドに「いつかきっと君の国へ行くよ」と約束しました。
みんなは固い握手をかわしキスをしあいました。
女王様はじめ王子たちや緑の国の住民たちに見送られて５人は旅立ちました。

空の国・前編

さて、緑の国の海辺を出ますと波はシンと静まりました。今まで5人を待ちかねていたようでした。

いきなり海が割れて海底の砂が舞い上がりました。その砂はみるまにかたまって空の方へのびだしました。やがてそれは天まで届く立派な階段になりました。

5人は目を丸くしてこの光景を眺めます。ここまで見送りに来た緑の国の女王様が微笑みました。

「さあ、空の国があなたがたを待っていますよ」

5人はこの階段を上がると空の国に行けるのだよわかりました。そこで階段を1段ずる慎重に登っていき空の国を目指しました。雲の山を1つ越しますともう下界の緑の国も海も見えなくなりました。ただひたすら上空に向かい、果てしのない階段をあがります。

上も下も、右も左も、青い空の空間に満たされ、気分はなかなか良いものです。が、5人全員がそう思っていたわけではありません。一番後ろで登っていたツルマエの気分が悪くなってきました。

「苦しいわ、頭が痛いわ」

残る4人はかわいそうに思って同情します。ツルマエは昔から高い場所は嫌いでしたし、体力もありません。自分の国にいたころは両親や家来たちにかしずかれて育ちましたので自分の足で歩くことすらまれでした。

この旅行で生まれて初めて自分の身の回り一切を自分でしなくてはならないし、何よりも自分以外の4人が同じ年とは思えないほど、性格がはっきりしているのがわかってきたのです。

それにひきかえ自分は何もできません。何の意見もいえない無口な性格を疎ましく思うのでです。

実はツルマエは、とにかくずいぶんと前から疲れていたのです。

もしかしたら、自分の国を出発する前から疲れていたのかもしれません。みんなが明るい表情で元気に階段を上っていけるのに、ツルマエだけが反対に気分が悪くなり心が暗く沈んでいきます。

マルキンとメイミンがツルマエを真ん中にはさみ心配そうに見つめます。ミイクはツルマエが階段から落ちたりしないように後方に控え、ルドラドは先頭にいて、後ろ向きに身体の向きを変えてツルマエを見ながらゆっくりと階段を上がります。ツルマエはみんなの心配そうな視線を感じながら足を運んでいきます。やがて涙があふれてきました。いったん、泣きだす止まらなくなり、とうとうわあわあと泣いてしまいました。他の４人はびっくりしてツルマエを囲んで口々になぐさめました。

「かなり長く階段を上がってきたし、ここで休もうか」

とミイク。

「そうね」、とはルドラド。

「もっと早くこうすればよかったわね」

とマルキン。

メイミンだけは疲れているならもっと早くそういえばいいのに、、と思いましたがあえて言いませんでした。４人はあれこれとツルマエの世話をやきました。

ツルマエはマルキンにやさしく背中をさすってもらいました。そばらくそうしていると顔をあげて１面の青空を眺める余裕もできました。すると心の中で１つの言葉ができました。

「友達っていいものなのね」

ポツンとでた何気のない言葉ですがそれは自分の胸の中にしみじみと流れて広がりました。４人はツルマエが落ち着いたのでほっとしました。

「何かいうことがあれば遠慮なく言ってね。私は鈍感だから気付かずにあんたを傷つけているかもしれないから」

メイミンがこういうと、ツルマエはあわてて首をふりました。

「不満なんかないわ。私は自分で自分が嫌いなだけ。わけがわから

ないのに、腹がたったり泣けたりするの」
「まあ、どうして自分で自分が嫌いになれるの？」
「うまく言えないけれど、私が何もできない、役に立たないわがままだからでしょう。だから女神様にも嫌われてこんなつまらない、みっともない服を着なくてはならないのね」
　ツルマエは人差し指のない自分の手を見つめます、それからまわりの大人たちに対して命令ばかりして困らせた過去の自分を思い出します。単純明快な思考を持つメイミンにやや軽蔑をこめた視線を向けました。
「あんたって無口だけど、やっぱりわがままねえ。服が気に入らなくて泣いているの？あの運命の女神にいただいたものが不満なのは一緒よ。私はあんたがもらったその薄い透けて見える服がうらやましい。私の服をみてごらん。動きにくい囚人服みたいでしょ。私に剣を取らせては天下無敵の王女だったのに。
　でも文句はこれ以上言わない。この旅行は楽しいから。あんたもこれ以上解決できない文句を人に言わないことね」
　ツルマエはこの服が嫌で泣いたと早合点したメイミンに驚きました。違う、と言いかけましたが彼女のように流暢に自分の考えをいうことができないのでうつむいて再び泣きだしました。
　みんなはもてあますような気分になりましたが辛抱強くツルマエを見守りました。すると一番後ろの下の段にいたミイクが叫びました。
「あれ、大変だ。下の方から階段が消えていく！早く上がらないと落ちてしまうよ」
　わあっ浮足立ちましたがマルキンは落ち着いていいました。
「大丈夫、あれは霧よ。霧が下から上がってきたいるのよ」
　あっというまに5人は白い霧に包まれて何も見えなくなってしまいました。5人はしっかりと手をつなぎあって離れてしまわないようにしました。
「なんだか階段が動いているような気がするわ」

「あら、本当。上に向かって動いている」
「どんどん上に上がっているよ」
不安な気持ちのまま、5人は階段に座り込んだまま上空に運ばれていきます。ツルマエも泣きやんで大人しくしていました。
やがて視界が開けました。階段がキュルキュルと唸り出してすごい勢いで上に上がったかと思うと霧の外へ出ました。同時に階段の動きが止まり5人はポーンと雲の中へ放り出されてしまいました。
あっ、下へ落ちる！と思いきや、意外にも雲の上はふんわりとした綿のように受け止めてくれたのです。
「やっと着いたのではないかしら。ここは空の上でしょう。これが空の国なのね」
「ああ、うれしい。一度は雲の上に乗ってみたかったのよ、すごくいい気分だわ」
「空の国は地面一面、白い雲なんだ。白と青の色しかないけれどいいところね」
雲の中を飛び回り、口々に感想を言い合う中、ツルマエも気分がよくなってはしゃいでいました。

だしぬけに大きく野太い声が響き渡りました。
「やあやあ、空の国へようこそ！」
その声は5人がいままでにいた階段から聞こえました。そこにはとてつもなく肥った男の人が背広とネクタイをきちんとしめて笑いながら5人を眺めています。5人はびっくりしました。
「さあ、みんな時間がないよ、あんたたちがあんまり長く階段の上にいて空の国に着かないんで、私が階段をひっぱりあげたのさ。人間は神様から限られた時間しかもらえない。休んでばかりいると時間がもったいないよ。さあさあ空の国案内してあげよう、急いで、こっちへおいで」
男はにこにこしながら愛想よく5人を手招きしました。5人はさきほどの階段のそばに戻るといつのまにか大きな扉が建っています。

扉自体は透明だったので青い空に溶け込んで全く気付きませんでした。
「ここが空の国の入口です。この扉から出入りしような」
するとルドラドが無邪気に質問しました。
「ここは人が死んだあとに行く天国、というものではないの」
男は笑いました。
「天国は別にある。空の国は空の国。さあ、入ろう。私は頼まれたのさ。時間がないから早く行こう」
男は笑うと顔中がしわだらけになって人懐こい表情になります。ミイクがうれしそうに言いました。
「あっ、この人、ひげがあるとまるでサンタクロースだ。そっくりだよ。もしかしたら本物かな」
男はもっと大声で笑いました。
「あっはっは、残念ながら違うよ。ただクリスマスの忙しい時に、サンタクロースの手伝いならしたことはある」
ルドラドはサンタクロースが誰なのかは知りませんでしたが、うれしくなって聞きました。
「じゃあ、おじさんの名前はなんていうの」
男は笑うのをやめました。
「私には名前はないんでさ。空の国には名前のある人はいない。名前がないと不便に思うなら、あんた達は私をピクルスとでも呼んでくれ。ピクルスは私の好物なんでね」
それで5人はその男を「ピクルス」と呼ぶことにしました。ピクルスと一緒に透明の扉を開けて通り過ぎると同時に大勢の人々のざわめきが、わーんと聞こえてきました。
いろいろな格好をした人間がいろいろなものをもったり、書いたり、作ったりして忙しく働いているところでした。ピクルスが5人を招き入れて扉を閉めると扉は消えてなくなり雲の地面の上で働いている人間でいっぱいになりました。空はあくまで青く澄んでいる中、働く人々はわきめもふらず一生懸命作業をしています。来たば

かりの5人に目を止める人はいませんでした。ピクルスも忙しそうにせかせかと5人を手早く案内します。
　あれはモノを削る人、あれはモノを溶かす人、あれは文章を書く人、絵を描く人、あれは文章を消していく人、
　そう、そこにいる人々は次々とモノを創りだしてはこわしていっているのでした。ピクルスは何を急いでいるのか早口で案内していきます。5人は目を丸くして見学していました。5人ともまだ子供だし仕事をしたことはありません。大変そうだと思いながらも1つのモノを作る人と、同じモノをこわす人と一対になって、結局は何も創りだしていない人たちを見てヘンだと思いました。空の国はそれぞれが想像していたのと全く違う、忙しいだけの国のようです。その忙しい仕事は何のためにやっているのかわかりません。そこが不思議です。でも5人は遠慮して何も言えませんでした。
「みなさん、お忙しそうですね。あのう、みなさんいつ休まれるのですか」
　マルキンがピクルスに聞きました。
「いや、休むという言葉はこの国にはないのです。私達は働くだけです。神様がそう命じられたのでね。この国には神様の命令を受けられた「鐘様」というのがいらっしゃいます。そうそうみなさんは鐘様にお会いになられますよ」
「鐘様・・、どんな御方でしょうか」
　5人が尋ねるとピクルスは笑顔を消し口を閉ざして何もいいませんでした。怖れているような感じでした。みんなはものめずらしそうに働く人の手元を見たりしていました。ツルマエだけはばかばかしくてしっぽを向いています。モノを創りだす傍ら、モノを壊す人たちの存在自体が無意味に感じられるのでした。この人たちは住んでいるところが空高くとも、身分はきっとすごく低いに違いないと軽蔑しました。ツルマエはピクルスに言いました。
「では早くその鐘様に会わせてください」
「それが鐘様の居所は私にはわかりません。鐘様の方からあなたが

たに会いにこられるはずです」
　ツルマエはその返事を聞いてここの鐘様とやらも、自分のお城がないようだし大した人物ではないわ、と思いました。ツルマエ以外の４人はおもしろがってピクルスの後ろをついて歩きました。口々にしゃべりながら見学している中、ツルマエだけがつまらなさそうに１人遅れてぶらぶらと歩いていきます。
　カーン、カーンン！！
　カーン、カーーーンンンッ！
　カーアーアーアーアーンッ！
　カーアーアーアーアーアアンンンンッ！！
　いきなり上空から鐘のつく音がしました。するとまわりはもっと作業の手を早めました。いろいろな形のモノが創りだされては壊されていきます。ピクルスも何かあわてているようです。鐘の音はひっきりなしに続いて耳が痛いほどです。
「あの鐘はどこから鳴っているのかしら」
　マルキンが問いかけるとピクルスは質問を両手でさえぎりました。
「鐘様があなたがたを迎えに来られたのでしょう、私の仕事はここまでです。鐘様が来られるまで、お客様を案内するのが私の仕事ですから」
　言い終わるとピクルスは５人を置いてきぼりにしたまま、どこかへ行ってしまいました。まわりは忙しげに働いている人ばかりです。みんな大人で５人には目もくれず黙々と働いています。
「みんなよく働いているわ。家もなく水もなく、緑もないところで。そして子供も動物も鼻もないところで。一体どういう人たちだろう。なぜ、働いているだけなのかしら」
　マルキンがつぶやくとメイミンが言いました。
「ここはつまらないところだわ。あのピクルスという男、私達をほっぽり出したまま帰ってこない。あれでも案内人といえるかしら」
　ツルマエも言いました。
「私も同感だわ。早くその鐘様にとかいうのと会って、さっさと空

の国を出たいものだわ」
　鐘の音はあいかわらず続いています。その音がここにいる人たちを恐れさせているようです。どこから聞こえてくるのだろう。５人がきょろきょろしていると、上空が光りました。すると働いている男の一人が叫びました。
「わあっ、鐘様のご来臨だ、こっちへ来られるぞ！」
　そういうなり、より一層手を早く動かして働きだしました。周りの人たちも同じようにしてより一層急がしそうにしています。
　カーーーンン、カアアアアアーーーーンン、
　カーアアアーーーアアーンン
　すぐ耳元から鐘が鳴ります。でも鐘なんかどこも見えません。やがて上空から声が聞こえました。
「ようこそ、みなさん。空の国へようこそ、上へおあがりなさい」
　上とはいっても青い空が広がるばかり、どうやってあがるのだろうと思っていると再び階段が出現しました。そこで５人は階段を上って行きました。５人は大喜びです。やっと空の国らしくなってきたからです！今までに見た光景は想像していた空の国とはあまりに違っていたからです。

空の国・中編

階段を上がると同時に丸いドームが見えました。銀色の優しい光に満ちた球形のドームです。下方には働いている人たちが視界いっぱいに見えました。メイミンが言います。

「ああ、ここが鐘の音の元なのでしょう、でも誰もいませんね。鐘様って一体どこにいらっしゃるのでしょう」

すると足元から声がしました。

「あら、さきほどからここにいますわよ」

足元を見ると小さな女の子が3人、かたまってくすくすと笑っています。5人のひざほどしかない小人でした。ふわふわとした羽根のようなドレスをまとっています。この小人たちが空の国の鐘様なのでしょうか・・・。とまどっていると小人の一人が心の内を見透かしたように大きな声で笑いました。

「そう、あたしたちが空の国の管理人であり、支配者なの。鐘様ってあたしたちのことよ」

そういった小人は丸坊主で緑色の目玉をぐりぐりさせています。もう一人の小人はどうやら盲目らしくかたく目を閉じたまま、自分の背丈以上にある長い髪をもてあそびながら微笑んでいました。

「空の国へようこそ」

残る一人はきっとこの3人の中での代表格なのでしょう。金色をした3つの眼玉を持ち、口が耳までさけている異形の顔立ちです。しかし醜くはなく、どことなく威厳がありました。その小人だけが金色に輝く長い杖を持っていました。

双方しばらく沈黙があったあと、5人は自己紹介をはじめました。それから鐘様といわれる3人の小人たちも改めて自己紹介しました。

3つの眼玉がある杖をもった女の子はロア、長い髪を持つ盲目の女の子はロイ、丸坊主の女の子はロウ。

ロアは3つの金色の眼玉をぐるぐる動かしながら重々しく締めくくりました。
「あたしたちは3人で1つなの。この空の国の絶対権力者です」
双方の間にまた沈黙がありました。5人はこの鐘様が運命の女神さまにいわれて招いてくれたものの、あまり歓迎してくれていないようだと敏感に感じたからです。それで会話が続かないのかもしれません。マルキンは言いました。
「空の国へ招いてくださってありがとうございます。大勢の大人たちが一生懸命働いていらっしゃいます。お忙しいところにお邪魔してごめんなさいね」
「うふふ、下界の高貴なお育ちのお姫様にはこの国はきっと気に入らないでしょうね」
とロウが答えました。他の小人はくすくす笑いました。
そして3人とも笑い終わるとツルマエをじっと見ました。ツルマエの顔と薄いドレスと冠を見上げるようにじろじろと見ます。ツルマエは不愉快に感じました。異形の小人から見つめられることを耐えられない侮辱に感じました。ツルマエはつんと肩をそびやかせました。さきほどの気弱な自信のない様子はどこも見られず尊大な感じです。そしてこう言い放ちました。
「ああ、私はここからもう出たい。こんな国は気に入りません。全く気に入らない。さあ、私を次の国へやってくださいな」
ロア、ロイ、ロウの3人を軽蔑したように見下して言うと大変冷たい印象を与えました。ツルマエは自分の国ではこうして目下のものに命令していたのでしょう。マルキンとルドラドはあわてて言い直します。
「空の国を見せていただいて感謝しています。どうもありがとう」
しかしロアはツルマエを見上げて憤然と聞きました。
「ちょっとあんた、名前は」
「ツルマエ姫よ・・」
「ふうんあんた、その態度はなあに。運命の女神さまはねあんたに

鐘の杖をやってくれ。交換としてツルマエの冠をあげるからって言われていたけどね、」
「そんな話は知りません。鐘の杖ってその金の杖のことかしら。だったらいらない。この冠が欲しいならあげてもいいわ。だけどどうしたってこれは取れないわよ、おあいにくさまね！」
ツルマエがそう返すとロア、ロイ、ロウが怒りました。
「あんた、何も知らないくせに。それなのにいばるのね。あんたはこの下で働いている能無したちよりも自分が偉いとおもっているでしょ、けれどあんたの方が最低だわ、私はあんたが嫌いよ」
ツルマエも負けずに応戦しました。
「あんたたちはそろって見るからに化け物じゃないの。私だってあんたたちが嫌いだわ」
あっというまに口げんかが始まりました。同じ仲間に対しては気弱でおとなしいのに、この3人に対しての強気な態度に驚きながら他の4人はあわててツルマエを止めました。が遅かったようです。ロアが金の杖を振り上げてツルマエの身体をドーンとつきました。するとツルマエの真下だけ雲の床に穴があきました。
「そこのお前っ、ツルマエ！出ておゆき、下の能無し人間どもがあたし達の何に怖れ何に従っているのかを、よく見極めておいき！」
・・あーーーーーっ！
ツルマエは杖にはじきとばされ、ドームを突き抜け空中へ飛ばされました。思わず死を覚悟しましたがふんわりとした雲の地面に着地しました。怪我も何もないようです。目を開けるとさきほどと同じ場所に戻っていました。
ツルマエはあたりを見回しました。上空にはもう階段もドームも見えません。空はあくまでも青く澄んでいました。青と白い光景。あたり一面は黙々と働く人間でいっぱいです。心細くなって誰か私に声をかけてくれないか、と思いました。が誰もツルマエには目もくれません。さみしくなってあてどもなく歩き回ります。そして自分をこんな目にあわせた鐘様を恨めしく思います。でもそのうち他

の４人がとりなして探し出してくれるでしょう。
　そう自分をなぐいさめつつ歩いていると四角い机ばかりが整然と並んでいる一角に入りました。ツルマエはここで案内人のピクルスを見かけました。
「ピクルス、ピクルス！ああ、会えてよかった。ここからどうやって出ればいいのか教えてちょうだい」
　ピクルスはかけよってきたツルマエをちらりと見ました。肥った身体を小さな椅子に押し込めて仕事の手も止めずにこりともしてくれません。
「今、忙しいんだ」
「えっ、でもあなた、さっきは私達を案内してくれたじゃないの」
「それは鐘様のお言いつけだったからさ。今は何も命令されていない。命令されたこと以外は何もしないこと。それも私の仕事なんでね」
　ピクルスは大きい背中を丸めてせっせと何か書き物をしています。ツルマエは彼の態度に傷つき怒りながらも一体何の仕事をしているのかのぞいてみました。
　彼の仕事はどうやら文字を書くことのようです。でもその文字はアルファベットのＡとＢとＣのみです。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ａ・Ｂ・Ｃ、とそれだけを大きな用紙を広げて小さい文字で繰り返し綴っているだけです。大きな手で小さなペンを握り忙しそうに書いています。ツルマエはその隣の机も見ました。その隣の机も、またその隣の机も、その隣の隣の机も・・・。
　ピクルスのいる一角は全員が文字を書いています。アルファベットのＬ・Ｍ・Ｎだとか、Ｏ・Ｐ・Ｑとか簡単な文字ばかりです。ピクルスは独り言を言いました。
「この国にあるだけの紙をできるだけ早く埋めてしまわないといけない。私はこの仕事を１００年ほど続けているがまだまだ紙がる。向こうの一角は私が書きあげた紙を焼く仕事、その反対側は焼いた紙の灰からまた紙を作る。その白紙をまたこちらに持ってくるのが

仕事。私は紙に文字をどうして書かないといけないのかわからない。が、書かなければ仕事にならない。他にも何かを壊したり、移動させたりする仕事もあるが、よくわからない。なあ、もういいだろう。気が散るから早くどこかへ行ってくれ、私はいそがしいんだ」

「そんな仕事が何の役に立つというの。いいから、この国を出る方法を教えてちょうだい！」

ピクルスはツルマエを見もしませんし、話もしませんでした。ツルマエは怒り、泣き叫びました。でも誰も彼女の方を見ません。みんな机に向かって文字を書いています。

「・・ここの人たちはみんな気がくるっているのだわ」

ツルマエは怖くなって駆けだしました。だけどどこへいっても忙しそうに何かを持って運んだり、壊したり作ったりしているだけです。単調な作業を一生懸命しているだけです。白い雲の地面に青い空をバックに子供もいず動物もいず大人の人間だけで仕事だけをしています。

ツルマエは屈辱感でいっぱいでした。自分の国に帰れば王女なのに。父上と母上以外には誰にも頭を下げなくても良い、一番偉い女の子なのに。この私が困っているというのに、知らん顔をされるなんて。ああ、憎らしい、憎らしい。私の家来だったらこの国の人たち全員を死刑にしてやるのに。

ツルマエは途方にくれながらロア、ロイ、ロウを恨みました。ぶつぶつと恨みの言葉を吐き出しながらあてども歩き、泣いていました。

さんざん歩き回って足が疲れたころ、かすかに女の人の歌声が聞こえてきました。懐かしい故郷の母上のお声に似た歌声です。ツルマエはその歌声を頼りに歩いて行きました。するとある一角で働いている人間達がふいと消えてなくなりました。雲の地面が地平線上一杯に広がっている広場が出現しました。その中心に大きなモミの木が1本、立っています。歌っているのはその木陰に立っている女の人でした。

近づいてみるとそれは何と運命の女神さまでした。女神さまはツルマエに気付くと歌うのをやめて話しかけました。
「空の国が気に入らないようね、おばかさん」
女神さまは皮肉な微笑みを浮かべたままツルマエを見下ろされています。ツルマエは自分から女神さまに話しかけるのをためらわれ、頭をたれました。言うべき言葉も思いつきません。遠くで人々が働いているざわめきがします。この大きなモミの木だけが雲の地面から生えていて、あとは何もない空間でした。
この異様なだけどすっきりとした環境の中じっと黙って立っていると、ツルマエは今自分のいる場所が
信じられません。さみしさと自分の無力感をじっくり味わいました。私って何なのだろう。私が故郷を出て行ったきっかけ、あれは何だったのだろう。ああ、指、指だった。指のこと。私の指は1本だけ魚に食べられてなくなってしまった・・。あれがこの旅のきっかけだった。
ツルマエは自分の欠けた指をまじまじと見つめました。故郷の国を出てから想像もつかない出来事ばかり続いていたので自分の指のことや、裸身に近い服を着て重い冠をつけていることさえ、忘れていました。
運命の女神さまは腰を低くかがめられました。ご自分の両手を膝小僧に置かれてさらに頭を低くさげられました。そうするとツルマエと同じくらいの背丈になりました。女神さまがいとも自然にされる動作を見てある不思議な感情にとらわれました。ツルマエの国では頭を下げる行為は身分が低いものがする仕草の象徴であったからです。彼女は初めて女神さまのお顔を近くで拝見しました。
女神さまのお肌は思っていたより白くありません。どちらかというとツルマエのような黄色い肌でした。長い髪は焦げ茶色で腰の辺までゆるやかなウェーブがかかっていました。目はミイクやマルキンのように深く窪んでいて二重で真っ黒な瞳でした。光の加減で水色や青、時として赤色にも見える不思議な瞳でした。大きくひきし

まった唇、高い鷲鼻、実に美しい女神さまでいらっしゃいます。
　ツルマエははじめて女神とはっきりと視線をかわしました。そして何となくにっこりしました。なぜ自分がそうしたのかはわかりません。だけど女神さまの方でもにっこりとほほ笑んでくださったのです。ツルマエは安らいだ気分になりました。今までのあせりにした、孤独な気分が消えてなくなりほっとしました。気楽になったツルマエは女神さまに問いました。
「ああ、運命の女神さま。あのこの空の国は何の国でしょうか？鐘様と言われているロア、ロイ、ロウは何者でしょうか。私がこの国に来たのはなぜでしょう。ああ、私は私の国が懐かしい！帰りたい。でも帰れば私はどうなるの。どうか私の運命を教えてくださいませ」
　女神さまは目を細めてツルマエをご覧になりました。
「少しは自分を考えるようになったのかい、いいことさね。じゃあ、自分の国のことを思い出して私に言ってくれるかい、この空の国とどう違うというのかね」
「女神さまは私を悪い子だと思っておいでですよね、私はみんなからいい子だといわれて育ちましたのに、家柄だって一番いいのですよ。私の国は上下の位がとてもはっきりとして暮らしやすいのです。私が一番偉い女の子だから座っているだけでご飯が出てきて食べさせてくれますし、着物も一番いいものが着られるし、あくび１つしただけでお蒲団が用意されてきます。私が睨みつけただけで家来はその場所にいられなくなります。私はどんな願いでもかなえられる特別なお姫様でした。それが・・、旅に出てからは何もかもが変わりました！
　女神さま、私は私の国へ帰りたい。こんな服はもう着ているだけで恥ずかしい。もう嫌です。他人に自分の心を見透かされているように思えます。もう何もかもが嫌になったのです。どうか助けてください」
　女神さまはすっくと立ち上がりました。そしてツルマエを見下ろされきっぱりとした威厳のあるお声で命令されました。

「あんたをこのままにして、あんたの国へ返しません。帰りたいのなら、この空の国だけでもよく見てからにしなさい」
女神さまは遠目に見える働く人間達を指さしました。ツルマエもつられて指先を見ました。
「この空の国をどうみましたか、大人の人間、働くしか能のない人間・・。それらの人間を支配しているのがロア、ロイ、ロウの3人の鐘様。彼女は彼らが怠けるとすぐに殺してしまいます。殺されると再生はありません。この国の人間にとって鐘様は恐怖と死の象徴です。あそこで働いている人間はいくら働いても何の見返りもないし、休んだりご飯を食べることもありません。彼らは人間に見えても人間ではありません。生きているように見えても、生きてはいません。働く亡霊たちなのです」
ツルマエはショックを受けました。
「女神さま！私は空の国は天国・・、つまり生前良いことをしたものだけが入れる楽園の国だとおもっていました。でもそうではないのですね」
「まったく違います！この空の国は空しい国なのです！」
「空しい国、ですって！なぜ私をここに連れてきたのですか。ロア、ロイ、ロウがじっと私を見つめていたのは何か理由があったのですか」
女神さまは厳しいお顔をなさいました。
「最初に着ていた分厚い豪華な衣装を取り上げて、今着ている薄い服を与えたときのことを覚えているかい」
ツルマエは唇をかみしめてうなづきます。
「女神さま、私はこの服が嫌いです。でもあなたはわざとそういうふうにしたのですね。役に立たない仮面をもらったマルキンは仮面を通して美しくなったし、ルドラドは緑の国で、緑の精の服を通して国と1人の魔法使いを救ったし、そういう意味では今度が私の番なのでしょう。きっと。でもこの薄い着物と重い冠が他の人の役に立つとは思えないわ」

「まあお前は察しのよい子だね。確かにその意味では空の国はあなたの番ともいえましょう。でもあの鐘様達を怒らせたのはいけなかったね」
ツルマエは憤然としました。他人からたしなめられるのははじめてです。
「怒ったのは私の方です！」
女神さまはツルマエをにらみつけて黙らせました。
「あなたのやることはまずわびることね。眼の見えないロウは他人の心を読み取れます。彼女達は唇を使わず心の中でお互い会話ができます。あのロア、ロイ、ロウの3人は、3人で1人の鐘様になります。
あなたはこの国の人間が恐れている鐘様を見て軽蔑したでしょう。それはなぜか？鐘様達が小さい無力な小人に見えたから。チビではげていて、盲目で、眼が3つもあって自分とまったく違う容貌をしていたから。そうでしょ。ロウはあなたの心の中がわかったのですよ。あなたに親しみや思いやりがただの1かけらすら見えないのにがっかりしたのですよ。あんた、自分を恥ずかしいと思わないかい？
さて親しみや思いやりって一体何だろうね。こればかりは運命をつかさどる女神たる私もどうにも細工はできない。
私は確かに人間の運命の航路をおもいのままに操作できる。でもその航路の舵をとるのはその人の心の中です。心の中までは私は操作できないね。だって心はその人だけの持ち物だから。心の中にある一番大きくて大事な舵は親しみと思いやりです。私の言うことがわかりますか、鐘様はあなたの心の中に潜んでいるその何かを欲しがっています」
ツルマエには女神さまのおっしゃっていることがのみこめませんでした。そしてロア、ロイ、ロウの3人にもあやまりたくはありませんでした。自分もそうでしたが鐘様の方からだって好意をかんじられなかったから当然のことです。
だけど当面はおっしゃられるとおりにしないとこの旅は続けるこ

とができないでしょう。他の４人ともはぐれたまま自分ひとりでこんな空しい「空の国」に取り残されてしまうでしょう。
運命の女神さまは自分を国へ返してくださる気持ちはこれっぽちもないのです。これからの自分の行動は自分で決めなくてはならないのだとわかりました。ツルマエは言い返しました。
「あなたは確かに運命の女神さまです。でも私の運命をもてあそんで楽しむ悪い女神さまです」
言ってからツルマエは少し後ろめたい気持ちになりました。女神さまはそういわれても怒りませんでした。
「そうかもね、」
ただ一言、そう仰せになるとふっと消えてしまわれました。広場に残ったのはツルマエ一人です。いきなり姿を消されてしまわれたのでツルマエはびっくりしてあせりました。あわてて女神さまを呼びお詫びの言葉を叫びましたがもうどうにもなりませんでした。

空の国・後編

ツルマエはまた一人ぼっちになりました。モミの木のまわりには鳥も飛ばす花も咲かずしんとしています。空の国は「空しい国」・・死以上の国なんだわ・・。

急に肌寒くなり、働く人のざわめく方向へと足取り重く歩いて行きました。人間達が働く中、やはりここは嫌でも鐘様に謝らないといけないのだわと思いました。何のために謝るかはまだ自分にはよくわかりません。でもそうしなければここから出ることはできないでしょう。ツルマエは唇をかみしめました。こんなにさみしい思いをしたことは初めてでした。

朝目覚めればまわりに使える女たちが平伏して挨拶してくれます。乳母が髪を綺麗にすいてくれて結いあげてくれる。食事が運ばれる。全部好きな食べ物ばかり。同じ年の女の子ができて自分がしたい遊びを一緒に付き合って遊んでくれる。そういえばあの子たちは自分から何をして遊びたいかは決して言わなかった・・。ツルマエは何も考えることなく食べ、遊び眠るだけという生活をしていただけだったのです。大勢の人たちに仕えられてきたツルマエという高貴な王女は、たった一人では何もできないつまらない女の子だったのです。ここまで考えて唇をもっときつくかみしめました。

この世の中には自分の思い通りにならないものはない、と思っていたのは大きな誤りだったとわかります。ときには思い通りにならなくともそれを抑えてふるまわねばならないこともあるのがわかりました。

「私って一体なんだったのだろう」

突然ツルマエは震えだしました。今の私には何もない。家来も宝石も両親もすむところもない。お金もない。私は何もかも持っていない。

今まで家来たちが私に恭しく仕えてくれたのは私が偉いからでは

なく、私が父上と母上の子供だったからだ。私自身はちっとも偉くはなかったのだ。どうして今までこんな簡単なことがわからなかったのか。深い自己嫌悪にとらわれます。ああ、自分で自分が恥ずかしい。

目の前では誰かが何かを作り壊し、抱え焼いています。あるものは服をきちんと着こんで何かを書き、またあるものは裸体のままで何かを作り、そのそばにいるものがそれらを壊していきます。忙しそうに働くものばかりです。ツルマエはさきほどよりはしっかりとした足取りで周りの様子を慎重に見ながら進みました。こうして空の国を見て歩くうちに、鐘様や他の４人の仲間が見つけてくれるに違いありません。

こんなに何の取り柄もない私だけど、きっと４人の友達は私を心配してくれている・・これも確信できます。それまではこの空しい国を見ておこう。きっと何か見つけられるはずだ。

ツルマエの心の中では本人も知らないうちに大きな信頼と自我の芽が出てきていました。まだ気づきはないけれど、やがてそれは心の航路の大きな舵となってくれるに違いありません。何をも恐れずなんでも1人でこなせるのが本当に偉い人なのだという真実を自分で悟ったのです。今までの不満は何かをされて当たり前の身分という甘えからきていたのを悟ったのです。期待することは悪いことではない、でも当然だと思わないこと。願いがかなえられて当たり前ではない。己を知らないこと、それは恥ずかしいこと・・。今までの自分は恥ずかしいけれど、これからの自分は違う。違う自分になったのだ。

ツルマエは旅を一緒に続けてきた大事な友達の顔を誇らしく思い浮かべました。そうすると心強くなって元気がでるのです。

すると向こう側から1人のお年寄りに会いました。彼は白い小さなボールをかごも使わず手で運んでいます。ボールは腕の中で今にもあふれんばかりに波打っています。おまけに疲れているのかよろよろと歩きます。大変、ボールが落ちてしまいます。

ツルマエは白布をはさみで切っていた別の男の足元から布地の切れはしを「1枚くださいませね」と断ってから広げます。
「さあ、おじいさん。これでボールを包んで運んだらずいぶんと楽になるわよ？」
他人に何かを申し出るという行為は初めてですからツルマエはドキドキしていました。老人は足を止めて小さな女の子と布地を見ました。ツルマエは重ねて言いました。
「ねえ、この布を使ってみて。仕事もやりやすいでしょうし」
老人は首を振りました。
「いや、ボールを運ぶのが私の仕事であって布地は運ばないのでな」
にこりともせず、それだけを言うとよろよろと向こうへ行ってしまいました。唖然としていると今度はさきほどの布地を切っていた男がやってきました。
「この布は私の布だ。さわるな。早く返せ。仕事の邪魔をしないでくれ」
言うなりツルマエの手から布を取り返し、はさみで小さく切りだします。彼らはツルマエを拒否したのです。よかれと思ってしたのでツルマエはショックをうけました。私がいけなかったのかしら、頼まれもしないことをしたから・・。礼を言われて当たり前の行為をせっかくしてあげたのに、いえ、違う。私が期待したのは受け入れと服従とへつらいの微笑み・・・。
期待するのはわるいことではないけれど、それがかなわくとも怒るまい。あの人たちはこういう人間なのだ。空しい国の住人はもともとこういう人たちの集まりなのだから。ツルマエは黙々と働いている人たちに憐れみを感じました。ああかわいそう、私は怒るまい、「邪魔だ」と言われても怒るまい。泣くまい。私が怒るとその相手を同じレベルの人間になる。これは王女らしくないみっともないことだ。ここまで考えて過去の自分を思い出しました。自分はいったい今までなにをしてきたのか。
今まで仕えてくれた人は本当は私のことは大嫌いだったに違いな

い。王女だったからいいなりになってくれたのだ。私の「世話」というのが「仕事」だったからだ。そうだったからだ。だから今まで友達がいなかったのだ。思いやりも愛も友情もなかったのだ。それが何なのか、知らないままに大きくなってしまったのだ。でも知ってよかった、わかってよかった・・・。私は生まれ変わったのだ。

ツルマエは空の国の空を見上げました。空はあくまで青いままです。この空の国には夜は存在しないのかもしれません、でも気になりません。疲れません。だって私はあるがままの自分を受け入れて生まれ変わったのだから。

あるがまま、なすがまま、それでいて自分の心をしっかり持っている。そういう人間になろう。それで当たり前だったのだ。今となっては遅いかもしれないがいや、遅くはない。私は私、がんばっていこう。

ツルマエは足取りも軽く歩きました。薄い服が肌にやさしくまとわるように思えていい気分です。

「さっきまでこの服は嫌いだったけれど、今は大好き。気持ちの持ちようでこんなに変わるものなのね。軽くて薄くて美しくて動きやすい！この冠もいいわ。今では全然重たくない！」

これはきっと自分が強くなったからかも。心も何もかもが軽くなっていく。心が強くなるって身体が軽いものかしら。軽くって軽くってうれしい。空が飛べるかと思うくらい。

心が軽い、身体が軽い、軽い。軽い・・・。

ツルマエは本当に空が飛べるほど自分が身軽になっているのに気付きました。ああ、空が飛べる。飛んでみようかと考えたら服の裾が鳥の羽のように広がっていきます。ツルマエは両手を思い切り広げ、雲の地を蹴りました。そして青空へ飛び出しました。

飛びました！

裾を回すと方向も自由に変えられます。好きなように飛んでいると、何かにぶつかりそうになりました。青空に透けて見える透明の鐘です。ぶつからなかったのは鐘の周りに無数の小さな鈴がついて

いたからです。鈴は小さくリンリンとなっていました。
さてどうやってこの鐘の中に入りましょうか、多分この中に3人の鐘様と4人の友達がいるでしょう。ツルマエは鐘のまわりを回りました。と、再び鐘が鳴りました。
カーン、カーン、
カアアアーーーーンンン・・

鈴のかたまりが階段になりこちらへ近づいてきます。ツルマエは喜んでそれをたどって鐘の中に入りました。するとさきほどのドームが見えてきました。元の位置に戻ったのです！3人の鐘様と4人の友達が手を振っています！ツルマエは裾がふわっと広がるのを手で押さえ、ゆっくりとドームの床に着地しました。同時に待ちかねていたようにマルキンとルドラドとミイクとメイミンが彼女を囲みました。
「ああ、やっと帰ってきてくれたわね」
「心配していたよ」
みんなで互いに抱きついたり歓声をあげました。喜んで迎えてくれた友人の顔を見てツルマエはまた涙が出そうになりました。これは安心の涙ではなく、心の奥底から出てくる温かい涙でした。ツルマエは心をこめて礼を言います。
「ありがとう」
ロア、ロイ、ロウが横に立ちます。前とはうってかわった雰囲気でツルマエの顔を見てにこにこしています。ツルマエは屈んで3人の鐘様を一緒に抱き締めました。3人の小さな鐘様もツルマエを抱きしめます。ツルマエは心の中で謝りました。
「さっきは高飛車な態度で本当にごめんなさい」
すると「いいのよ、」という返事がありました。直接心の中で響いたのです。ツルマエの心を読み取って3人の鐘様が返事をしたのです。ツルマエはますます鐘様達をかたく抱きしめました。他の4人の王女たちはツルマエの表情がまるで別人のようにいきいきしてい

るのでびっくりしました。
「1人で空の国を見ている間に何かあったのね」
マルキンの問いかけにツルマエはうなづきました。
「ああ、運命の女神さまに会ったわ」
「まあ、それでどうなったの」
「女神さまは何もおっしゃらなかったわ。でもわかったの・・」
彼女はぽつぽつと自分の思ったことをしゃべりました。今までの自分はやめて生まれ変わった気分で。恥ずかしい思いもしますがかけがえのない4人の友達にはわかってほしくて説明しました。今まで自分が一番高貴で偉い女の子だと思っていたが間違いだったこと、自分の思い通りに人や人の心が動くのが当然だと思っていたのを後悔していること。今後は反省して周りの人に感謝してめぐまれた生い立ちに満足することなく自己の向上をめざすこと。
自分よりも他人のためになることをやってみたい、自分の感情をコントロールできない事態になっても心の持ちようでまた、考え方次第で状況を変えていけるだろうと思うことを。
ツルマエが語る言葉はまるで哲学者のようです。4人は驚くと同時に感心もしました。ツルマエは4人の顔をしっかりと見つめて言いました。
「これは誰にでもわかることだったのね。今までの無知な自分が恥ずかしい。わがままばかり言っていた私を許してほしい。そしてこれからも仲良くしてほしいの。国にいたころは友達なんていなかった。でも今はいるわよね、本当にこれからもよろしくね、仲良くしてね」
マルキンは言いました。
「簡単な真実だとは言うけれど、これを言葉に表すってとても難しいと思うの。偉いわ、しかもあなたは書物ではなく、自分で見つけたもの。そして実行もする。もうすでに。私はあなたの友人であることを誇りに思う」
ロアがツルマエに近づいて背丈をのばします。

「ほんの少しの間に1人で空の国をまわっていただけで強くなったものね」
ロイも言いました。
「それでこそ運命の女神さまが見込んだ女の子だわ」
ロウも続けます。
「鐘の持つ、空の国の鐘の杖を持つに十分足る資格があるわよ」
3人の鐘様はうなづきあい、ツルマエに鐘の杖を渡します。ツルマエは固辞しようとしたのですが3人は許さず受け取らせました。
鐘の杖は素晴らしい芸術品でした。天地人、あらゆる森羅万象を形取ったもので細工されていました。それは見事でいつまでも見あきないものでした。
「ありがとうございます・・、でもなぜ私に？」
ツルマエは杖を前にいぶかしげに問いました。ロアが大きく手を広げて答えました。
「それはね、あなたの心から無垢の想いが生まれたから。その服をご覧。あなたは自分の心を宙に浮かせて飛んできた。服が翼に、冠は輝く。あなたはどんな鳥にも負けない力強さでここまでやってこれた。その服をきているとあなたの心が望めばいついつまでも空が飛べる。その愛の心を大切に」
ツルマエは朗らかに笑いました。
「ええ、そういわれてみれば確かに私は空が飛べた。この服のおかげです。心を軽くすると、この服は翼の代わりになって身体を飛ばして運んでくれるものだったのね。これを授けられた時はあまりにも薄くて軽くて不満だったわ、バカな私。
それにしても運命の女神さまは考え深い御方でいらっしゃいます。もしかしたら私はこの服の価値もわからない、嫌な女の子のままであったかもしれないのに。でもこの服はもう私には必要ないわ。だって大地を踏みしめていられる2本の足があるもの。だからもういいわ、欲しいものは何もないわ。
でもこの杖はくださるというなら、私の生まれ変わりの記念にな

るからいただくわ。とても素敵な杖。ああ、3人の鐘様方、私にお返しできることはないのでこの服を受け取ってくださいな」
ツルマエはさっと服と冠をとってロア、ロイ、ロウにふんわりとかぶせました。服は3つの破片に分かれて元から3着あったようにかぶさりました。ちょっと前までは冠は確かに重たいだけで薄い着物は人を見透かされるように透き通って役に立たないものだったのです。だけどもう素晴らしい宝物に変化しました。持ち主の心が変わったので空を飛べる翼をもつ宝物になったのです。そうツルマエの心が着物を変えました。ロア、ロイ、ロウは喜んで着物を受け取りました。
「私達は着物と冠をもらったのではなくあなたの生まれたばかりの思いやりの心をもらったのです。このベールの替わりに鐘の杖をお守りするように身体を覆ってもらいましょう」
すると鐘の杖は見事な森羅万象を描いた紋様のドレスになりました。

5人の王女たちはこうして空の国を出ることにしました。お別れの時にツルマエは5人を代表して鐘様に聞きたくてならなかった質問をしました。
「空の国で働いているあの人たちは何なのですか」
ロアが明快に答えました。
「あの人たちも元は普通の人間です。だけど人間であった頃、働くことが大好きでお金のために一生懸命働いていたの。立派な心がけだけど働くことを除けば何も残らない人だったの。確かに社会には役立ったけれど、ね。だけど自分と一緒に神様に与えられた生、空や雪、森、花、水、海、鳥、動物にはまるで関心がなかったの。ありとあらゆることに感謝せず、一度も生きる喜びを実感できず、神様を賛美しなかったの。
悪い行いをする人間は神様がお嫌いになりますが、悪い行いをしなくとも自分の見える範囲でしか動かず働けない人間をも神様は嫌

いたもうのです。神は寛容でかつおやさしい。これらの人間達のためにもこの空の国を造り、空しい楽園を創りたもう。
ここにいる人間達はみんな人間であった感情をも忘れて働く人です。仕事に取り付かれた人たちのための国です。私達は彼らを支配する。彼らは仕事を愛し、かつ怖れている。疎んじてもいる。でも仕事ができないと、どうしてよいかわからない。だから仕事を取り上げたり、仕事ができなくなるようにすることができる権利を持つわれらを恐れる・・。
わかった？
ツルマエ、その着物はあなたによく似合う。鐘の杖がドレスになったのは人間の力及ばないところですがあなたに愛の心が生まれたことによって強い力が出たのです。これは魔法だと思いますか、違います。魔法は人間の力にないものです。でも本来は人間の力といえどもないものはないのよ。さあ、鐘の杖が替えた着物を着ていくがいいわ。ツルマエ、これからもあなたの心から生まれた感情を愛しく大切にね。あなたは生まれ変わり、新しい力が備わったのだから」
ツルマエは3人の鐘様に感謝しました。そして5人は空の国の雲の大地を踏みしめて次の世界をめざしました。

ロア、ロイ、ロウはツルマエからもらった着物を鳥の翼に変化させ、空を飛んで5人を導きます。5人はしっかりと互いに手をつなぎあって、雲の地面を踏みしめ空の国を後にしました。
ピクルスは最後まで5人を見送りもせず、一生懸命働いていました。

花の国・前編

ロアとロイとロウは5人を空の国の入口まで送ってくれました。5人は雲の広場に出ると最初に来た時と同じように階段に乗り込みます。階段はすすっと動きました。やがて雲と霧に覆われて空の国はすぐに見えなくなりました。

「空の国は意外だったわね。人がたくさんいてにぎやかだったけれど、空しい人の国だったものね、ツルマエが運命の女神に会っていたころ、私達はロア、ロイ、ロウとお話していたの。あの3人の鐘様は空の国の他にも私達のような生きている人間が決して行くことのないいろいろな国があると言っていたわ」

「ええ、そうね。私達はもうすでに、水の国、緑の国、そして空の国をまわった。次は花の国か美の国のどちらかよ。どちらもきっと素敵なところに違いないわ」

5人が次の国への期待感を口にしてしゃべっていました、とミイクが突然叫びました。

「あれ、みんな。この階段下に下りて行ってないよ?」

事実階段は下におりるか、上に上がるかするものなのに、平行にまっすぐにすすんでいます。しかも速度がだんだん増していくようです。

「次よ、次の国へと向かっているのよ」

ルドラドがうれしそうに言いました。ツルマエが静かな口調で話しました。

「水の国ではマルキンが美しい顔を得て、緑の国ではルドラドが女王を救い、私は空の国で感謝と信頼の心を得た。次はミイクとメイミンの番よ。運命の女神さまからいただいたものがその国できっと何かの役に立つのよ。今度もきっとそうよ」

これを聞いてミイクとメイミンが顔を見合わせました。メイミン

はちょっとイライラしているようです。
「さあ？女神さまからのいただきものが役立つなんて決めるのは早いかもよ。私の怪力を封じ込めたこの衣装が何かに役立つとはとても思えないわね」
みんなはメイミンが女神さまからその服を着させられる前の姿を思い出してかわいそうになりました。動きやすそうな軍服で大きな刀や、盾、槍、弓矢をさっそうとして肩や腰にくくりつけて勇壮な姿だったからです。
何しろ今の彼女の姿ときたらぴっちりとした1枚皮の袋です。歩くたびにその服はぶかっこうにしわがより、動きにくそうです。怪力の彼女でなかったら、きっとすぐに疲れて1歩も歩けないでしょう。そのくらい動きにくそうな服でした。メイミンだからこそ、この服を着たまま歩いて旅ができるのです。普通の女の子でしたら歩くどころか息もできないでしょう。みんなはメイミンのために次の国でどうぞ良いことがおきるようにと祈りました。
一方、ミイクの方は欲はありません。欲とはああしたい、こうしたいという願いがかなえられそうな範囲のものです。ミイクには欲はなく、願望というものがありました。

（・・女の子になりたい・・）

ひそかに心の奥底でしまいこんできた切ない願いでした。ミイクは他の4人に混じっていても男の子だとはだれも区別できないでしょう。長い金髪の巻き毛、白い肌に青く輝く目を持ち、赤い唇、これ以上望めない美しい容姿をもっています。その美貌をより引き立てているのが運命の女神さまから与えられた花びらで作ったブラウスです。が、下半身の服装ときたら窮屈なきちきちの小さなズボンでしかも男の子のシンボルであるおちんちんの形が強調されるものでした。
ミイクは自分のしている格好を思うととても恥ずかしいのです。

このみっともないズボンを着たとき、４人の女の子達が自分のおちんちんを見てクスクスと笑ったのをはっきりと覚えています。
男の人と女の人の暮らしぶりや仕事がはっきりと区分けされている国の王子として生まれ男の子なのに、女の子のようだと怒られてばかりでいろいろとつらい目にあいました。このどうしようもない不条理としか思えない自分の性をあきらめています。
ミイクは内気で気弱で、ものわかりのよい子供になっていました。これはミイクの国では恩尚子らしいとされていましたので、かえってミイクの父の王様に嫌われてしまいました。そしてあげくのはてに殺されそうになりました・・・。
ミイクは過去の自分を思ってとりとめのない思い出にふけっていると、みんなが歓声をあげました。階段のまわりに綺麗な虹のトンネルが出現したのです。7色の虹の輪の中に入ると、だんだん奥に入るにつれて輪がせばまってきます。
輪がもっともっと小さくなってみんなの身体に近寄り7色の虹がふんわりと皆の身体から心の中へ通過しました。と、そこはもう・・・、
花の国でした！

花の国は素晴らしい花で埋め尽くされた世界でした。5人とも王家の生まれですからそれぞれ自慢の庭園を持っています。だけどその花の国の景色ときたら、どんなものにも勝る庭園でした。ありとあらゆる草木が美しく整然として植えられてそれは見事でした。
もしかしたらここが本当の天国かも・・・。
「あら、誰か空を飛んでこっちへ来る！あっ・・羽根を持ったベビー、まあ、天使だわ！すごい！」
5人はどよめきの声をあげました。
実際、白い白鳥のような羽根を背中にはやしたベビーは宗教画にでてくる天使そのものでした。小さい赤ちゃん天使はあどけない顔をしてにこにこと笑いながら5人のまわりを飛んでいます。5人が

わあわあ言いながら天使と遊んでいますと、白いお城が見えてきました。天使はそちらの方へと遊びながら誘導してくれていました。
お城がもう間近に見えてくると5人よりもやや年かさに見える男女が出迎えてくれました。この人たちには羽根はなく、昔の絵画のように裸に近い恰好をしていました。でもとても美しい男女でした。
ざっと50人くらいはいたでしょうか、そのうちの1人の若い男性が前にでて案内してくれました。
「やあ、鼻の国へようこそ。王様がお待ちしております。どうぞ城内に入ってゆっくりと見学してください」
その男性の名前はラザーだと名乗りました。
「私は王様のお付きでございます。城内に入る途中までの庭園を案内いたします」

お城の門をくぐるとかぐわしい香りをさせた満開の花でいっぱいでした。あちこちで花の世話をしている男女や天使が5人と目があうたびに親しげに笑いかけてくれます。5人はもう夢心地でした。白いお城の大きな扉までくると花の国の王様がじきじきに5人を出迎えてくださいました。
花の国の王様は大柄の男性でした。年頃は40歳くらいでしょうか、長い銀髪を背中までまっすぐにたらし、瞳は金色ですきとおるような白い肌をされていました。広い胸をあらわにし、薔薇の花びらで細かく編まれた深紅の肩かけをされていました。右手には金銀の細工がほどこされた白い小さな薔薇で飾られた杖をお持ちでした。王様は5人に歓迎の言葉を述べられました。
「みなさん、花の国へよくきてくださいました」
5にんはうっとりして美しい王様やお付きの男女、天使達に見とれています。
特にミイクは王様から目が離せませんでした。まるで恋をしてしまったかのようです。王様を一目見たときから、心臓のどきどきが止まりません。王様自身から挨拶のための握手をしてもらったとき

は、ミイクは身体がぶるっと震えてしまったくらいでした。
　それから改めて王様自らご自慢の庭園を案内してもらいました。見たこともない美しい花がたくさんあり丁寧に説明もしてもらいましたがミイクは花の名前なんかどうでもよかったのです。王様の一挙一動だけをうっとりとして見つめていました。
「いけない、ぼくは男の子なのに、男の王様をすきになってどうしようというのだ・・」
　心の中でそう思いながらも、好きという感情を抑えられませんでした。そのくせ王様と目があうとミイクはぱっと横を向いてしまい、目線がまっすぐにあわせられませんでした。自分の心が相手に悟られるのがすごく恥ずかしかったのです。
　だけど他の４人の王女たちはミイクの感情をすぐに見抜いてしまいました。城内に入って王様がお着替えにたたれたときを見計らって４人はミイクに言いました。
「あなたは男の子なのに、男の王様をうっとり見つめているなんて変よ」
　それを聞いたミイクは涙を浮かべてしょげてしまいました。おつきのラザーが慰めます。
「見つめるくらい、いいではないか。私だって男だけど、美しい王様は私の憧れです。きみは少しも変ではない、当たり前の感情だよ。ここにいる花の国全員が王様のファンだよ」
　ラザー達は王様を口々に讃えました。
「王様はお優しい、国で一番お花を愛する御方、王様は美しい。国で一番お美しい御方。どんなお花よりお美しい。若々しい。
　だが、ある日突然もっと若々しくなられるのだ。若返られるのだよ！その時が花の国の祝日だ。もう久しくお祭りしていないのでそろそろだとは思うけれど。あなたがたの滞在中にお祭りになったらいいのにな。だけど、その時がいつになるか、わからない」
　５人は不思議そうにラザーに聞きます。
「王様が若返ったらお祝いするの？なぜ若返られるの？」

「花の国の住民は永遠に年を取らないまま、生きていける。だけど、王様一人だけが年を取る。きっと国の繁栄のために日夜心を砕いておられるせいだろう」
王様は今でも美しいのに、若返られたら確かにもっと美しくなられるでしょう。そうして永遠の命を花のために生きていかれるのでしょう。
それから5人は大広間に案内されました。
大広間は王様のご自慢の花ばかりが集められていました。城内といってもまるで花園です。壁があるかないかの違いで庭園の様子とほぼ同じでした。ただ王座のまわりには、白い花々で埋められ中心には王様の背丈以上はある薔薇の茎が1本、白い大理石の床からじかに映えていました。
その薔薇の茎のてっぺんにはつぼみが一輪だけついていました。赤いつぼみです。もしこれが咲いたらどんなに華やかだろう、どんなによい香りがするだろう、と思わせるくらいの大きなつぼみです。
王様はつぼみにキスをし、なでながらおっしゃいます。
「この薔薇のつぼみは花の国の中心です。私が一番大事にしている薔薇のつぼみです」
ラザーはそっと教えてくれました。
「この薔薇は王様だけの薔薇です。王様が若返られるのはこの花が咲くとき。その日が花の国のお祭りになる」
5人は薔薇のつぼみを見ました。つぼみは堅そうでなかなか咲きそうにもありません。
「あとどの位で咲くのかしら、見てみたいわ」
王様は苦笑しながら返事をなさいます。
「いつ咲くのかは私にもわからない。咲く時期は私が決めるのではなく、この薔薇が決める。前に咲いたのはもう10年前だ。もう私も年を取ってきたし、そろそろ咲いても良いころ合いなのだが・・」
王様の口ぶりによるとこの薔薇のつぼみが花の国を左右している感じでした。もっと詳しい話を聞こうとするとラザーが小声で止め

ました。
「もう薔薇の話はいいでしょう。王様は花が咲かないので、このところいらいらしておいでなのさ」
それで5人はもう何も聞きませんでした。
やがて食事の用意ができました。王様がテーブルに着席されるとラザー達も席につきました。5人も賓客待遇で良い席を用意してくださいました。花の国の食事もめいめいのお皿に花束が乗っていて香りも楽しみながら食事ができるようになっていました。
食事をしながら王様はきさくな調子でご自分のお役目の話をされました。王様のお役目と言うのは、陽が沈みかけると、城下の4つの花の門を閉じることでした。これは誰にもできない王様だけの役目でした。花の国はいままでにどこにいった国よりも狭く小さな国です。ここを1歩でると何もないところに出てしまうのです。
「ここは花にとっては理想の国だ。枯れることも知らず、永遠に咲き誇れる。私は花を守るために生きている。ここにいるものも、花の世話をするために生きている。私は幸せ者だ。こんなに素晴らしい国で暮らせるのだ。あなたたちもこの国に来れて感謝しるがよい。普通の人間にはまず来れないところだから」
5人は素直に喜びました。王様は5人のそれぞれの国の様子を聞きたがりました。
「私は神でもない。花の国の番人だ。もとはと言えば、私もただの人間だった。人間の頃は、小さな国の王宮のそばで生まれ育ち、花を作って売って暮らしていたのだよ」
5人は王様が元は人間だったのを知って驚きました。そしてどうしてこの美しい花の国の王様になれたのか、聞こうとしました。王様は長い銀髪を撫ぜながら返事されます。
「気がつけば私はこうなっていた。私は神様に生かされている、花の世話人、使用人にすぎない。強いて言えば私が今あるのは、ある人のおかげでもある」
王様は王座にある薔薇のつぼみをご覧になりました。てっぺんに

ある堅いつぼみを見て小さなため息をつかれました。そうされると眉間には深いしわが刻まれ、庭園に案内してもらった時よりもずっと老けてみえます。

５人は遠慮してそれ以上にはふれませんでした。そして正直な王様に好感を持ち、花についての質問をしました。王様はどんな質問にも、丁寧にお答えになりました。

「城門のお堀に咲いていたピンクの羽のような透き通った花の名前は何ですか」という質問から「天使達にも名前はあるのですか」という質問まで丁寧に答えられまた反対に５人にそれぞれの国だけに咲いている花や綺麗な花について質問されました。

５人の王女たちも心を和ませる花は大好きですから、自分の国の花の自慢をしたり珍しい花についての情報を交換したりして話題はつきません。

王様はミイクの方をじっとご覧になりました。そして花びらでできたブラウスがたいそうよく似合っているとほめました。ミイクはうれしくて天に昇る心地です。

「これは運命の女神さまにいただいたものです。でも下の方はただのズボンでそれだけが残念です」

王様は笑って「じゃあ、上のブラウスにあわせたドレスを作ってあげようか」と申し出られました。ミイクはうれしかったのですが、運命の女神さまがこのブラウスをせっかくくださったものなので、と丁寧に断りました。するとメイミンがフォークを置いてミイクに言いました。

「ドレスを作ってもらったらいいのに、そのズボンが恥ずかしくてたまらないくせに。そしてあんたは女の子になりたくてたまらないくせに」

ミイクは真っ赤になりました。王様はミイクをまっすぐに見つめられます。

「君は女の子になりたいのですか」

ミイクは少しためらってから、はい、と小声で返事しました。王

様は重ねて真面目な様子で丁寧に聞かれました。
「・・・どうして女の子になりたいのかな？」
ミイクにとって初めてされる質問でした。他の４人の王女たちも興味深げにミイクに向き直ります。ミイクは彼女達の様子を見て友達とはいっても、やはりぼくを男の子としてみていたのだなあ、と思いました。自分について話すのは初めてだけど、ちょうどいい機会だと思いました。それでこれまでの自分についてよどみなく話し始めました。

花の国・中編

ミイクの育った国では、男性が女性よりも偉い国でした。それがミイクにとって第一の悲劇で、第二の悲劇は自分が王家の生まれであったことと、第3は男の子に生まれてしまったことでした。

国民のよいお手本になるように強く賢く、たくましくならねばなりませんでした。男の子が花を愛でたり、料理を作ったりお裁縫をしたり洗濯をするのはタブーでした。それは女のようだと下げずまれることになります。だからミイクはいつも嫌われていじめられました。

ミイクは男の子に生まれたからってどうして強くあらねばならないのか、どう考えてもわかりませんでした。

「わからないんだ。どうして男の子が女の子のようにしてはいけないのか、どうしてドレスを着てはいけないのかが」

他の4人の王女の国もルドラドを除いては男女の役割がはっきりしていて、女性が男性に仕える方だったのでミイクの主張はとても新鮮にまた奇妙に聞こえます。

特にメイミンははっきりと言いました。

「なぜ女の子になんかなりたがるの？私は男の子になりたくて仕方がないくらいに、うらやんでいるのに。だって身体が大きいし、力もどう考えても男の子の方が強くなるのよ？

女の子に生まれてしまうと大人になると子供を産んで育てないといけないわ。その間、戦場にもいけない。だから私は子供なんかいらないわ。あんたの話を聞いていると、あんたの国で男が女の真似をすると嫌われるなら、よその国へ行って女として暮らせば問題は解決するじゃないの。

でも自分の国の昔からのしきたりに従うのは王家に生まれた人間として、大切な役目のひとつではないかしら。それができないならさっさと自分の国を出ることね」

メイミンの意見はまったくもって正論でした。ミイクは自分はただのわがままだけかもしれないと思いました。それでもやっぱりミイクは女の子に生まれたかったのです。子供ができるならば自分で産み、育てたいのです。ミイクはつまり自分の国の男女の区分の激しい社会の中で女性の方の役割をしたいのでした。

花の国の王様は言いました。

「あなたがたが今、旅をしている場所は普通の人間がいけない国です。可能を不可能に、反対に不可能を可能にする旅でもあろう。ミイク、きみは希望を捨ててはいけないよ。どんな希望でもね」

ミイクは黙って聞いていました。もう夜もふけてきたので5人の王女たちは寝室に案内されました。寝室もまた夜間だけ咲く花で埋もれていて、さやわかな花の香りで満ち5人は大喜びでした。

「花の国は今まで行った国の中で一番、居心地のよいところではないかしら」

5人はベッドの中の花束を抱きながらぐっすりと眠りました。いいえ、5人のうち一人だけは目覚めています。それはミイクです。眠れないのです。ミイクは思いました。

ぼくはいま興奮しているのだ、だから眠れない。男の子と女の子の役割についての会話。それと花の国の王様の美しさに。

寝付けないので他の4人を起こさないようにそっと起き上がり、重いカーテンを静かに持ち上げて外を見ますとまだ夜中です。どうしても眠れず庭園を散歩しようと寝室から出ました。広い廊下を所在なさげに歩いていますと、最初に案内された大広間に出ました。

中心には王座よりも目立つ、例の大きな薔薇がすっくと生えています。葉もなくつぼみだけがある薔薇の茎はとても貧弱に見えます。どうしてこんなものが花の国の中心にあるのでしょう。

ミイクはおや？と足を止めました。薔薇が動いたように見えたからです。もっとそばでよく見ようと近づくとミイクは何かにつまずいてしまいました。それは花の国の王様でした。

王様は薄いシーツ1枚で身をくるみ、薔薇のすぐ下の床に寝てお

られたのです。
「今、私をさわったのは誰だ？」
王様は起きあがられました。ミイクは驚いて許しを請いました。
「私はミイクです。眠れなくて外へ出て散歩しようと・・・すみません。花の国の王様がこの広間で寝ていられたなんて知らなかったのです。起こしてしまって本当にすみません」
王様はミイクをご覧になり笑顔で言われました。
「そうか、でも私が床に直に寝ても悪くはあるまい。私は王様というよりは花の国の管理人でいるつもりだ。いつでも花の様子が見れるように夜はここで寝ているのだよ。ここが花の国の中心になるからね」
ミイクはこの言葉を聞いて飾り気のない王様がますます好きになりました。普通の人間が花の国の王様になれたのも、羽の生えた天使やラザー達よりも上の身分につけたのもこの花好きの謙虚な性格ゆえなのでしょう。永遠に年をとらないラザー達の尊敬をうけるのも当然でした。
月明かりで見る王様の横顔を見てミイクは美しい王様だとしみじみ思いました。自分が女の子に生まれていたら、この王様と結婚できるのに、そう思いついて顔を赤らめました。
「さあ、夜の庭園を案内でもしてさしあげよう。夜しか咲かない珍しい花がある。見せてあげよう」
それから王様は独り言のようにつぶやかれました。
「どうせ、今夜も薔薇が咲かないだろうし、」
ミイクは聞きました。
「あの薔薇のことですか？あの薔薇は夜になると動くのですね。とてもめずらしい薔薇ですね」
「なんだって、薔薇が動いているって？」
王様は急に顔色を変えられて薔薇の方へ向きなおりました。
薔薇はやはり動いていました。王様はそれを確認して大喜びなさ

いました。
「ああ、もしかしたら、今夜のうちに咲いてくれるかもしれない。ミイク、君にだけこの国の真実を見せてあげよう。花が咲いて、真実を見たら、君もお願いしてみればよい・・・、女の子になりたいのだろう？」
ミイクは王様の言葉に衝撃をうけました。女の子になりたいとは思いますが、そんなことができるのでしょうか。ミイクはいざ可能になると、本当に今夜女の子になってよいものだろうかと考え込んでしまいました。
王様はそんなミイクに気付かずに薔薇だけを見つめておられます。必死の形相で薔薇に話しかけていらっしゃるのでした。
「お願いだから。今夜こそ咲いておくれ。もう君が最後に咲いてから２０年も時間がたってしまった！
見てくれ。私の顔を。こんなにシワが出てきた。私は年をとりたくないのだ。いつまでも若々しい王様として花の国に君臨していたいのだ」
そんな言葉を繰り返しておられました。

薔薇の茎は相変わらず右に左にゆらゆらと揺れています。
王様は薔薇の茎の下でひざまずいて熱心に祈られています。ミイクも息をつめて薔薇を見ていました。
いきなり薔薇の葉がフェシングの剣先のように一度にばばっと出てきました。茎の先からぽーんというかわいらしい音がしてつぼみが開きました。見る間に大輪の薔薇の花が広がってきます。花弁が数え切れないほどの大きな花でした。
色は深紅、中心に近づくにつれて金色になってきます。薔薇の花は徐々に大きくなり、茎は伸び葉は際限なく増えていき大広間を覆っていきます。この信じられない現象にミイクは唖然として見ていました。
ここまでくると王様は安心したようにミイクに言いました。

「私の救い主、この花の真の支配者に会えます。私は長い間待ち望んでいた御方がやっと今夜、会っていただけるのです」
ミイクはこの薔薇が人間になってしゃべるだすのかと思いました、が違いました。薔薇の花はこの会話の間もずんずん大きくなり、茎と葉で大広間の天井や壁は覆い尽くされもはや窓から月光すらさしこんできません。
その代わり花の中心から光がさしこんできました。薔薇の花弁は王様の背丈よりも大きくなり、月光の変わりに中心から輝いてくる金の光で満たされていきました。
薔薇の花弁からでるその光は赤や金に輝きまぶしいくらいです。それに葉の緑の光も加わり、この世とも思えぬ不思議な色彩の世界になりました。
やがて薔薇の花弁の動きがゆるやかになったかと思うと、今度はかな弁の中心がグーンと大きく開いてきました。
とうとう人ひとりが入れるぐらいに口が開くと、王様はミイクの手を取られました。そして薔薇の口めがけて歩きだされました。
「行こう、真の支配者がお待ちだ」
ミイクは驚きつつも、素直に王様に手を取られ、後をついていきました。

花の国・後編

薔薇の花弁の中は、金色の光が交差する金色の廊下でした。大理石のようにつるつるしていて、おまけに濡れています。ミイクは何度も滑りそうになりました。やがて下へ向かい階段があらわれ下りていきます。下に行くにつれ、まわりの金色は薄れ、黄色から茶色になり、すぐに黒に近い焦げ茶色になりました。

廊下はごつごつした木の幹のようであり、階段は階段でなく、木の根っこのようなくねくねとうねる道なき道となっていきました。ここがあの薔薇の花弁の中、だなんて信じられません。王様は慣れたようにまた待ち焦がれていたのもあっていそいそと速足で歩かれます。やがて足を止められました。

「さあ、やっとついたぞ！」

そこは行き止まりでした。

小さな広場になっていたのです。暗くてよくわかりませんが天井から水が滴っているようです。普通ならきっと怖いと思うところです。だけどかろうじて見える王様の笑顔がミイクに安心感を与えます。王様はミイクにささやきました。そのささやき声は広場に大きくこだまします。

「ミイク、ここはちょうどあの王宮の大広間の真下になる。ここが花の国の中心だ。花の国に根付いている花達はこの「根の国」から栄養分をもらっているのだ。太陽の光と水とここからくる栄養で、花の国の花達は色あせることなく、永遠に美しく咲き続けるのだ」

王様は広場のしめった床にうやうやしく膝をつけて、かがみこんで感謝のキスをします。

「さあ、君もしてごらん」

ミイクも同じように床にキスをしました。すると今までに味わったことのない不思議な甘い味がしました。土に味があるなんて。王様はびっくりしているミイクに笑いかけられました。

「さあ、真の支配者たる御方がお見えだ。心してお迎えしよう」
すると行き止まりになっているはずの壁から、小柄な1人の女性が出てきました。暗がりにいらっしゃるのでどんな人かよく見えません。着ている服で女性であるのがわかりました。胸元に小さな薔薇のつぼみを飾っていらっしゃいます。上品な生花のコサージュです。ミイクは花の国の真の支配者は一体どんなに美しい人かと目をこらしました。
一方王様はその人を待ちかねていたように手を広げました。その女性の手をとって、うやうやしくキスをされました。
「薔薇の花を咲かせてくださってありがとうございます。本当にありがとうございます！あなたは今回は２０年間も私に会ってくださろうとしませんでした。見てください、２０年の間に私はこんなに年をとってしまいました。このしわをよくご覧くださいませ。永遠の命を生きる天使や花の国の住民や花たちの王様でありながら、ただ一人、年をとっていく気持ちをどうぞお察しください。
でも、ああ、会えてよかった。私はあなたを心から愛し、尊敬しているのですよ」
小柄な女性は王様に近づき、手をとって立ちあがらせました。そしてつま先立ちで王様の顔を両手で包みこんでキスを返しました。
すると明かりが乏しい中でも王様の顔にはりとつやが戻り、シワがなくなり、より若々しく美しくなられたのがわかりました。
ミイクは驚きの中でラザー達が言っていた言葉を思い出しました。
「王様が若返られるとは、こういう意味だったのか、」
やっとわかりました。
「ある日突然王様は若がえられる。ちょうどこの薔薇のつぼみが咲くころに。そしたらこの花の国はお祭りになる・・・・、」
この花の国でただ一人、年をとる身体をもつ王様・・。
この王様を若返らせ、永遠に生かせる力を持つこの人が、この花の国の真の支配者なのだ。この女の人が・・・。

王様への長いキスが終わるとその女性はミイクをまっすぐにご覧になりました。ミイクも薄暗い中、女性を見返しました。

花の国の真の女王様。でもいつもはこの「根の国」にいらっしゃる。この女性はこの暗い「根の国」によく似た容貌でした。身体は全体に丸太のように太く、ごつごつとし、胸も大きく目と口も大きく、紙は四方八方に広がっています。はっきりいって全然美しくありませんでした。とうてい「花の国の真の女王様」には見えません。

ただ目の色だけは若草のような淡い黄緑色でした。そして飾り気のない無地の茶色のドレスに上品なコサージュをつけておいでです。女王様はミイクにきさくに親しげに話しかけられました。

「花の国へようこそ。この国は気に入りましたか。彼はあなたによくしてくださいましたか。私は運命の女神さまが、5人の王女たちに花の国を見せてあげたいからよろしく頼むと伝言を受けたのです。それで私はあなた方に会えるのを楽しみにしていました。でも王様はあなた1人しか連れてきてくれなかったのね。せっかく薔薇の花を咲かせたのに、この人ったらあいかわらず、他人に私を見せたくないのでしょう。そして自分が若返るところを見られたくないのでしょう」

王様はあわてました。

「女王、それは違います」

根の国の女王はただ笑っておられるだけでした。そして王様にまた近づいて今度は頬にキスしました。王様も女王様の腰を抱いてぐっとキスを返されます。2人はキスを何度も何度もしあいました。王様と女王様はとても仲がよさそうです。花の国と根の国を分けているように考えるのはどうやら間違いのようです。彼らのおどけた愛の仕草にミイクも笑いだしました。

「この国にお招きくださってありがとうございます。私はこの国が大好きになりました」

女王は親しげにミイクの方によってこられました。

「まあなんと美しい少年だこと！おや、でも君は変な子だね。男の

子に生まれたことを残念におもっているね。隠しても無駄だよ、私は人の心が読めるからね」

ミイクは自分の心を読まれてびっくりしました。だけど女王様の態度に少しも嫌みも批判も感じられません。かえってほっとしました。

王様は横から口添えしました。

「この子は女の子になりたがっているのです。あなた様はなんでもおできになるでしょう。願いをかなえてやったらきっと喜びますよ」

この根の国の女王はどうやら神に通じる力をお持ちのようです。ミイクは緊張しました。そして今男の子から女の子に替えられると聞いたとき、うれしい気持ちと困った気持ちがごっちゃになりました。あれほど切望していたというのに、いざというと迷ってしまったのです。女王はミイクの顔を見てお笑いになるだけでした。

「迷っているならばやめたほうがいいでしょう。そのままでも十分人間として魅力的ですよ」

ミイクはうなづきながらも、この女王がどうして地上に出ずこの地下の根の国にいらっしゃるのだろうと考えていました。女王はミイクの心を読み取ったようにおっしゃいました。

「せっかくここまで来てくださったので私の昔話でもてなしましょうか。ここは時間の流れがゆっくりとしています。さあ、落ち着いて楽にしてください。

のどが渇けば、天井から滴る「命の水」を。

おなかがすけばこの土の床の「命の元」を食べるとよいから」

女王と王様とミイクは輪になって座りました。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」

「花の国」の下の「根の国」の女王の話

昔々の話です。私達はごく普通の平凡な国の平凡な住民でした。夫婦だったのですよ！親同士が決めた結婚でしたが、お互い花が好きで趣味があい、仲良く暮らしていました。

私達の仕事はお城にすんでいる姫君のために花を摘んで差し上げることでした。それから花を売って暮らしていました。忙しい毎日でしたが姫君が花を愛でてくださるというので、充実した気分ではりきっていました。

ところが姫君は私の夫を好きになってしまわれたのです。たまたま夫が花をお城に届けに行った日に、姫君が直々に部屋から出られて受け取られ夫と話をしたのがきっかけでした。花のように愛らしい姫君と美しい私の夫は、お互いに忘れえない印象を残しあったようです。この日以来、お城へ花を届けるのは夫の仕事になりました。そして朝から晩までお城の中にいる姫君のそばに侍るようになったのです。花を育てて売るのは私一人の仕事になりました。

ある日姫君の家来がやってきて、夫に姫君専属の召使になるように命令が下りました。直々のご命令と言うことでいそいそとうれしそうに私達の家を出ていく夫を私は悲しく見送りました。

夫をはさんで姫君をライバル視するのには、あまりにも私は醜すぎました。親が決めた結婚でなければ夫は私と一緒になってはくれなかったでしょう。私は夫の気持ちがよくわかっていたのです。でもいつかきっと、夫は私の元に帰ってきてくれるでしょう。私は夫を愛しています。姫君に負けないくらい愛しているのです！

私は毎日さみしい思いをしながら、夫の帰りを待っていました。するとまた家来がやってきて今度は私を逮捕するというのです。

私が育てた花を、夫がお城で飾ろうとすると途端に花が黒く枯れてしまうというのです。他の人が飾っても花は枯れません。これはきっと私が花に魔法をかけたのだろうと夫が言ったそうです。姫君と夫の仲を嫉妬して花を枯れさせたと・・・・。

もちろん、私はただの人間。花に魔法をかけようと考えたこともありません。それなのに、私は魔法使いとして、縄で両手をくくら

れ牢獄へ連れて行かれました。そして大事な花畑を焼きつくせとの命令で火がつけられました。

しおしおと花畑を去る私の背後で、花が燃やされて鳴いています。鳥もみつばちもカエルもみんな鳴きました。他の人間にはこの泣き声は聞こえないようです。でも私には花や鳥達の感情がわかったのです。もちろん私も悲しくて鳴きました。

お城の地下にある牢獄に入る前、私は、姫君と夫に魔法使いとののしられました。姫君と夫は堅く手を握り合って私を睨んでいます。私は悲しくて情けなくて胸がはりさけそうでした。私は暗い地下の牢獄の中で毎日泣いて過ごしました。

そこはただ城の土に穴をあけただけの粗末なものでしたので、水がしみこみぽたぽたと落ちてきます。地下水は流れいろんな虫がはいだしてきます。やがて私はあることに気付きました。地表からしたたる水が何かを運んでいます。それは花の種でした。虫達も地上から何かを運んでいます。それは花の肥料でした。

私の生命、私の大切な花畑が自らの意思をもって、私を追いかけてきてくれたのです！

私は花を再び地下で育て始めました。太陽の光がなくとも、私が神へ平和の祈りをささげますと、自分の身体から光が出ました。花はよく育ち、見事な花畑になりました。どこからか鳥もやってきて私の心をなごませる歌を歌ってくれます。牢獄の中の花畑は私を慰めてくれました。地上にいたころよりもずっと心穏やかに暮らせました。

そうして何年がたったのでしょうか・・・。

あるとき花畑にいつものように花の世話をしていると、1本のひもがするするとおりてきました。私は地上から姫君のお許しが出たのかと思ってひもを伝って上がりました。

久しぶりの本物の太陽の光はどんなにかうれしかったことか。ひもを握って私を迎えてくれたのは1人の老人でした。

「姫君はどちらですか。私は許されたのですね？家に帰ってもいい

のですね？」
　老人は黙ったまま、私を見つめます。よく見るとその老人は私の夫でした！
「まあ、あなた。どうしたの、その顔。あんなに美しかったあなたが年老いてしわだらけになってしまって・・・」
　老人いえ、私の夫は口を開きました。
「君と別れてから３０年がたった。私が年をとるのは当然だ。だが君はどうだ。ちっとも年をとっていない！まったく変わっていない！食べ物もない、日もささない地下牢にいていながら君はよく生きていられたもんだ。
　聞いてくれ、私の妻よ。
　君が地下の牢獄へ連れて行かれた後、私は姫君から城中で花園を造るように命じられたのだ。だがどうしたことか、私が育てると花が咲いてくれないのだ。私は姫君に軽蔑され疎まれ、追放されて一人ぼっちになってしまった。きっと罰があたったのだろう。私は君と結婚して花畑を2人で作るのが私の定めだったのだ。それなのに、私は逆らったのだから。
　やがて戦争が起き、お城は壊され、姫君は死に、私は命からがら逃げ出した。国は滅んでしまった。
　私はあちこちを放浪した。この地を３０年ぶりに通りかかると牢獄のあった場所だけ美しい花が咲いている。もしやと思って地下を覗くと君がいた。驚いたよ。本当に」
　私は言いました。
「助けてくださってありがとう。私はそろそろ地上に出たいと思っていました。私を思い出してくださって私を助けてくださって、私に話しかけてくださって、本当に感謝しますよ」
　夫は私の前にひざまづきました。
「何を言う。私は君に感謝される資格もない男だ。それなのに、君という人は・・・。ああ、願わくは、また君と一緒になって花を育ててみたい。私の手の中で花が咲くようにもう一度一緒になってく

れないか。
君を裏切ってからは、私は花を育てる能力がなくなるという罰をうけた。ああ、どうか。もう一度やり直させてくれ」
夫は私の手をとってうやうやしくキスをしました。
私は夫が私を思い出してくれただけで、そしてもう一度花を一緒に育てようと申し出てくれただけでうれしく思いました。
「さあ、あなた立ってください。お城はなくなってしまったけれど、花の種や木の根はあちこちにあります。育てましょう！国中、お花でいっぱいにしましょうよ！」
私の夫は私を抱きしめて、尊敬をこめて言ってくれました。
「君は花の女神だ」

私は自分の姿が３０年前とちっとも変らないのに気付きました。どうしてかはわかりません。反対に美しかった夫の身体は年老いて背骨が曲がり、歯が抜け、シワだらけになっています。私は同情しました。
私は夫にキスをしました。私は夫をまだ深く愛しているのです。夫は花を育てるのが大好きで私もまたそうなのです。
夫が涙を流しました。涙が地に伝わると、それは大きな薔薇の種になりました。本当は薔薇に種なんかありません。でも夫の涙が薔薇の形をした種になったのです。そして同時に夫は若返りました。元の美しい夫になりました。私はその薔薇の種を「愛情」と名付け大切に持っていました。
私達は新婚のときに戻ったように花畑を作りました。夫はやさしかったのです。やがて私達の花畑に花が満ちるようになると、国が再生してまた町に活気が出ました。
夫も花を売るために毎日町へ出ました。私の育てた花は美しく、私が愛した夫も美しい。私の花はよく売れ、町中の人たちにかわいがられました。
そのうちに夫は、またもや家に帰ってこなくなりました。今度は

大商人の娘に愛されるようになったのです。
私は夫の不実にあい悲しい思いをしました。すると夫は再び年をとりはじめ、夫がさわると花が枯れてしまうという現象が起こりました。これは私が望んでいたことではないのです。
夫は私を憎み、私を魔女だといって人に触れまわるようになりました。
ついに夫は大商人の娘からもらったナイフで私の胸をつきました。私はその時の傷がもとで死んでしまったのです。私は夫に殺されてしまいました。
私が目をさますと、神の御前にいました。神の隣に運命の女神さまがいました。私は神に今までの生を感謝し、花に囲まれた人生に感謝しました。
運命の女神さまは自分のいままでの運命についてどう思うか問われました。私は悲しい思いは何度かしたものの、花が私を慰めてくれたので満足していると答えました。
神は私に「下を覗いて、夫を見てごらん」とおっしゃいました。私がそのとおりにいたしますと、夫は再び年老いて娘に捨てられ、飢えと孤独で死にかけているところでした。夫は私を殺したことを後悔して泣いていました。私はこの光景を見るなり、胸が一杯になり、神に夫を許してやってほしい、元通りの美しい夫に会いたい、そして花の世話をしたい、させてあげたいとお願いしました。
神はそれがお前の望みか、と問われました。私は2人だけで花の国を作ればもう言うことはないと申し上げました。
すると神は申されました。
「お前に花の国を与えよう。お前はその国の女王になるがよい」
私は怖れ多かったのですがこう返事いたしました。
「私はとても人の上にたてる身分も器量もありません。夫を花の国の王にしてください」
私の夫は花を育てる以外は取り柄のない私と結婚してくれました。私を思い出して地下牢から私を救いだしてくれました。私のために

涙を流してくれたこともあります。ああ、その涙は薔薇の種になり私の手元に今なお輝いています。これは「愛情」というどんな宝石にも代えがたい私の宝物なのです」

運命の女神さまは黙って私に手を差し出してくださいました。女神さまの手を握った瞬間、私は「神に選ばれた人」になったのです。

神は私に望み通りの裁きをしてくださいました。

「花の国」の王には私の夫がなり、私は「根の国」の女王になったのです。運命の女神さまは私に、花の国の中心に夫の涙からできた「愛情」という薔薇の種を植えるように申しつけられました。

夫は再び若返り、青年の王になりました。でも彼は神に選ばれた人ではなかったのでそのまま年をとっていくのです。

神は厳しい声で夫におっしゃいました。

「お前は年をとる。花の国の住民でただ一人年をとっていくのだ。ここに植えた薔薇を毎日見なさい。そして地下にいるあなたの妻を思いなさい。花と花の国の住民を思いやりなさい。

薔薇が育って花が咲いたら、お前は地下の妻に会って許しを請うがよい。そうしてそのたびに若返る。この先妻をなおざりにするようなことがあったら、運命の女神がやってきて妻が何をとりなそうと、地獄の底の底、永遠の業火に焼かれるようにしてやるからそう思いなさい。お前はすでに妻を2度裏切った。それなのに花の国の王になれる幸運をいついつまでも感謝しなさい」

私の夫は花の国の王となり、住民に慕われ、私は根の国の女王となり、花の国の命の水をつかさどり、また王の命をつかさどるようになりました。

地上の様子は私が上に見上げるだけでわかります。王に会いたくなれば薔薇の花を咲かせるだけでこちらまで来ていただけます」

「根の国」の女王様の話は終わりました。ミイクは女王様の控え目で謙虚な性格に感動しました。一方王様はじっとして動かずうなだれています。王はミイクの方を見ずに話しかけます。

「花の国の王は実はただの不実な人間だったのさ。木には私を軽蔑するだろうね」
女王様は王様に寄り添われました。そして愛しそうにキスをなさいました。王様はキスを返しません。女王様にさわられるままです。
ミイクは女王ん差に一つだけ質問しました。
「なぜ、花の国で一緒に暮さないのですか」
女王様は即座に答えられました。
「ながく一緒にいるとこの人は私を疎んじられるからです」
王様は違う、と言いたげでしたが女王様はさえぎられます。
「私は神から与えられた力で人の心が読めますし、先の未来が見えます。見えてしまうのです」
王様は女王様を恐れている様子でした。ミイクは王様も女王様もかわいそうになりました。女王様はさみしそうに微笑まれます。
「あなたはいい子ですね。やさしい子。神から与えられた運命に感謝しなさい。もっとやさしい気分になれるから」
女王様はミイクに顔を近づけてキスをされました。すると意識が遠のき、眠ってしまいました。

目を覚ますとそこは元の大広間でした。薔薇のつぼみは堅く閉じられています。もう葉も花も影も形もありません。まったく元の様子に戻っています。その根元には王様が寝ておられました。いつのまにか根の国から元の場所に戻ってきたのです。
王様が起きられました。若く美しくなられています。が、表情は暗くうつむいておられます。
「ミイク、君には私の秘密を知られてしまった。私はつまらないただの人間だ。妻・・根の国の女王には愛想をつかされている。しかし私は妻が愛せない。でも私の居場所はここしかないのだ。どうか昨夜君が聞いた私達の昔話は忘れてくれたまえ。この秘密は花の国にいるものは全く知らない。どうか黙っていてくれ。こんなみっともない話はないからね。私はいつまでも花の国の王として尊敬され

君臨していきたい。花の世話は元々大好きだしこれだけは根の国の女王の意向には添えるがね」
「ではここの人たちはみんな地下にもう一人女王様がいらっしゃるのはご存じないのですね」
「だから黙っていてほしいのだ。私の昔話を知ればラザー達は私を嫌うだろう。このままでずっとうまくやってきたのに。王の尊厳が損なわれば私の居場所がなくなるではないか」
王様はずるそうな目つきをしました。ミイクは根の国の女王様の穏やかでやさしい眼を思い出しました。王様は不機嫌そうにつぶやかれました。
「君が女の子になりたいというので連れて行ってやったのに。結局やめたから私は君にこうして頼みごとをしないといけない」
やがてラザー達側近が大広間に朝の挨拶にやってきました。王様の顔を見るなり、喜びの声をあげました。
「ああ、王よ。薔薇の花が奇跡を起こしたのですね。再び若返られています！何と言うめでたいことでしょう。心よりお祝い申し上げます」
王様はにこやかにほほ笑みうなづかれました。そして祝宴が始まりました。宴会はそれはもう華やかなもので花びらと美しい音楽が流れ夢心地です。
王様はミイクの方に顔を向けませんでした。ミイクもまた王様に見とれることもなく、話しかけることもしませんでした。
ミイクは悲しかったのです。この王様の心次第で根の国の女王様、神に通じる力を持つ女王様と一緒に仲良く暮らせるはずなのに。
王様は地上で君臨し、女王様は人の上に立てないと思いこまれて地下にこもられている。夫婦であるはずなのに、ミイクは彼らの心情が理解できなかったのです」
マルキン、ルドラド、ツルマエ、メイミンはミイクがふさぎこんでいるのに気付いていました。マルキンはミイクに聞きました。

「気分でも悪いの？」
ツルマエも言いました。
「そういえば、あなた夜中にひとり部屋から出たでしょう。だって今朝は私が一番早く起きたのに、あなたはもういなかったもの」
メイミンも言いました。
「何かあったのね？言ってごらんよ」
ルドラドはあっけらかんとして聞きました。
「もしかしたら王様と一緒だったのではなくて？」
ミイクは初めてうなづきました。
「まあ、すごいわ。それではあなたはあの王様が若返られたところを見たのね。あの薔薇は咲くとどんな感じになったの？どんな大きさの花になったの？教えてちょうだい！」
４人は熱心にミイクの話を聞きたがりましたがミイクは首をふるだけでした。
「約束したんだ。王様に絶対にしゃべるなと言われたし、今は言えないよ」
気まずい沈黙の中、王様が近づいてこられました。ミイクをのぞいてみんなが王様にお祝いの言葉を述べました。王様は「ありがとう」と返事をされます。
そしてミイクの方をちらと見られました。ミイクも「おめでとうございます」と言いました。すっかり若返られて綺麗になられた王様はぎこちなく微笑まれてミイクの肩に手をかけられました。
するとミイクの花びらで作られた花のブラウスが枯れてきました。王様はあっと言ってすぐに手をひっこめましたが、このブラウスはすぐに枯れ落ちてミイクは裸になってしまいました。王様は信じられないという表情でそばにあった花を触られました。その花も見る間にしおれ、枯れてしまいました。
歌い踊っていたラザー達も驚いて棒立ちになっています。もう宴会どころではありません。音楽もやんでしまいました。王様は叫びました。

「ああ、何たることだ。花の国の王たる私が、花を枯らせてしまうなんて、お前達、私に近寄ってはいけないよ。私は再び呪われてしまったのだから！」
　王様の赤い花びらで作ったケープもみんな枯れてしまっています。王様は裸です。うずくまり寒そうに震えておられます。そのそばにいつのまにか運命の女神さまが立っておられました。
「今、花を枯らせたのは私だよ。その力はお前にもあるのだ。お前の妻の愛情を壊していく力があるから、花も枯れる。お前の妻は本当の花の国の女王だから、その女王の愛情を壊すごとに花は枯れていく。わかるね？」
　王様は言いました。
「私は私の妻を心から尊敬しています。そして怖れてもいるのです。私は彼女の愛情を壊すようなことはしていないでしょう？でも本当のことをいえば彼女の愛情がうっとうしいのです。重たいのです。有り難いけれどつらいのです。これは愛ではありません。私は愛とはもっと喜びあうものだと思います。でもああ、花を枯らせないでください。花を愛する心だけは・・・、私の妻、根の国の女王にすら負けないつもりでいますのに！」
　王様は泣きだしました。運命の女神さまはああ、とため息をつかれました。
「こういう不思議な夫婦っているのだね。本当に人間が作り出す運命ってときには私ですら、予想もつかない結果になってしまます。さあ、力を戻してあげよう。花を蘇らせなさい。あんたたち夫婦はこのままでいいのだろう」
　運命の女神さまはミイクの方を見ました。
「女の子にしてもらわなかったね」
　そういいながらミイクに自分が来ていたケープを着せてやります。ミイクは小さな声で女神さまにお礼を申し上げます。女神さまは言いました。
「じゃあ、この国にはもう用はないね。次の国へ行きなさい」

そこで5人は花の国の王様とラザー達住民と運命の女神さまに見送られて出発しました。花の門を出て荒れ地を歩くすがらにミイクは4人につぶやきました。

「・・・、私は花の国では何も得られなかった。いやそうでもないかな。自分は女の子になりたいと思っていたけれど今はもうそうでもないんだ。そう、もうなりたくない。このまま、男の子のままでいくよ。でも、ありのままで、いく。それがわかってよかった、」

ミイクは重ねてぽつんと言いました。

「そう、最初からありのままのぼくでよかったんだ。ドレスが大好きでよく似合う男の子でよかったんだ。最初から！」

5人は無言のままで、道なき道を歩いて行きました。

美の国・前編

空の色がだんだんとぼやけてきます。あたりは灰色になり次第に暗く黒くなってきました。

「なんだか地面も沈んでいくような気がするわ」

ルドラドがそういうとみんなうなづきました。特にメイミンは落ち着かない気分でいました。身動きのできない衣服でずっと暑苦しいのです。それなのにそっきから風がとおってスースーします。なぜかはわかりません。メイミンのまっすぐな長い髪は風になびいてなんかいません。でも何か視えないモノで髪を引っ張られそうな気がします。それで何度も後ろかを振り返らずにはいられないのです。

やがてあたりは真っ暗闇となりました。5人は不安げに手を取り合って前を進んでいきました。ルドラドは夜目がきくので先頭にたって歩いてくれます。そうしていくとほどなく地平線の向こうにぼんやりとした光が見えてきました。

「次へ行くのは美の国、のはずよ。一番楽しみにしていた国なのになあ」

ミイクがそういうとのこりの4人も同じ意見でした。

先へ行くほど地面がのめりこんでいくようです。下へおりていく感じです。それでもぼんやりとした光は段々と近くなってきました。あたりを見てもほの暗く、地面はかたく冷たく、ところどころにはごみのようなものが積まれています。

「汚いところねえ！このゴミはだれが捨てたのだろう、誰もいないのにねえ！」

ツルマエがそういうと一番手前のゴミがぴくりと動きました。5人はぎょっとして立ち止りました。ルドラドとメイミンがゴミの方へ行きました。足で蹴飛ばしてみます。やっぱりゴミのようです。ほんの少しだけかってに動いたように見えました。2人はおそるおそるさわってみました。

「少し、かたいような、少し、やわらかいような、」
「あら、ここ、はがれるわよ。少しこすってみましょう」
２人は強くこすってみました。するとゴミが光ってくるのです。それでもっと強くこすり続けました。するとダイヤモンドみたいな輝きが出てきました。
「まあ、なんてきれいな輝きだこと！」
遠巻きに見ていた他の３人も駆け寄り、それをこすりました。こすると手に黒い汚れがつきますが、その汚れは手の中でぼろぼろと消えていきます。不思議な現象でした。宝石のような輝きが増すにつれて張り切ってこすり続けました。すると形があらわれてきました。
それは・・、ダイヤモンドでできたスワン（白鳥）でした。きらきらと輝きしかも息づいています。
「ああ、このスワン、生きているわ！なんという美しさでしょう」
５人はため息をつくとスワンは羽根を広げて大きく羽ばたきしました。虹色の重なりがあたりを明るくし、眼を細めてみてもなお、その輝きはまぶしいくらいでした。
スワンは少しずつ前に移動しました。スワンの動いた後には水色の輪のようなさざめきと緑色の芝生が見えました。あたりのほの暗い中、ここだけが天国のようでした。
「この世界はどうしてかわからないけれど、本当はすごく美しいところなのよ。全部が黒いもので覆われていて、ゴミに見えてしまうけれど。でもこすれば元通りになるのでしょう。さあ、みんな。これらの黒いものをこすり落としてやりましょう。確かにここはとても素敵な美の国に間違いないわ」
メイミンがそういうとみんなは歓声をあげてそこらへんの汚れをこすりだしました。
あちこちをこすってやると、ステンドグラスのドームや、エメラルドでできたティアラや、ルビーの宝刀、真珠でできたレース、ときには真っ白なウサギや鳥、黄金の実がなる木までもでてきました。

みなはもう夢中で互いに見つけたものを見せあっていました。と、後ろで声がしました。
「何をしているんだ！」
５人は飛び上がりました。その声が低くて冷たい響きだったからです。
声の持ち主は意外にも少年でした。年は５人とおなじくらいでしょうか。大きな黒い帽子を目深にかぶり、黒いマントで全身をすっぽり覆っていました。
少年がにらむと５人が手に持っていた美しい品物が見る間に色あせて黒いチリのついてきました。気持ち悪さに放り出すと元通りのゴミになってしまいました。さきほどのスワンももはや動き回ることもなく、首をあわれげにたれた黒いゴミのかたまりになりました。
「あんたたち、美の国へよくきたね。でもここの主人に会う前に、勝手に美の国のものに触るのはよくないね！」
少年がそういうと５人は悪かったと思って素直にあやまりました。そしてもうここが「美の国」であるのを知って驚きました。
「あんた達が来るのは知っていた。ぼくの召使が知らせてくれたから。しかも運命の女神さまの導きだというしね。それでは仕方がない。追い返すわけにもいくまい。さあ、美の国はご覧の通り。好きなだけ見ていくがよい。とりあえず王宮に案内してやる」
少年は言うだけ言うとさっさと先に立って歩きました。５人は黙ってついて行きました王宮はすぐに着きました。王宮も黒ずくめで高くそびえたっています。きっとここも、埃さえ取れば美しくきらびやかなところに違いありません。ほのかな明かりの中、５人は玉座のある広間に通されました。
「ここの王様はどちらにいらっしゃるのですか」
マルキンが質問すると、少年が返事しました。
「ぼくがここの王であり、神である」
広間には人気がまるでありません。おもむろに少年は黒い玉座に座りました。王座のまわりには大人の背丈がある黒い銅像がぐるり

と取り巻いていました。
少年がマントを脱ぐと以前ツルマエが着ていたような、前合わせの着物を着ています。一見スカートに見えるハカマというものをはいていました。それも黒い色で統一されています。少年の目と髪は黒く肌は青白い色でした。眼は鋭く人を射すくめるようにつりあがっています。メイミンが質問しました。
「ここは美の国と言うより、黒の国、と名前を変えた方がよさそうね」
少年は笑いだしました。
「そうだな。お前はよく気のつく女の子のようだ」
メイミンはぴしりと言い返しました。
「そんな大人のような口のきき方はよして。あんたも私と同じ、子供じゃあないの」
マルキンはあわててメイミンの口をふさぎました。少年は構わず顔をゆがめて笑いました。
「それもそうだ」
少年らしくもないしわがれて不気味な笑い声でした。それから小さな声で自己紹介しました。
「・・ぼくの名前はメヂュ、だよ」
少年が自分の名前を名乗ったので、５人も順番に自己紹介しました。ここにきたのが５番目の国だというとメヂュは興味を示して今まで見てきた国についてあれこれと聞きたがりました。
メヂュの最初の印象こそよくありませんでしたが、話してみると普通の男の子です。５人とメヂュはいろんな話をしました。
そのうちにメヂュが本当に一人ぼっちで寂しがり屋さんであることもわかってきました。ルドラドが遠慮がちに質問しました。
「どうしてこの国にはあんた１人しかいないの？他に人間はいないの？どこかにいったの？美の国は元から黒いほこりに覆われていたの？ねえ、どうしてなの？」
聞くなりメヂュは顔を曇らせました。

「やっぱり聞きたいのか？」
5人はうなづきました。メイミンも口を添えました。
「私達に力になれることがあるかもしれないよ。とにかく話をしてみてよ」
メヂュは仕方なさそうにうなづきました。
するとメヂュの肩に1羽の大きなカラスが止まりました。黒い羽根をゆっくり折りたたむと5人の顔を見回します。まるで話に加わってきそうでした。メヂュは苦笑してカラスの背を撫でました。
「このカラスは私の乳母でもあり、友人でもあり、大事なペットでもある。チゲルっているんだ。一緒に話そうな。チゲル」
メヂュは話し始めました。

まずメヂュは黒い玉座から立ち上がり、銅像の方に顔を向けました。その中で一番大きな王冠をかぶった真っ黒な銅像を指さしました。
「あれはぼくの父王だ」
次いでその隣の銅像を指さしました。真っ黒でもそれとわかる美しい女性の銅像です。
「ぼくの母王だ」
全部の銅像を手を広げて指さしました。
「あとのは、全部、ぼくの召使だ」
「では、あの銅像は、生きていたのね？」
メイミンがそういうとメヂュは深々とうなづきました。そして再び玉座に座りました。

美の国・中編

メヂュの話

この国は確かに美の国だった。

醜いものは何1つなく、宝石と大理石と花、この3つのもので国が作られていた。人々も美しい人間ばかりで毎日踊って暮らしていました。父王と母王は美の国の統治者として、ふさわしい容姿と気高いプライドを持っていて国民の尊敬を得ている。

ただ美しい子供が授からないのが唯一の悩みでした。でも悩むのは醜いことでしたから、彼らは悩みません。子供が授かるようにいろいろなことを試みました。

でもいくら占い、仙術、魔術をもってしても望みがかないません。とうとう父王は思い余って「魔の国」の魔王に相談しました。「魔の国」は「美の国」には及びもつかない、暗く禍々しいもので満ちている国です。魔王はその国では絶対的権力を持ち、大いなる魔力で国を治め、近隣の国々に国民が迷惑をかけたりすることがないように、眼を光らせていました。またどんな人物に対しても丁寧で困り事や相談にも誠意をもってあたる徳の高い人格者でした。ですから美の国の父王も尊敬をこめて、安心して秘密厳守でいろいろな相談にのってもらっていたのです。

相談の結果、魔王の7番目の赤ん坊を譲ってもらうことにしました。魔王がこの子が私の子供の中で一番美しく賢く「美の国」にふさわしい子供だと言ったからです。実は魔王は「美の国」にあこがれを持っていたのでした。反対に「美の国」の父王も「魔の国」にあこがれていたのです。魔王は「美の国」の父王からの相談をうけたことを光栄に思いました。だから喜んで自分の大事な子供を手放したのです。

（それが、このぼくなんだよ・・・・・、）

母王は、父王が自分に相談もなしに「魔の国」から赤ん坊を連れてきたのに腹をたてました。それでもしぶしぶながらぼくを育ててくれました。腹をたてることは醜いことだからです。ただぼくは「魔の国」の魔王の子なので黒い髪に黒い瞳を持っていました。「美の国」には、黒という色は存在しないのです。

ぼくは「美の国」に連れてこられてから、黒い髪を隠され、頭をすっぽりと覆う金の帽子をかぶせられ、黒い瞳を隠すように銀とダイヤモンドでできた眼鏡をかけさせられました。そうやって育てられたのです。

7つの年になったときの晩、ぼくの部屋に1羽のカラスがやってきました。それがこのチゲルでした。

ぼくは黒い色をしたカラスを見るのは初めてでした。チゲルは「魔の国」で赤ん坊のころのぼくの乳母をしていたそうだ。

チゲルはぼくを見て嘆いていた。ぼくの髪と目が黒いばかりにわざと隠されていたからだ。黒い色は「美の国」では醜いとされているが「魔の国」ではもっとも尊い色とされている。何も知らずに「美の国」にやられたぼくがかわいそうだと泣くのだ。

「メヂュ様、そのきらきらする帽子と眼鏡をおはずしくださいませ！本当にご自分の姿をとくとご覧くださいませ！」

ぼくはチゲルの言う通りにしてみた。そして自分の姿を初めて見た。黒い色は美しい色だとわかった。自分の漆黒の髪、吸い込まれるように黒い自分の瞳。黒っていい色だ。黒はいい色じゃないか。全然知らなかった。今まで黒の色の良さを誰も教えてくれなかった。

ぼくの生まれた「魔の国」では黒い色が大切にされているというのに、ぼくの育った「美の国」ではかえって卑しまれている。チゲルはせっかく黒い髪と目をお持ちなのに、隠して暮らさないといけないなんてと嘆きました。嘆きつつチゲルは「魔の国」の話をしてくれました。

「魔の国」の住民は、夜のとばりがおりると木や岩でできた家か

ら出て互いの魔力を使って空を自由に飛び、月で遊び、星を食べて暮らしているとのこと。いつも互いに魔力を競い合い、強い魔力を持つものは尊敬される。そういう国だと教えてもらいました。ぼくはすっかりチゲルの話に魅せられてしまいました。ぼくは「魔の国」へ戻りたいというとチゲルは残念そうに首を振ります。なんでも一度「魔の国」を出た人間はもう戻れないらしい。当のチゲルも「魔の国」に戻れないことを承知の上でぼくに会いにきてくれたのだ。

がっかりするぼくに、チゲルはただ1つだけ、魔力を授けてくれた。本当の父親である魔王から預かってきた魔力だった。

ぼくが7つになったお祝いに。

それは、「命じると黒くなる」魔力だった。

なんでも黒い色に変えられる魔力だ。ぼくは大喜びでそこらへんのものを黒く変えていったよ。魔王は自分の子供を美の国で王子として可愛がってくれるのは喜んでいたが、黒色の良さを教えられていないのを残念に思っていたのさ。チゲルは黒い色に魅せられたぼくに満足そうだった。

「そうです、それでこそ魔王の血をひく魔の国の王子様です！」

ぼくは「美の国」の誰もが持たない黒い魔力を持った。それに気付いた母王はひどく驚かれた。ぼくはわざと金の帽子と銀の眼鏡をはずす。黒い髪を長くのばして風になびかせる。黒い瞳をきらめかすようにする。美の国の召使どもは黒い色を嫌う。ぼくは王子でありながらも嫌われていた。自覚はしたさ。覚悟もした。やがて父王すらぼくを嫌うそぶりを示しだした。

「お前はもはや魔王の息子ではない。私の息子だ。そしてこの美の国の王子だ。頼むから「美の国」にふさわしく、宝石で身を飾りなさい。そのような黒い服は「美の国」にふさわしくない。似つかわしくない。どうかやめてくれないか」

父王は自らの力でもって美の国の力を強くし、私が黒く変化させたものを元通りにしました。またあらゆる黒いものや黒い影すら「

美の国」に現れることのないようにされました。
ぼくはそれに不満だった。そして「美の国」と、ぼくを育てた父王と母王に。
「美の国」は確かに美しい。だけどこの国には黒は存在しないのだ。あらゆる色彩を凌駕する黒の色が。ぼくは黒い色の良さをみんなにも伝えようとした。だけど、かえって煙たがられるだけだった。「美の国」の国民も黒の色の良さがわからないのだった。
父王はそんなぼくに困ったように教えさとされました。
「何度も言わせるな。お前は美の国の王子なのだ。もう魔の国の王子ではない、なのに今頃どうして黒に興味を持つのだ？どうか心を改めてほしい」
美しい母王もまた泣きながらおっしゃいました。
「あの下品な黒い色にこれ以上興味を持たないでおくれ・・」
ぼくは悲しかった。「美の国」は確かに美しい。ぼくも美しいものは大好きだ。「美の国」の王家の一員らしく、美しい花や鳥、月や星を愛で芸術品を好み、金と銀で部屋を飾り、美食する。だけど黒色を見るとなぜかほっとする。とうとう我慢できなくなってぼくは自分の部屋だけを黒く染めた。
それを手始めとして、ぼくは段々と自分の目に触れるものを黒いものに変えていった。父王、母王に気兼ねしながらも黒い調度品、黒い宝石、黒い影、黒い・・・。
やがて父王、母王はぼくをはっきり嫌うようになった。ある時父王は家来が大勢いるときにぼくを呼んでこうおっしゃった。
「お前はやはり魔の国の魔王の子。美の国の王子にはなれなかったな」
それをきっかけに王子のぼくに口をきいてくれなくなった家来が激増した。とうとうぼくは一人ぼっちになってしまった。乳母のチゲルだけがぼくの味方だった。
「かわいそうな、私の王子様。寂しそうな顔をしておいでだ。私が悪かったのだろう。黒い色をあなた様に教えたばかりに。こんなこ

とになってしまった」
　ぼくが部屋にこもってチゲルとばかり話をしていると、家来がやってきた。父王のご命令でぼくを追放することになったのだ。父王と母王はとうとうぼくを「美の国」の王子としてふさわしくないと決めたのだ。でもまさか追放されるとまで思わなかった。
　ぼくはどこへ行けばいいのだろう。「美の国」は出ても「魔の国」には入れない。ぼくに死ねというのか。ぼくは悲しみのあまりに持てるだけの力を使った。
　そう、持てるだけの、ぼくの力を思いっきり！
　ありったけの力で、まわりが「黒く」なるようにしたのだ！
　すると「美の国」全体が黒くなってきた。どこもかしこも黒くなった。空も山も庭も木も・・・。人間でさえ、どんどん黒くなっていった。黒くなると美の国のものは動かなくなってしまう。これは大発見だった。あれほどきらびやかだった「美の国」は黒い静かな沈黙の国になってしまったのだ！
　これにはぼく自身が驚いた。あわてて力を抑えようとしたけれど、抑えきれなかった。黒い魔力の力はぼくから飛び出して美の国中を拡散したのだ。
　ぼくは大広間に出た。そこももうすでに黒く染まっていた。そこにいた父王、母王ですら黒く染まり、動かない黒い銅像になってしまった。それでもなお、黒い力はぼくの身体からどんどん出てしまい、止めようがなかった。
　ぼくは気を失ってしまった。しばらくして目が覚めると、大勢の家来の変わりに、チゲルと沢山のカラスとこうもりがぼくを取り囲んでいた。
　チゲルは言った。
「さあ、私の王子様。あなたの力は「美の国」を支配してしまいましたね。やはり魔王の子は違います。たった１つだけの魔力で。黒色に変えていくだけの力だけで・・・。さすがでございます。この「美の国」と「黒の国」に変えてしまわれて・・。ご立派でござい

ます。
　これからは好きなことを、好きなだけなさいませ。あなたがこの国の支配者でございますから！」

　暗黒の世界で動いている人間はぼく一人だけだ。
　ぼくは黒の国に変えるだけの力はあったのかもしれないが、元に戻す力はない。ぼくは毎日1人でカラスとこうもりを相手にして暮らしていた。
　さみしくなるとこの玉座にやってきて、父王と母王の銅像のそばで眠る。母王の銅像のお顔はいつも涙が流れていて、それは絶えることがない。

　メヂュの話はこれで終わりだった。
　短くもせつない話だった。5人が母王の銅像を見上げるとなるほどお顔に涙が伝わっています。メイミンはメヂュに言いました。
「メヂュ。このままでいいの？元の世界に戻す気はないの？さみしくないの？」
　メヂュは首を振りました。
「いや、さみしいけれど、これでいいのだ。だってぼくには元に戻す力はないし、よしんば元の「美の国」に戻せてもぼくの居場所がないだろう。父王も母王もぼくを追放しようとしていたし、黒い色は絶対に認めてくれなかったし・・」
　マルキンは涙を流しました。
「まあ、これが「美の国」だなんて私には信じられないわ。なんという悲しいお話なのかしら」
　ツルマエも言いました。
「魔王の国に戻れればよかったのにね、残念ね」
　ミイクも言いました。
「このままではいけないよ。なんとかしなくては、」
　最後にルドラドが言いました。

「私達に何かできることはないかしら」
メヂュは微笑みました。
「ぼくの話を聞いてくれただけでいいさ。ありがとう」
メヂュは5人に向かい改まって言いました。
「君達は本当にいい人だ。ねえ、いつまでも友達でいてくれないか。この国にいつまでもいてくれないか」
5人は長くはいられないけれど、友達になれるのはもちろんだと返事しました。
その習慣です。
今までメヂュの肩に止まっていたチゲルが、いきなり天井高く飛び上がりました。チゲルは高く高く跳びます。旋回しているチゲルを仰ぎ見ていたメヂュの目がきらっと光りました。メヂュは大きく手を広げました。
メイミンはとっさにメヂュの振り上げた腕をふさごうとしました。はがいじめにしようとしたのです。それはまったくの一瞬でした。
メイミンの着ている服のおかげで動きはにぶく、メヂュの力はすべて押さえられませんでした。時は遅く、マルキン、ルドラド、ツルマエ、ミイクの4人がたちまちのうちに黒くなり、銅像になって動かなくなってしまいました。
メヂュをおさえていたメイミンだけが無事でした。
「メヂュ！私の友達に何をしたの？黒い銅像にしてしまうなんてどういうつもりなの！」
メヂュはメイミンから離れようともがきました。
「うるさい！お前達はいつまでも友達でいてくれるといったではないか、放せ！」
「放すものか。お前の身体から離れると、私の身体も黒い銅像になるのだろう。そうはいくものか。このメイミンの身体は私のもの。メヂュ！お前ごときに好きなようにはさせないよ！」
メイミンはメヂュの身体をぐいぐいと締め付けました。運命の女神さまからもらった服を着ていなかったらメヂュはとっくに絞め殺

されてしたでしょう。
「あんたってば、何と言うことをするのよ。私の友達を元通りにしてよ」
「それはできないよ・・・」
メヂュが答えるとメイミンは泣きだしました。そしてメヂュの身体から離れて怒鳴りました。
「じゃあ、いいわ。私もあの４にんと同じように黒い銅像に変えてよ。私達はずっと一緒に旅をしていたのだから。友達なのだから。私ひとり、生身の体で旅をして何の楽しみがあるというの。さあ、好きなようにして。さっさと黒い銅像にしてよ！」

美の国・後編

メヂュは信じられないという表情でメイミンの泣き顔を見ていました。

「言っただろう。他の４人は元に戻らないよ。ぼくは黒く変えられても元に戻す力はない。ねえ、メイミン。ぼくと仲良くしよう。君は強い。強いのはぼくの理想なんだ」

メイミンはメヂュをにらみつけ首をふりました。

「あんたのようなわがままな子とは友達になりたくない。さあ、元に戻る方法を教えなさい。私がなんとかするから。私しか助けてあげられないから、できることからしなくては」

「ぼく、本当に知らないんだよ。何度も言わせないでくれ」

メイミンは絶望したように４人の銅像に抱きつき泣きだしました。

メヂュは羨ましそうに銅像とメイミンを見ています。そして疲れたように玉座に腰をおろしました。手を組んで物思いにふけ、ひとり言を言いました。

「ぼくにはここを変える力もない。ここから出ていく力もない。だからこの「黒の国」を大事にしたい。もし黒の国を元に戻す力があったとしてもぼくは戻さない。

「美の国」・・美しいものがあふれる永遠の国、父王も母王も美しく、国民が慕いよっていた。美しさをいつも誉めたたえられていた。だけとその王子のぼくときたら、どうだ！黒い髪と黒い瞳、「美の国」にない色を持って「魔の国」からやってきたぼく。王子とは言われていても、親しく話しかけてくれる人はいなかった。いや、それはぼくが父王の本当の息子ではないという理由だけではなかろう。また黒い髪と瞳のせいでもない。

ぼくは元から人から慕われる何かが欠けていた。つまりぼくは人の上に立てる人物ではないということだ。

父王はなぜそんなことをしたのだろう。「魔の国」から黒い色は

切り離せないというのに、なぜ魔王に頼みごとをした？魔王はなぜぼくを「美の国」にやった？一体、なぜ？
　人を楽しませたり、明るい気分にさせることがぼくにはできない。なのに、父王や母王は微笑み１つで、そば近く仕える家来をなごませ、「美の国」に幸福をもたらせられる。私のような暗い性格はみんなに嫌われて当然だ。父王や母王、家来、誰にも好かれない。そしておまけに黒い色が好きで崇拝しているのだから」
　メヂュは涙を流しました。メイミンはメヂュに言いました。
「だからこの国をずっとこのままにしておくつもりなのね」
　メヂュはうなづきました。
「元に戻せばぼくは追放だ。それは嫌だ。ここは「美の国」での思い出がある。一時でも美しい父王と母王にかわいがられた思い出がある。だから・・、ぼくはこのままにしておくつもりだ」
「・・・、他の人はどうなるの？」
「ぼくは他の人のことなど、どうでもいい」
　メヂュの姿はあまりにも打ちしおれていました。メイミンは、勝手な言い分をきいてもあきれるだけで、怒る元気でも出てきませんでした。でもこうしてじっとしているだけでは、何の解決もできません。黙っていると、この暗黒の世界は物音１つせず、不気味な世界です。大切な４人の友達も黒い銅像になってしまい、本当にどうしてよいか困り果ててました。「私は確かに今、困っている。でもあんたには負けない。何か方法を見つけるわ。私はね。この旅に出かける前までは天下無敵の「武の国」の王女だったのよ。力比べでは誰も私を負かすものはいなかった。こんなことでくじけてなるものか！」
　メヂュは目をあげておもしろそうにメイミンを見つめました。
「君がそんなに力自慢の女の子に見えないけれど・・・。第一君が来ている服はなんだい？体中着膨れしていて、とても肥って見える。強そうになんか全然見えないよ」
「この服はね、あの意地悪な運命の女神さまのお見立てなの。私自

身はこんな服、大嫌い」
「だったら脱げばいいのに。ぼくは君がどのくらいの力もちか、見てみたいよ」
「脱げるものなら、とっくの昔に脱いでいるわよ」
メヂュはくすくすと笑いました。
「君となら、なんでも話せそうだ。母王ほどには君は美しくないけれど、楽しい女の子だ。ぼく達、友達になろうね」
メイミンは怒りました。
「私と友達になりたかったら、まず、その４人を元の姿に戻してよ」
「それはだめだ。ぼくにはできないよ。それにできたとしても、５人でこの国を置いて出て行ってしまうだろう。だめだよ」
メヂュはさみしそうにいいました。するとチゲルが天井の黒いシャンデリアから下りてきてメヂュの肩に止まり、愛しそうにメヂュの髪をくちばしで撫でました。
メイミンはチゲルを見てはっとしました。そもそもこのカラスがいけないのだ。こいつがメヂュの部屋にやってきて「魔の国」の話を教えたのだ。黒い色の良さも教えた。黒いものに変える力も授けた。
そうだ！
黒の力をメヂュに授けたのがこのカラスなら、黒の力を消す方法も知っているかもしれない。ここまで考えるとメイミンはもう躊躇しませんでした。
さっとチゲルに襲い掛かりました。チゲルは気配を察して飛び上がろうとしました。が、いち早くメイミンはチゲルの羽をしっかりとつかまえて離しませんでした。メヂュは驚きチゲルを助けようとしました。チゲルも必死な一鳴きで仲間のカラスとこうもりを大勢呼んでメイミンをくちばしでつついて放させようとしました。
メイミンはカラスどもにつつかれても全然平気でした。運命の女神さまにもらったその分厚い服を着ていたからです。女神さまにもらったものが今はじめて役に立ったわ・・・。

メイミンはそう思いながら、カラスたちと格闘しました。カラスたちはメイミンに振り払われただけで黒い闇の中へと消えていきます。

ついに最後の一羽になりました。チゲルです。メイミンはチゲルに渾身の力を込めて格闘しました。チゲルも負けずに応戦します。とうとうチゲルの羽が激しくもがいた拍子に、2枚ともぽろりと取れてしまいました。飛べなくなったチゲルをメイミンは足でぐいと踏みつけました。

「あんたなら「美の国」を元に戻せるでしょう?さあ、やってごらん」

羽をなくしたチゲルは涙を流しながら言いました。

「私にはそんな力はありません。ただ私は王子を赤ん坊の時からお世話させてもらっていました。「美の国」でせっかくの黒い髪と瞳を隠して過ごされるのがかわいそうでならなかったのです。それで黒い色に変える力を魔王様に特にお願いして授けてもらったのでございます」

「では、その魔王に会えば、力は取り消してもらえますね」

「いいえ、魔王様は「魔の国」の王様です。魔王様には誰にも会えませんよ。私は一度出て行ってしまったので戻れません。羽もなくなってしまったし、私はもうじき死ぬでしょう。元の「美の国」へは戻せませんよ」

怒りのあまりメイミンは、チゲルを思い切り踏みつけました。するとチゲルはとうとう死んでしまいました。メヂュがメイミンを押しのけてチゲルに取りすがって叫びました。

「ああ、とうとうぼくを理解してくれた、たった一人の味方までもが死んでしまった。ぼくはこれからどうしたらいいのだろう!」

メイミンはこのとき、力がみなぎるのがわかりました。たくさんのカラスにつつかれて服の一部が破れていたのです。服に抑え込まれていたメイミンの力が蘇ったのです。大喜びで服を脱ぎました。

そして銅像が持っていた大きな剣を取り上げてぶるんぶるんと振

り回しました。この旅行以来メイミンは初めて元気が出てきたようです。力に任せて走り回っていると、銅像の１つに当たって転んでしまいました。

ふと見ると、メヂュに黒い銅像に変えられてしまったみんながメイミンの方を向いています。

「わかったわ、助けてあげる。黒いものはこすり落とせばいいのよ。すごく時間がかかるだろうけど、私はがんばるわ」

メイミンは自分で自分を自慢するだけあって、ものすごく力の強い女の子でした。まず涙を流してこちらを見つめているメヂュの母王の銅像に駆け寄って思い切り抱きついて揺すり挙げました。

何度も何度も揺すっているうちに黒いかけらがはらはらと落ちていきます。やがて、がらがらと音をたてて黒いものが一気に落ちてしまいました。すると黒い銅像から金髪と青い透き通る服を着た大層美しい女性が飛び出てきました。その女性はメイミンの手をやさしく放して自分の身体を愛しそうに撫でました。あらゆる宝石で身体を飾り立てた「美の国」のメヂュの母王が出現したのです。

「ああ！うれしい・・・私は蘇りました。ああ、そこのあなた。御礼を言いますことよ」

「美の国」の母王は手を大きく広げられました。「美の国」の力が蘇り、今まで黒くくすんでいたものが光を浴びて元通りに輝いてきました。

「美の国」の父王も４人の友達もみんな、元の姿に戻ったのです！

メイミンはうれしくて５人で何度も抱き合い、「美の国」の復活を喜びました。「美の国」は復活のお祭りで大変な騒ぎでした。

５人はこの国にあるありとあらゆる美しいものを見て楽しく過ごしました。「美の国」の父王と母王はメイミンに感謝しました。

メイミンは「美の国」一番の英雄です。何日か楽しく暮らしているうちにあれからメヂュの姿が見えないのに気付きました。

急に心配になって、祭りの中、城内をくまなく探しまわりました。他の４人も手分けをして探しました。すると、メヂュは王宮の地下

の銀の倉庫の中にいました。羽のちぎれたチゲルをかたく抱きしめたまま、冷たくなって死んでいました。メギュの死体が見つかっても、父王と母王は知らん顔でした。「美の国」を一時でも「黒の国」に変えた犯罪人としてメギュを弔う人は誰もいませんでした。犯罪人を弔うのは「美の国」では美しくない行為でした。

メイミンは孤独の影を背負ったまま死んでいったメギュの心を今更ながら思いやりました。そしてかわいそうに、かわいそうにとつぶやくのでした。

ある時「美の国」の母王がルドラドとツルマエとメイミンの3人を呼ばれました。

「さあ、あなたたちにとても、良いものを差し上げましょうね」

みんなは「美の国」の母王の絢爛豪華な美しさにあこがれていましたから、そのお申し出にわくわくとしていました。母王がくださったのは化粧品でした。

しかも。

ルドラドには黒い肌を白くする化粧品。

ツルマエには黒い髪を青く染める化粧品。

メイミンはそれに加えて黒い眼を緑に変える目薬。

3人は自分の容貌にそれぞれ誇りをもっていたので受け取りを拒否しました。母王はがっかりされました。そして優しいお声で3人を諭されます。

「美の国には黒い色は歓迎されないのですよ。メギュがどうなったかご存じでしょ？黒いお色は「美の国」に不幸をもたらせます」

どうも「美の国」の母王は悪い人ではないけれど、自分の価値観をひとに押し付けるのがお好きなようです。3人は顔を見合わせてこの美しい母王に育てられたメギュの孤独を思いやりました。

「美の国」は美しいものであふれ、光り輝き、影すら存在しないところです。

きらびやかで豪華で・・・・

でも5人は次第に飽きてきました。それで「美の国」をおいとますることにしました。「美の国」の父王も母王も5人が去るのを惜しまれました。特にメイミンには国の難事を救ってくれた英雄としていつまでも「美の国」にとどまっていてほしいと言いました。そこまで言われてメイミンもうれしかったのですが、後継ぎにしてもよいとまでいわれてとてもびっくりしました。

「メヂュの代わりだよ。もう君には「美の国」にふさわしい美しい名前も用意してあげている。ビィフル・ジョリという名前だよ。どうかね、この美しい響き。美しい服も部屋も使用人も全部用意してあるよ。だからここにいてくれるだろう」

メイミンは自分の意向も確かめず喜んで「美の国」にとどまると決めつけておられる父王に腹が立ちました。そしてメヂュが「黒の国」に変えてしまって元通りにするつもりはないといった気持が理解できたのです。

「美の国の父王よ、私を後継ぎにしてくださるなら条件がございます。私の黒い髪と黒い瞳に似合う黒い服と黒い部屋を用意してください」

メイミンが父王と母王にそういうとお二人は顔を赤らめて返事なさいませんでした。

それから5人は仲良く揃って「美の国」を去りました。

エピローグ

水の国
緑の国
空の国
花の国
美の国

いろんな国をまわったね、いろんな出来事に出合えたね、
いいことがあった、悪いことも起きた
いろいろな考え方ってあるんだ、幸せの形もいろいろ、
　でもおもしろかった
ああ、とてもおもしろかった

　すてきな楽しい旅行になったね
私、あなた方に出会えたのが一番うれしかった
私もよ、私も。
ぼくもだ。私だって。

　5人は歩きながら輪になって踊り出しました。「美の国」ははや遠のき、まわりは何もない荒れ地です。でも5人は楽しげに歌を歌い、踊ります。
　歌ううちにまわりの荒れ地に花が咲きはじめました。緑の芽がふき鳥がどこからか集まってきました。太陽が輝き、風がふき、快適です。
　5人はずっとしっかりと手をつないだまま、歌い続けました。一曲終わるごとにお互いにキスをしあいます。そうやって踊り、跳び、走り、また歩きました。
　すると前方に見覚えのある扉が見えました。
　その扉のむこうには運命の女神さまが立っておられるのがみえま

す。女神さまは５人を出迎えておられたのです。
　５人は運命の女神さまに向かって言いました。
「ただいまあーっ！」
　そして一気に扉の中へと、飛び込んだのです。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」」

　ここまでくると急に天が曇り、何も見えなくなりました。私ははっとして女神さまからお借りした机の上の鏡を見やります。鏡はすでになくなり、運命の女神さまが私を覗き込んでおられました。
「５人の旅は無事終わりました。５にんが別れるところまでは見ることもないでしょう」
　女神さまはこうおおせられました。私はいままでに書きとった大量の紙の束を見つめました。
「だけど・・、女神さま。私は５人がそれぞれの自分の国に帰った時、そしてそのあとの行動も見てみたいと思います」
　女神さまは微笑みました。
「あの子たちは本当にいい子だ。あの５つの国の旅を見守っていて、私もますますあの子たちが好きになったよ。お前もそうなんだね」
　私は深くうなづきました。

「５人のその後を見る前にまず、その紙の束をなんとかしてまとめなくてはね。これ以上は紙がないし、収拾がつかなくなるだろう。その記録を読み返してごらん。そのうえで５人の行く末をみたいならまた鏡を貸してあげよう。そうだ。これを誰かに見せるのもいいね。そして感想を言い合うのもいいかもしれないね」
　私は運命の女神さまの言葉に従い、まず紙の束を整理してまとめ

ました。順番に整理して積み上げていきました。そしてこれを1冊の本にしようと思いました。

・・これがその本なのですよ、みなさん。

私の記録分をここまで読んでくださったあなたに「ありがとう」といいましょう。

ではまた、ごきげんよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1476p/

ＦＯＲＴＵＮＥ　ＦＡＶＯＲＳ　ＴＨＥ　ＢＲＡＶＥ（仮題）

2011年1月30日18時25分発行